「物部（もののべ）」は
天皇の形容詞だった！

＊＊＊古代史の謎は血縁関係で解ける＊＊＊

中谷酒造　六代目当主　　中谷正人

2023年の改修にあたって

纒向遺跡発掘成果をまとめた最新の書物「纒向学からの発信」（桜井市纒向学研究センター編　大和書房2023年3月15日　第一刷発行）を読みました。

同書は2013年7月から2020年2月にかけて14回開かれた纒向学セミナーで講師を務めた14人の学者の発表とその都度行われた桜井市纒向学研究センター長・寺沢薫氏との対談で構成されています。それら専門家のほぼ一致した意見は、纒向は西暦200年頃に突然現れた国家的な祭祀を行う首都の遺跡ということです。発掘された大型建物は弥生時代のものとは時代を画する整然性を持つ規格性の高いものです。纒向を都とした国家は西暦200年という成立時期から見て魏書東夷伝倭人条（魏志倭人伝）に書かれたヒミコ（卑弥呼）を盟主として建てられた連合国・ヤマト（邪馬台国）と考えざるを得ないようです。ならば3世紀前半と考えられた出雲政権はあり得ず、それを滅ぼすヤマト国の東遷（北部九州を発し奈良盆地に入って都を築く神武東征）もなかったことになります。

纒向を首都としてヤマト国が誕生するまでの経緯は次の通りです。

弥生時代が終わる2世紀まで、漢王朝の中国にとって倭国とはイト国（福岡県糸島地方）でした（第12章　柳田康雄）。

西暦127年に二千年に一度の驚異的な量の雨が日本列島に降って各地に洪水が起き、その直後に大干ばつ、そして30年ほど干ばつ傾向が続き弥生社会は壊滅します（第5章　赤塚次郎）。多くの集落やクニは消滅もしくは混乱し、人口は急減したことでしょう。「倭国乱、相攻伐暦年」（魏志倭人伝）、灌漑用水や食料をめぐる争いが頻発したはずです。

そこで「共立一女子為王、名曰卑弥呼」（魏志倭人伝）。主たるクニの話し合いでヒミコを王に擁立し新しい連合国を建てたのです。気候変動は落ち着き、ヤマト国は徐々に発展していきます。ヒミコは景初二年（238）以降魏に使者を送り親魏倭王の称号を得、正始八年（247）頃に死去。ならばその20年後に纒向に築造された日本最初の大前方後円墳・箸墓はヒミコを葬ったものと考えても矛盾は生じません。

では記紀に詳細な神話が残る出雲はヤマト国とどう繋がるのか。出雲市の西谷墳墓群4号墓はヤマト国ができる前の2世紀末に造られています。大古墳造営には大量の鉄鋤が必要

です。出雲には他の地域に先駆けて製鉄技術が伝わりました。出雲は新しくできた連合国ヤマトの為に製鉄技術を伝えヤマト国を支援しました。三輪山には出雲の神・大物主を祀り三輪山の南に出雲という地名が残ります。出雲の太陽神祭祀は出雲の地名が残る枚岡神社（東大阪市出雲井町）で行われました。祭祀を担った中臣氏のおかげで出雲神話が8世紀初頭に編纂された記紀に記載されたと私は考えています。

以上を基に改修を行いました。その箇所は次の通りです。

第一章　　出雲から大和へ
4. 出雲の痕跡、5. 出雲の祭祀

第二章　　物部王朝
前文

第六章　　物部の血と藤原不比等
3. 藤原家の誕生

第九章　　神器の創造と変遷
2. 王朝の変遷

第十一章　大和に残る製鉄神の累積
3. 出雲の国　4. 出雲王朝から崇神王朝へ　6. 信仰の累積　7. 今日の形

第十五章　鏡を割った思想
2. 邪馬台国の東遷　3. 7 世紀末の常識　4. 箸墓の主　5. 蛇と鏡の分離　6. 割った人

これらの改修は筆者が論じた内容の根幹に影響を与えるものではありません。又、この改修に併せ多少の文言の変更を行ったことも申し添えます。

2023 年 5 月 20 日　中谷正人

はじめに

日本の古代史研究の基礎となる資料は、日本最初の正式な歴史書である日本書紀（にほんしょき。720 年に完成）、及びそれに先だって編纂された古事記（こじき。712 年完成）です。これらが書かれた目的は、一義的には隣国の中国にならって国家の体裁を整える一環としての国史整備にありました。中国はその当時既に二千七百年の歴史を持ち、唐（とう）という世界帝国でした。日本は、中国から律令制（りつりょうせい）という政治体制を導入し、中国にならって平城京の建設を行っていました。

日本が弥生時代から文明時代に入るのは 3 世紀のことですが、古事記、日本書紀（以下、記紀）では中国に対抗して日本も長い歴史と文化を持つ偉大な国であるとしました。即ち、日本国の誕生を約九百年溯らせ、太陽神アマテラスの子孫である初代神武（じんむ）が紀元前 7 世紀に即位してから天皇家が一貫して国を治めてきたことにしました。そのため初代から 15 代応神（おうじん）天皇までは在位年を間延びさせることになり、その結果として内容が乏しかったり、王朝の興亡があったにもかかわらず天皇の血筋を万世一系とするなど、記紀は実際の歴史を意図的に改ざんしています。

改ざん前の真実の歴史に近づくにはどうすれば良いでしょう。やはり記紀に頼らざるを得ないのです。幸運なことに記紀は共に同じ歴史を記述方式を変えて書いてくれています。両者を比較することができるのです。仔細に見ますと、矛盾した記述があることに気付きます。それが手掛かりです。記紀に矛盾がある場合、先に編纂された古事記の記述を日本書紀で訂正していると考えるのが素直です。両者に矛盾がなくても内容に矛盾がある場合もあります。それも大きな手掛かりです。

或る時私は古事記を読んで、「物部」を天皇の形容に使っている場面を発見しました。「物部」（もののべ）といえば豪族の名称ですから私は我が目を疑いました。物部氏が天皇家ということはあり得るのでしょうか。私はそう仮定した場合に矛盾が生じないか、記紀に当たりましたが何の不都合もなく収まります。物部氏は天皇家のことだったのです。その過程で、従来豪族とされていた葛城（かつらぎ）氏の正体も解明できました。蘇我（そが）氏の実態も判明しました。その成果をまとめたものが本書です。

ここで読者の皆さんは一つの疑問を感じられたはずです。今まで古事記を読んだ人は何万人、何百万人もいるはずなのになぜ「物部」を天皇の形容に使っていることに気付かなかったのか、という点です。その理由は原文で読まなかったからです。古事記の原書は漢文、即ち中国語で書かれているのですが、江戸時代の著名な国学者・本居宣長（もとおりのりなが。1730-1801）という人が日本語に訳した文章を研究者は読んできたのです。

私が気付くに至った経緯を具体的に述べましょう。

「邪馬台国はどこにあったのか？」、「天皇家のルーツは？」など、多くの日本人は日本古代史に興味をお持ちのことでしょう。私もそんな一人でした。

私がとりわけ興味を深めるきっかけとなった本があります。それは新潮文庫の「古代史の窓」です。著者の森浩一先生（1928-2013）は NHK 教育放送の高校講座日本史を担当されていたこともあり、私にとっては馴染み深い方でした。「古代史の窓」は平成 7 年（1995）に新潮社から刊行され、同 10 年に文庫本化されたもので、森先生の長年の研究成果に基づく深い知識と洞察に充ちた素晴らしい入門書です。それ以降、日本古代史に関する書物を多く読むようになり、古寺、神社、遺跡巡りの回数が増えました。

一方で私は中国の歴史にも興味があったところ、知人から陳舜臣著「中国の歴史」を勧められました。陳舜臣氏は神話時代から現代までの膨大な中国史を一人でまとめるというとんでもない偉業を成し遂げられました。文庫本でも 7 巻にわたる大作ですが、それを繰り返し通読していました。

2011 年のことです。弊社顧問の先生が送って下さる季刊「明日香風」の 121 号を開いて私はハッと気付いたことがありました。古事記研究の第一人者・本居宣長著の「訂正古訓古事記」の一部が掲載されており、古事記原文では「物部」を天皇の形容詞として使っていたのです。

古事記は日本の正史（国の正式な歴史書）である日本書紀とセットで編纂されたもので両者の内容はかなり重複しています。日本書紀は古事記から 8 年遅れの 720 年に完成しましたが、いずれも漢文で書かれています。

当時中国は日本から見れば先進国であり、唯一の大国。中央集権国家を目指す日本の手本でした。日本書紀が編まれた理由はその流れの中で、日本を先進国・中国と並ぶ立派な

国としてその体裁を整えることにあり、中国を意識して漢文で、中国の記述方式に則って記述されました。

その中国には避諱（ひき）という規則があります。諱（き）とは本名のことで、皇帝といった上位の人の文字を避ける、即ち使わないということです。例えば前漢の高祖劉邦（前256-前 195）の諱「邦」を避けて、「中邦」を「中国」に、「相邦」（現代の総理大臣にあたる地位）を「相国」に変えました。「邦」（ほう。現代中国語では bang）と「国」（こく。現代中国語では guo）の発音は異なりますが意味は同じです。避諱がなければ今日の「中国」は「中邦」だったかもしれないということです。記紀にはこの避諱の規則も導入されているはずです。

上記、季刊「明日香風」121 号に掲載されていたのは、オケ（後の仁賢天皇）とヲケ（後の顕宗天皇）兄弟が播磨国で発見される部分です。ヲケが詠む歌の中で兄弟の祖父である履中天皇（17 代りちゅう。在位 421-438）の形容詞に「物部」を使っており、本居宣長は、そこに「もののふ」とルビを振っています。

ご存じの通り「物部」は「もののべ」と読み、それは豪族の名前です。避諱そのものではありませんが、避諱の考え方からすれば豪族の名前と同じ漢字を天皇の形容に使うことはあり得ません。

避諱を前提とすれば天皇の形容詞である「物部」を「もののふ」と読み分けるべきではなく、豪族名と同じく「もののべ」であり、それは「物部氏の一族の天皇」ということを意味します。「物部」を天皇の形容詞に使う以上、履中天皇は物部氏だったのです。古事記の編者は、引用したのが歌詞、それもおそらく実在の歌詞であったばかりに「物部」を消し忘れたものと推定できるのです。

本居宣長は平田篤胤（ひらたあつたね。1776-1843）に繋がる「天皇一神教」の創始者です（井沢元彦著「逆説の日本史 17 江戸成熟編」第二章国学の成立と展開編）。本居宣長は「天皇は神であり物部氏など他の民とは次元の異なる至高の存在である」とする自己の主張を通すために、敢えて避諱を無視して「物部」を読み分けることで自己の主張に矛盾する記述を封じ込めました。その後の研究者は本居宣長のルビを振った読み下し文を研究の基礎に置いたばかりに古事記が残した手掛かりを見逃していたのです。

「物部天皇」があるなら対等な立場で争った蘇我氏はどうでしょうか。記紀では越前（えちぜん。今の福井県）からやってきた継体天皇（26 代けいたい。在位 526-531）が亡くなって 6 年目に蘇我氏が具体的な活躍を始めています。即ち蘇我稲目が大臣になり欽明天皇に二人の娘を嫁がせます。継体天皇の血筋を蘇我氏と考えても矛盾がないばかりか、そう考えない限り蘇我氏の「突然の出現」を説明できないのです。

物部氏であった天皇家には蘇我氏の血が入りました。645 年の蘇我本家滅亡後、両氏混血の血筋が「天皇家」として確立し、やがて編纂される記紀では天皇の血筋を初代神武天皇に始まる万世一系と偽装するために、本来天皇家であった物部と蘇我両氏は天皇家とは別の豪族とされたと推定できるのです。

このように記紀の内容は全てが事実ではなく、編纂を命じた藤原不比等（ふじわらふひと。659-720）と、それに先だって記紀の基になる歴史書を編纂させた天武天皇（40 代てんむ。在位 673-686）の意図により手が加えられています。記紀に矛盾がある部分を手掛かりにして理由を考えます。最新の考古学の成果、中国の史書、上記「避諱」といった歴史常識など信頼できるフィルターを通すことで操作される前の事実が浮かび上がってきます。私は突飛な思いつきや想像を廃し、あくまでも記紀の記述から得られる事実、或いは推定可能な事実に基づいて歴史の再構築を目指しました。

私はプロの学者ではありませんが、今までの知識の蓄積があります。中国史の知識があります。漢文、それに現代中国語が読めます。これは記紀の原文検証に役立ちます。不足する知識はネット上の検索機能を使って補い、また先人の研究成果を利用しています。こうして新しい切り口で日本古代史をまとめたものが本書です。

応神天皇に始まる「物部天皇」の血筋と葛城氏の正体、蘇我と物部の混血比率を巡る争いから生まれる天皇家の概念に加え、法隆寺再建の謎、天武天皇の正体、伊勢神宮が二度創建されたこと、日本神話と神器の段階的な成立過程、山の神と太陽神の分離など、読者の皆様には古代史の実態が霧が晴れるように明確な形で浮かび上がる様をお楽しみいただけるものと期待しています。

2017 年 7 月 26 日　中谷正人

目次

第一章	出雲から大和へ	P.7
第二章	物部王朝	P.11
第三章	蘇我王朝と物部の血	P.24
第四章	法隆寺と斑鳩寺	P.28
第五章	天武天皇	P.34
第六章	物部の血と藤原不比等	P.39
第七章	物部氏と石上神宮	P.41
第八章	皇祖神アマテラスの創造	P.44
第九章	神器の創造と変遷	P.47
第十章	物部氏と善光寺	P.58
第十一章	大和に残る製鉄神の累積	P.64
第十二章	吉備津宮	P.67
第十三章	秦氏がもたらしたもの	P.70
第十四章	平城遷都と山の神	P.74
第十五章	鏡を割った思想	P.78

記紀に記された日本の固有名詞について。表音に使った漢字が両書で異なることがありますので、読者の便宜のため基本的にカタカナで表記します。

天皇名は奈良時代後期から使用される漢字表記のおくり名を使います。

西暦年表示を標準としています。括弧内に半角数字のみ書いたものは西暦年を示します。人名の後に二つの数字をハイフンで結んだものは生年と没年を示します。

第一章　出雲から大和へ

2 世紀。中国には漢という国があり、北は今日の遼寧省あたりから南はベトナムまで、西はタリム盆地の手前までを領土としていました。その 2 世紀の第 4 四半期に入ると地球規模で気温が下がりました。作物は稔らず、各地で飢饉が起きたことでしょう。中国では 184 年に黄巾の乱と呼ばれる農民反乱が起こり漢は実質上統治機能を失います。寒冷な気候を避け、西からは遊牧民族の羌（きょう）や氐（てい）が侵入を始め、北からは騎馬民族の匈奴（きょうど）が南下してきます。気候は短期間である程度回復したようですが、3 世紀に入ると漢は滅び、魏呉蜀の三国時代へ突入します（厳密に言えば魏の北にあった燕（公孫氏）を含む四国時代であり、朝鮮半島を支配していた燕が魏に滅ぼされた翌 239 年にヤマト国のヒミコは魏に遣いを出します。ヤマト国については第十五章でも述べます）。

気候寒冷化の影響で朝鮮半島に南下してきた民族から日本に製鉄技術が伝わります。気候が回復するにつれ弥生時代が終わり古墳時代が始まります。最初に大古墳が築かれるのは 2 世紀末の出雲。まずは出雲から話を始めましょう。

古事記と日本書紀（以下、記紀）にはいわゆる出雲神話が書かれています。因幡（いなば）の白ウサギを助けるのは大国主（おおくにぬし。注）。大国主は海の彼方からやってきた少彦名（すくなびこな）の助けを借りて葦原中国（あしはらなかつくに）を平定します。これらの舞台は出雲（島根県東部）、伯耆（鳥取県西部）、因幡（同東部）ですので、葦原中国はこの一帯のことでしょう。近年の発掘調査で 2 世紀から 3 世紀にかけての同国の様子が明らかになってきました。

注：大国主はその名の通り葦原中国の王であるが、国土創造神とも考えられる大己貴（おおあなむち）はじめ大物主（おおものぬし）、八千戈（やちほこ）、大国玉（おおくにたま）、葦原醜男（あしはらのしこお）など多くの名を持つ。記紀の編者は出雲の神々を「大国主」に代表させようとしたものと思われる。

１．都市

葦原中国の、特別な集落と考えられるのが妻木晩田（むきばんだ）遺跡です。

遺跡は鳥取県西部の大山町の日本海から 2km 離れた丘陵の尾根上にあり、900 棟以上の建物跡、30 基以上の墳丘墓が発見されました。「東西約 2km、南北 1.7km、面積約 170 ヘクタール（国史跡指定約 152 ヘクタール）にも及ぶ弥生時代の遺跡としては国内最大級の広さを誇ります。」（鳥取県立むきばんだ史跡公園パンフレットより）

同時期に全ての建物が存在した訳ではなく、紀元前後から 3 世紀後半までの 300 年弱、人口密度がかなり低い集落であり続けたことが判明しています。墓地群が建物のそばにあることから祭祀を行う特別な集落であった可能性が高そうです。

3 世紀後半にこの集落は放棄されます。後に述べますが、ヤマト国との戦に敗れたものと私は考えています。

写真１：妻木晩田遺跡から見る日本海と米子の街
写真２：竪穴式住居骨組（鳥取県むきばんだ史跡公園弥生の館）

２．港湾集落

鳥取県中部、倉吉市街と鳥取市街の中間あたり、青谷平野には港湾集落がありました。青谷上寺地（あおやかみじち）遺跡です。妻木晩田（むきばんだ）遺跡から東に 37km です。

この遺跡は日本海に臨む入り江にあり、護岸工事の跡や倒壊したまま泥に埋まった建物、大量の生活用具、人骨が発掘されました。泥の中は適度な湿度があり、酸素が遮断されますので、木製品が非常に良い状態で残りました。人骨には脳も残っていました。

住民の主たる糧は漁業と農業。骨角製のヤスやモリ、釣り針、石で作られた漁網の錘（おもり）、それに木製の鍬や鋤、石包丁などの農具が出土しました。狩猟も行いました。イノシシや鹿の骨がたくさんみつかっています。鉄製の鑿（のみ）や刀子で精緻な木製品も作られました。

驚くべきは交易範囲の広さです。北陸、北九州、瀬戸内海沿岸、近畿地方で作られた土器、それに中国・新王朝（紀元 8-23）の貨幣、朝鮮半島で作られた鉄斧などが出土してい

ます。漁港としてのみならず海上交易拠点としても機能していました。
　千人分以上の人骨が発見されていますが、その内少なくとも 109 人分の人骨は埋葬されず溝の中に捨てられた状態で発見されました。「この人骨群の中には、鋭い刃物で傷つけられた骨が約 110 点（10 数人分）見つかっています。何らかの理由で殺傷された人々と考えられます。これらの人々は約 1800 年前に生きた人々でした。」（青谷上寺地遺跡展示館展示パネルより）。中には真っ正面から額に斧を打ち込まれたと思われる女性の頭骨もあります。大国主が葦原中国を平定する過程で戦があったのかもしれません。
　この遺跡は 3 世紀後半、生活道具もそのままに突然放棄されて終末を迎えます。ヤマト国に滅ぼされたものと私は考えています。

写真３：精緻な木製品（青谷上寺地遺跡展示館）
写真４：弥生人の脳レプリカ（青谷上寺地遺跡展示館）

３．大古墳の出現
　島根県出雲市役所の南東 2km に広がる西谷丘陵上には 2 世紀末から 3 世紀後半にかけて造られた古墳群があります。その内、2 号墓、3 号墓、4 号墓、9 号墓は一辺 30m 以上もある方墳で、何れも四隅（よすみ）が突出しており、四隅突出型古墳と呼ばれます。このような大古墳は葦原中国ではここにしかありませんのでこれらは王墓と推定できます。後に大国主が祀られる出雲大社は西北 10km に位置します。
　上述の妻木晩田遺跡にある幾つもの古墳は規模が小さいもののやはり四隅突出型です。この祖型は朝鮮半島北部、当時の国名で言えば高句麗（こうくり）に見られますので、葦原中国は朝鮮半島と密接な関係を持っていたことが解ります。妻木晩田遺跡南側の孝霊山は、高麗山とも書きます。記紀に書かれた少彦名（すくなびこな）は海の彼方からやってきて、大国主を助けて葦原中国を平定し、やがて海に去って行きます。少彦名は高句麗系渡来人を象徴しているようです。
　大古墳を造る土木工事には鋤や鍬など豊富な鉄製道具が必要です。出雲は、2 世紀末に高句麗から製鉄技術がもたらされ、いち早く弥生時代から古墳時代に移行したことが解ります。鉄製農具により農業生産性が向上し、人口が増えました。鉄剣、鉄の矢尻など武器の性能も上がり、葦原中国は出雲から因幡まで勢力を伸ばし、更に奈良盆地を目指します。
　なぜ奈良なのか。それは奈良盆地は本州中央にあり、物流ルートの要に位置したからです。先ず、九州、四国、瀬戸内海沿岸の物資は大阪湾から河内湖、大和川で水運が可能でした。日本海側の物資は、敦賀から僅かな距離の陸送を挟んで、琵琶湖湖水交通、宇治川、巨椋池、木津川を経て奈良盆地の北隣、木津まで船で運べました。東からは二経路。伊勢湾から鈴鹿川、僅かな距離の陸送を挟んで木津川に至るのが一つ。もう一つは伊勢湾から揖斐川下流域、関ヶ原を越える陸送、そして琵琶湖湖水交通に繋がりました。これらのルートは明治時代に鉄道輸送が始まるまで使用されました。

関連地図（筆者作成）：
出雲大社●　　妻木晩田遺跡
　西谷丘陵●←　65km　→●←37km→●青谷上寺地遺跡
　荒神谷遺跡●　　△高麗山

写真５：西谷古墳群 2 号墓（出雲弥生の森）
写真６：西谷古墳群 3 号墓（出雲弥生の森）
写真７：四隅突出型墳墓（妻木晩田遺跡）
写真８：妻木晩田遺跡から見る高麗山
古代大和水運図

４．出雲の痕跡
　記紀によれば、ある時、海に光が射し大国主の分身（大物主）が現れ、その言葉に従って大国主（おおくにぬし）は大和の三諸山（みもろやま。奈良県桜井市三輪山）に大物主（おおものぬし）を祀ります。出雲を中心とする葦原中国（あしはらなかつくに）の勢力が奈良盆地にまで及んだことを示しています。出雲はヤマト国に製鉄技術を伝えました。
　三輪山をご神体とする大神神社（おおがみじんじゃ。桜井市三輪 1422）の祀神は大物主です。三輪山の南東際には出雲の地名が今も残ります。

記紀によれば出雲の人々も太陽神を信仰していました。その祭祀の場所は、その所在地の地名から枚岡神社（東大阪市出雲井町）と推定できます。

写真９：大神神社（通称三輪神社）鳥居
写真１０：枚岡神社鳥居
写真１１：枚岡神社本殿

５．国譲り

記紀によりますと、大国主は太陽神アマテラスに派遣されたタケミカヅチに国を譲ります。その代償に建ててもらうのが出雲大社です。

記紀は、日本の歴史を古く見せるために内容を引き伸ばす必要があり（第九章で詳しく述べます）、同じ話を 2 回に分けて書いています。最初は神話時代の話としてタケミカヅチに譲ったと記し、次に神話と歴史の中間に位置する神武（じんむ）天皇が九州から遠征して大和に入って初代天皇になったと記し、更に第 10 代崇神（すじん）天皇を現実の初代天皇として描きました。何れにせよ、九州から太陽神を奉じて東征した勢力が今日の奈良県を中心とする地域から出雲王朝を駆逐し、母国の出雲をも征服したというのです。

近年の纏向遺跡発掘の成果により出雲王朝も神武東征も否定されています。2 世紀に弥生文化が崩壊した後、主たるクニの話し合いでヒミコを王に擁立し纏向を首都とした新しい連合国・ヤマトが 3 世紀初頭に建てられました。出雲は製鉄技術でヤマト国に貢献しました。3 世紀後半、出雲はヤマト国と対立し滅ぶことになります。

ここでヤマト国の祭祀の場所についても述べておきましょう。

一つは大和神社（おおやまとじんじゃ。天理市新泉町）。纏向遺跡の北側です。祭神は、大国魂（おおくにたま）。筆者はヤマト国の王達の魂を祀っていると考えています。

もう一つは檜原神社（ひばらじんじゃ。桜井市三輪）。聖なる山・三輪山の裾野、奈良盆地に最初に造られた前方後円墳（箸墓古墳）の真東 1.4km。太陽を祀ります。社殿はなく、二本の柱に縄を渡した鳥居が立つだけの原初的な神祀りの姿を留めます。

記紀の記述では宮中にて祀っていた両神を、崇神天皇の時代に「百姓」（一般庶民のこと）の「流離」や「背叛」があった為、それを鎮めるために移して祀り始めたとしています。しかし物部氏が作った八十（多いという意味）の皿で大国魂を祭ったとあり、次の物部王朝になってから滅ぼされたヤマト国の王の祟りに思い当たってそれを鎮めるために祭祀が始まったのかもしれません。

写真１２：大和神社
写真１３：檜原神社

６．出雲の祭祀

昭和 58 年（1983）のことです。大きな四隅突出型古墳のある西谷丘陵から約 10km 東の島根県斐川町で、それまで日本全国で出土した総数を上回る 358 本もの銅剣が、整然と埋められているのが発見されました。更に翌年、数メートル離れた所から銅矛（どうほこ）16 本、銅鐸（どうたく）6 個が発見されたのです。荒神谷（こうじんだに）遺跡と命名され、博物館を含む立派な公園が整備されました。

これら銅剣や銅矛は実用品ではなく祭器です。鳥居龍蔵博士（1870-1953）は、水田稲作が始まった中国長江（揚子江）流域では青銅製の祭器が用いられ、祭りが終わると丁寧に地中に埋めて保管したとしています。次の祭りに使うつもりで荒神谷に埋め、何らかの理由でそのままになってしまったのでしょうか。

紀元前 8 世紀に訪れる急激な気候寒冷化の時期、中国では周王朝が衰微して遷都し（前 771）、春秋戦国時代が始まります。北から押し寄せる難民の圧力に耐えかねた稲作農民は、東へは海を越えて日本列島や朝鮮半島南部に移住しました。弥生時代の始まりです。稲作農民は陸続きの南へも移住し水田稲作が拡がって行きました。中国のほとんどの地域、日本や朝鮮半島では青銅製の祭器を用いる習慣そのものが廃れてしまいましたが、南への伝播ルートでは受け継がれている場所があります。例えば中国貴州省。「ミャオ族では、いまも胴鼓が村の祭りのときに楽器として用いられている。かつては埋納されていたという。」（佐々木孝明著「日本文化の基層を探る」P.99 写真説明より）

写真１４：銅剣（国宝。荒神谷博物館）
写真１５：銅剣出土現場
写真１６：銅剣出土情況模型（荒神谷博物館）

７．刻印と放置

荒神谷遺跡で発見された祭器ですが、埋めた時期は特定できません。358 本の銅剣の内、344 本の茎に×印が刻印されていることが気に掛かります。

「時代が下って編纂された『式内宮』として認められた神社の、出雲地方での総数と出土した銅剣の本数との奇妙な一致があげられる。」（Wikipedia「荒神谷遺跡」より）

戦に勝ったヤマト国が、出雲各地で行われていた祭祀を一律に禁じ、祭器を集めて埋めたのでしょうか。

平成 8 年（1996）、荒神谷から山を隔てて 3km 余り、加茂岩倉遺跡から 39 個もの銅鐸が発見されました。内、13 個にも×印が刻印されていました。荒神谷遺跡と関係がありそうです。

写真１７：銅剣に刻まれた×印（荒神谷博物館展示パネル）

第二章　物部王朝＜前編＞

2 世紀に弥生文化が崩壊した後、主たるクニの話し合いでヒミコを王に擁立し纏向を首都とした新しい連合国・ヤマトが 3 世紀初頭に建てられました。私はこの王朝を崇神王朝と呼びます。

記紀の記述を見ますと、神話時代と歴史の境に位置する初代神武天皇の後、第 2 代綏靖（すいぜい）天皇から第 9 代開化（かいか）天皇までは事績や物語がほとんど書かれていません。これを「欠史八代」（けっしはちだい）と言います。第 10 代崇神（すじん）が実質上の初代天皇で、記紀も神武天皇と同じく「ハツクニシラス」（初代天皇）とします。

崇神王朝は栄え、奈良盆地に日本最初の前方後円墳群を残しました。しかし 4 世紀末の仲哀天皇（14 代ちゅうあい）の後、応神天皇（15 代おうじん）に取って代わられます。

応神天皇に始まる新しい王朝を私は物部王朝と呼んでいます。**はじめに**に書きましたが、古事記では履中天皇（17 代りちゅう）の形容に「物部」を使用しており、それは天皇が物部氏であることを意味しているからです。

記紀の記述が充実するのは第 10 代崇神天皇からですが、その寿命は 120 歳。11 代垂仁（すいにん）は 140 歳、12 代景行（けいこう）は 106 歳といった具合でにわかには信じられません。記紀を基礎とする私の探索は 15 代応神天皇、即ち物部王朝から始まります。

崇神から物部へと王朝が替わった事はその前後で古墳の規模や副葬品が一変することで解ります。生活レベルでも大規模な灌漑土木工事が行われたり、須恵器（すえき）と呼ばれる高温で焼かれた灰色の土器の使用が始まったり、大きな変化が見られました。

日本書紀は日本の歴史を古く長く見せるために（第九章で詳しく述べます）、応神天皇即位を西暦 270 年にしています。しかし物部王朝を特徴づける巨大前方後円墳、大土木工事、大量の鉄製品と馬具、須恵器は 5 世紀初に始まることが確定しています。王朝が始まったのは紀元 400 年頃と言えます。

応神は北部九州から東征して大和国に入りましたが、最大の特徴は秦氏（はたし）と呼ばれる中国系帰化人と共にやってきたことです。

写真１：応神天皇陵（誉田八幡宮境内展示パネル）

１．秦氏

秦氏とは、中国最初の統一王朝・秦（しん。前 221-前 206）の時代、朝鮮半島南東部に移住した中国人集団で、4 世紀の新羅（しんら）建国に伴い朝鮮半島南西部の百済（ひゃくさい）経由で九州、そして日本各地に移住してきたものです。秦氏は、機（はた）織り、畑（はた）作に優れていました。それ以外にも金属加工、治水、土木、建築、商業、窯業、醸造他、多くの分野で高度な技術と知識を持ち、それらを文化と共に日本にもたらしました。

その秦氏を率いてヤマト国の中心に入った応神天皇自身が秦氏であったと私は考えています。豊富な鉄と高度な技術を背景に日本を支配する勢力になったのです。

２．秦氏の王・応神天皇

応神天皇が秦氏であったという理由を以下に二つ挙げます。

日本書紀に記載されている応神天皇のおくり名（本名ではなく、死後おくられた名。15. **倭の五王**で述べるが、雄略天皇の場合、稲荷山古墳出土鉄剣の文字から生前の呼称がおくりなとなったことが判明）「誉田別」（ホムタワケ、或いはホンダワケ）の検討から始めましょう。最後の「ワケ」はこの頃の天皇の敬称のようです。

応神天皇が開いた王朝の天皇一覧を次に記します。左の天皇名は奈良時代後期から使用される漢字表記のおくり名、右が日本書紀のおくり名を片仮名にしたものです。天皇の呼称を実際に使い始めたのは天武天皇（40 代てんむ。在位 673-686）ですが、それ以前の大王（おおきみ）にも「天皇」を使うのが慣例です。

15 代　応神天皇　ホムタ「ワケ」
16 代　仁徳天皇　オホサザキ
17 代　履中天皇　イザホ「ワケ」
18 代　反正天皇　ミズハ「ワケ」

19 代　允恭天皇　オアサヅマ「ワク」ゴ
20 代　安康天皇　アナホ
21 代　雄略天皇　「ワカ」タケル
22 代　清寧天皇　シラカ
23 代　顕宗天皇　「ヲケ」
24 代　仁賢天皇　「オケ」
25 代　武烈天皇　「ワカ」サザキ

この王朝は天皇のおくり名を決めるにあたって、「ワケ」を天皇の敬称として使ったことは間違いなさそうです（「ヲケ」のヲはワ行であり「ワケ」とほぼ同音。「オケ」も同音とみる。「ワク」と「ワカ」は後ろに名詞が来るため語尾が変化したと推測）。

では、「ホムタ」は何を意味するのか。現代の日本語の発声は一音ずつ明快ですが、古代は口にこもった発声でした。筆者の祖父もそうでしたが、今でも奈良県や三重県にはそんな発声方法の人がいます。神主が祝詞（のりと）を上げる時や能、狂言にも口にこもった発声が残っています。「ホムタ」は「ハタ」の古代の発音です。ホムタワケとは、秦大王（はたおおきみ）、即ち秦氏の王を意味するのです。

もう一つの理由。中国の歴史書・隋書（巻 81 列伝第 46 東夷倭国）には、「竹斯国又東至秦王国 其人同於華夏 以為夷州疑不能明也（中略）自竹斯国以東，皆附庸於倭」（筑紫国の更に東、秦王国に至る。その国の人は中国人と同じ。蛮族の国とする理由は不明。筑紫国以東は皆倭に属す。）と書かれているからです。倭（わ。日本の蔑称）の中心は「秦王国」でした。「秦王国」とは、中国の秦（しん）王朝の時代に朝鮮半島に移住した「秦人」（しんじん）を称する中国人の後裔が建てた国であることを意味します。

応神天皇は秦氏の王でした。とすれば一つの疑問が浮かびます。秦氏、即ち中国人なら必ず持つ姓を天皇家は持たないことです。日本の大王になるにあたって姓を消したのでしょうか。それもあり得ます。ただ私は、ヤマト国が征服される十年ほど前の 391 年に倭が海を渡って朝鮮半島南部を制圧している事実（広開土王碑文。以下に述べます）があり、その倭を率いた人物が応神天皇と推定できることから、応神の父は倭人（日本人）、母が秦氏（中国人）である可能性が高いと考えます。北部九州の倭人の有力者が秦氏の王女を娶り、その間に生まれた王子が秦氏の王・応神天皇ではないか、ということです。こう申しますと読者の皆さんは倭人と秦氏の婚姻関係があり得たのか疑問を感じられるかもしれませんが、それは当時の朝鮮半島の民族分布を知れば納得いただけます。詳細は、7.**百済との関係**で述べます。

因みに日本書紀では応神天皇の父は仲哀天皇（14 代ちゅうあい）という実在性の乏しい人物、母は神功皇后（じんぐうこうごう）という架空の人物です。神功皇后は仲哀崩御後、応神天皇即位まで 64 年にわたって国を治めたことになっています。神功皇后が行ったとされる三韓（高句麗、百済、新羅のこと）征伐は応神天皇と推定される倭王がヤマト国を征服する前に成し遂げた事業を反映しているようです。高句麗の広開土王碑文には「百残新羅旧是属民由来朝貢而倭以辛卯年来渡海破百残■■新羅以為臣民」（百済と新羅は旧来（高句麗の）属民であり（高句麗に）朝貢していたが、辛卯年（391）、倭が渡海し、百済、（二字不明）、新羅を破って臣民とした）と書かれています。

３．葛城氏との関係

物部王朝を特徴付けるのは葛城（かつらぎ）氏との関係です。次の物部王朝天皇一覧にまとめましたが、葛城氏との姻戚関係が始まる二代目以降、葛城氏が妻もしくは母でない天皇は安康（あんこう）と最後の武烈（ぶれつ）だけです。安康は暗殺され、武烈は王朝を譲っています。葛城氏との姻戚関係を持つことが天皇の条件であったようです。

物部王朝天皇一覧：

世代数	天皇	特記事項
第一	15 代 応神（おうじん）	九州から東征し崇神王朝を滅ぼす。
第二	16 代 仁徳（にんとく）	葛城氏から皇后を迎える。
第三	17 代 履中（りちゅう）	葛城氏が母。墨江中王の反乱。
同	18 代 反正（はんぜい）	葛城氏が母。
同	19 代 允恭（いんぎょう）	同
第四	20 代 安康（あんこう）	暗殺される。
同	21 代 雄略（ゆうりゃく）	葛城氏が妻。百済を再興。

第五　22 代 清寧（せいねい）　葛城氏が母。皇后、皇子女共になし。
　同　23 代 顕宗（けんそう）　葛城氏が母。履中天皇の孫。
　同　24 代 仁賢（にんけん）　　同
第六　25 代 武烈（ぶれつ）　蘇我王朝の継体天皇（第六世代）に譲る。

４．葛城ソツヒコ

物部王朝と葛城氏の姻戚関係は二代目の仁徳天皇（16 代にんとく）に始まります。

仁徳は、葛城ソツヒコ（日本書紀では襲津彦、古事記では曽都毘古）の娘・磐之媛（いわのひめ）を皇后とし、その間に生まれた三人の皇子が順に天皇位を継ぎます。履中（17 代りちゅう）、反正（18 代はんぜい）、允恭（19 代いんぎょう）です。

娘を天皇に嫁がせることができた葛城ソツヒコとはどのような人物だったのでしょう。結論から言えば、記紀は意図的に記録しなかったようで手掛かりはあまりありません。それには理由があるはずです。残されたわずかな手掛かりから追っていくことにしましょう。

５．建内宿禰

先ずはソツヒコの父。古事記によれば建内宿禰（たけしうちのすくね。日本書紀では武内宿禰と表記）というとんでもなく長寿の人です。

どれくらい長寿かと言いますと、景行天皇（12 代けいこう）から仁徳天皇（16 代）まで 5 代の天皇に仕えました。日本書紀は景行天皇の即位を西暦 71 年に設定しており、仁徳天皇は西暦 399 年に没したことになっていますので、その寿命はもはや人類の域を超えています。

日本書紀では孝元天皇（8 代こうげん）の曾孫、古事記では孫と記します。

ここから言えることは、建内宿禰とは王の血を引く家来を包括的に示す概念であり、架空の人物ということです。とんでもない長寿にしたのは、前王朝・崇神王朝から物部王朝まで継続して仕えた忠臣がいれば天皇の血筋を「万世一系」と偽装する補強材料になるからです。「万世一系」の偽装については第七章、第九章で述べます。

６．葛城氏のルーツ

古事記が建内宿禰の子とする葛城ソツヒコですが、建内宿禰が架空の人物である以上この線では追えません。

ソツヒコに関する記述は古事記になく、日本書紀に書かれたのもわずか 5 ヶ所。その最初と最後の記事の期間は人類の寿命を超えています。

ソツヒコを実在の人物と考えた場合、娘を天皇の皇后にする点から見て王の血統に極めて近い人物とするのが素直ですが、それをうかがわせる記事は何もありません。

次の系図をご参照下さい。葛城氏は仁徳、履中、雄略と三人の天皇に娘を嫁がせる家柄にもかかわらず古事記はもちろん日本国の正史である日本書紀に親族の記録がほとんどない、いわば娘を出すだけの存在です。こんなことがあり得るのでしょうか。逆説的に言えばこれが大きな手掛かりです。

```
                                        はえ媛（葛城）
                                                ||---顕宗天皇（23 代）
                                黒媛（葛城）    ||---仁賢天皇（24 代）
葛城襲津彦---磐之媛（葛城）||--------市辺押磐皇子
                    ||-----------履中天皇（17 代）
                    ||-----------反正天皇（18 代）
                    ||-----------允恭天皇（19 代）
                    ||                  ||--------安康天皇（20 代）
                    ||                  ||--------雄略天皇（21 代）
                    ||          忍坂大中姫      ||----清寧天皇（22 代）
                    ||                          韓媛（葛城）
仲姫                ||
  ||--------------仁徳天皇（16 代）
応神天皇（15 代）
```

実は一つだけ考えられます。それは出自が外国の場合です。日本書紀は中国にならって、日本が中国と並び立つ立派な国であることを示すために 8 世紀に編纂された日本国の正史

です。神代（かみよ）から日本に続く天皇家に外国人の血が混じっているとは絶対に書けなかったからです。
　ではその外国とはどこか。それは百済（ひゃくさい）です。学者でもない筆者が「葛城氏は百済人だった！」などと言い出すと、素人の「トンデモ日本史」と感じられるかもしれませんが、日本書紀にはその手掛かりが残っています。
　日本書紀応神天皇 39 年 2 月の記事に百済の直支王が妹･新斉都媛を応神天皇に仕えさせた（「令仕」）とあります。天皇は媛を皇子に与えたものか、その後については書かれていません。雄略天皇 2 年 7 月の記事に百済の池津媛を天皇の嫁に出したにもかかわらず石川楯が手を付けてしまい焼き殺されたこと、同 5 年 4 月にそれを知った百済王は今後は媛を出さないと言ったことが記されています。百済王の媛が天皇に嫁ぐことが常態であったことを物語ります。
　百済との繋がりを追ってみましょう。

７．百済との関係
　当時の百済は今の日本人が考える「外国」の感覚ではありません。「五世紀の朝鮮半島」地図をご参照下さい。
　3 世紀の朝鮮半島南部について中国の正史「後漢書」や「三国志魏書」には、朝鮮半島南西部・馬韓（ばかん）と南東部・秦韓（しんかん。辰韓とも書く）では言語、習俗が異なったこと、秦韓人は中国・秦王朝の時代（前 221-前 206）に逃れてきた漢人（中国人）であることが書かれています。馬韓と秦韓に挟まれた弁韓（べんかん。後の加羅と任那）は倭人（日本人の蔑称）、穢（わい）人、韓人、秦韓人の雑居地域になっていました。
　4 世紀も後半になり、先に高句麗（こうくり）を建国していた穢人が馬韓に百済を建国しました。やや遅れて北方の騎馬民族・匈奴（きょうど）が秦韓に新羅（しんら）を建国します。更に「辛卯年（391）、倭が渡海し、百済、（二字不明）、新羅を破って臣民とした」（高句麗の広開土王碑文）のです。即ち 5 世紀の朝鮮半島南部は韓人、秦韓人、穢人、匈奴、倭人の居住域が複雑に入り交じり、その上に建国されたばかりの百済、新羅の二国、それに日本の拠点である任那（みまな）が乗っかっているというイメージです。
　そもそも応神天皇は秦氏の王であり、北部九州を経由して秦氏と共にヤマト国に入り物部王朝を建てました。秦氏とは秦韓人（漢人）のことです。新羅から日本に至るには百済の協力が不可欠です。
　日本書紀のソツヒコの 5 つの記事は全て新羅との戦いか百済に関するもので、秦氏の移住を述べた次の記事もそうです。
　「応神天皇 14 年、天皇は帰化を望む弓月民（ゆづきのたみ。秦氏のこと）が新羅の妨害で日本に来られないことを知り、ソツヒコを派遣した。成果がないので同 16 年 8 月、精兵を新羅に差し向けソツヒコと共に連れ帰った。」
　その応神天皇 16 年には「百済の阿花王が亡くなり、人質として日本に来ていた直支王を帰国させ王位に就かせた」と書かれています。
　応神天皇以降も物部王朝の期間を通して日本は百済と極めて密接な同盟関係を続けます。これについては後に述べます。

地図　：5 世紀の朝鮮半島

８．葛城ソツヒコの正体
　百済は高句麗と同じツングース系民族・穢人が中国東北部から南下して朝鮮半島南西部に建てた国です。一方、新羅は中央アジアの騎馬民族・匈奴（きょうど。フン族）が朝鮮半島南東部に建てた国です。両国は 4 世紀の建国から 7 世紀に百済が滅ぶまで抗争を続けました。百済の敵が新羅なら、秦氏の故国・秦韓を奪ったのも新羅。物部王朝と百済には協力し合う素地がありました。新羅に対抗するには盟友関係をより強固なものにする必要があったはずです。その一番の方法といえば、それは血の結束です。
　応神天皇と百済王は互いの皇子と王女の結婚を考えたのではなかったか。応神の後を継ぐ皇子は仁徳。バランスを考慮すれば磐之媛は百済王の媛ということになります。
　私は葛城ソツヒコは百済皇太子、そして百済王であったと考えます。先に引用した秦氏移住記事の「ソツヒコ」を「百済皇太子」と読み替えても筋が通ります。日本書紀は意図的な操作が多く必ずしも信用できませんが､同 16 年の記事の直支王がソツヒコとすれば丁度当てはまります。
　天皇家に百済王の血が入っているのなら 475 年頃（高句麗で 12 世紀に編纂された「三国

史記」によるが、同書の記事は誤差がある）の百済滅亡後、雄略天皇（21 代ゆうりゃく）が百済を再興した理由、660 年に再び百済が滅亡した後も再興を目指して朝鮮半島に出兵した理由、何れも無理なく説明できます。

９．幻の葛城氏

葛城ソツヒコは百済王でした。その後天皇家に嫁ぐ「葛城」の媛もその時の百済王の娘と考えて良いでしょう。

一方、従来の学説は葛城という地名と氏素性を結びつけ、「葛城氏」なる豪族が葛城に存在したと考えました。葛城とは奈良盆地南西部の地域名で、現在の大和高田市、葛城市、御所市（ごせし）あたりです。

御所市室（むろ）にある宮山古墳は墳丘長 238m。全国で 18 番目の規模ですから天皇もしくは天皇に準ずる人物の墓のはずです。ところが物部王朝の天皇墓は大阪府堺市、松原市、藤井寺市、羽曳野（はびきの）市に集中していますし、築造された 5 世紀初頭は日本で二番目に大きい誉田山古墳（応神天皇陵。墳丘長 425m。羽曳野市誉田）と三位の上石津ミサンザイ古墳（履中天皇陵とされるが筆者は仁徳天皇陵と推測。墳丘長 365m。堺市西区石津ヶ丘）の築造が行われており、対応する天皇がいません。そこで仁徳天皇の皇后を出した葛城ソツヒコの墓とされたのです。「葛城氏」がこれだけの規模の古墳を造れたということになり、「葛城氏」は天皇家に匹敵する豪族とされました。

写真２：葛城ソツヒコの墓と言われる宮山古墳（御所市室）
写真３：同墳丘上の靫（ゆき）型埴輪（靫は矢を入れる道具）
写真４：同横の八幡神社（応神天皇を祀る）

１０．葛城氏の実態

ソツヒコは百済王ですから葛城に墓を造ることはありません。ならば誰の墓か。私は磐之媛の輿入れに従って片道切符で来日し、媛を支えた百済王族の墓と考えます。記紀は仁徳天皇が磐之媛のために葛城部（かつらぎべ。葛城に設けられた奉仕集団）を定めたと記します。百済王族と葛城の関係はここに始まります。

日本書紀には雄略天皇 5 年 4 月に百済王の弟・昆支が派遣されたこと、武烈天皇 3 年 11 月に百済王族とみられる意多郎が亡くなり高田丘（大和高田市？）に葬られたことが記されています。御所市柏原には 5 世紀半ばに造られた墳丘長 150m の前方後円墳（掖上鑵子塚古墳）もあります。百済から極めて地位の高い王族が、おそらく途切れずに日本に派遣され、それら王族は葛城に葬られたことが推定できます（注）。「豪族葛城氏」は幻ですが、葛城には葛城部があり百済王族と繋がり続けたことは間違いありません。

注：これを補強するものとして次の記述を引用する。「室宮山古墳の後円部には二つの埋葬主体があり、前方部にはおそらく二つ、もしかしたら三つの埋葬主体があると言われていて、五人くらいの被葬者が眠っています。（中略）朝鮮半島の安羅伽耶（咸安）産の陶質土器が出ています。朝鮮半島製の土器ですから朝鮮半島に関わりのある人でないと持ち込むことができないものです。」（纏向学からの発信　第 6 章　ヤマト王権と葛城の有力地域集団　坂靖）

写真５：掖上鑵子塚（わきがみかんすづか）説明板
写真６：同前方部角

１１．百済王族の役目

では、百済の王族は何のために日本に派遣されてきたのでしょう。

5.**百済との関係**で引用した直支王のくだりから人質と考えることができるでしょうか。死ぬまで留め置かれる人質などあろうはずもありません。没後は天皇に準ずる規模の古墳に葬られており、最高の国賓として遇されていたことが解ります。とするならば百済王の代理として日本に駐在した、現代で言う大使と考えるのが素直です。以下、便宜上「百済大使」としましょう。

百済は隣国新羅の脅威に絶えずさらされており、百済外交の最重要課題は朝鮮半島における日本との同盟関係の維持です。その為に最も重要なことは天皇と百済王の姻戚関係を継続することです。

百済王の命を受け百済大使として日本に赴任した百済の王族は、天皇に嫁いだ百済王女

を支援すると共に、次の天皇もしくは次期天皇と目される皇子に百済王の媛を嫁がせることを主たる任務としていたと私は考えます。

第二章　物部王朝＜中編＞

１２．磐之媛

葛城ソツヒコは百済の王であり、日本・百済の同盟を強化する為に仁徳天皇（16 代にんとく）はその娘・磐之媛（いわのひめ）を皇后にしました。磐之媛はどのような人だったのでしょう。磐之媛は仁徳との間に三人の皇子をもうけますが、天皇が応神天皇の娘・八田皇女（やたのひめみこ）を宮中に入れたことを恨み、筒城（つづき。京都府京田辺市）の韓人・奴理能美（ヌリノミ）の家に入り（古事記。日本書紀では地名のみ）、そこで亡くなります。因みに新撰姓氏録によればヌリノミは百済人です。葛城部以外にも百済の拠点があったことが解ります。

これは磐之媛の嫉妬とされてきました。政略結婚の目的は、婚姻そのものによる宥和のみならず、その間に生まれた子に次世代を継がせて均衡をとることです。双方の血を引く後継者を確定させる必要があり、そのために他の可能性を封じるのは当然です。磐之媛は嫉妬したのではなく、怒ったのです。結局、仁徳と八田皇女との間に子は生まれませんでした。

葛城襲津彦---磐之媛（百済 100%）
||----------履中天皇（17 代 応神 1/4 百済 1/2）
||----------反正天皇（18 代 応神 1/4 百済 1/2）
||----------允恭天皇（19 代 応神 1/4 百済 1/2）
仲姫 ||
||----------仁徳天皇（16 代 応神 1/2）
応神天皇（15 代）||
||----------八田皇女（応神 1/2）
宮主宅媛

１３．番狂わせ

反新羅で一致する日本と百済の血の結束が実現し、百済王家の血を半分受け継ぐ履中（17 代りちゅう）、反正（18 代はんぜい）、允恭（19 代いんぎょう）の三兄弟が順に天皇に即位しました。そして次の世代。新羅という共通の敵が存在し続ける以上、その結束を強固なものにする必要があります。次の系図の上部をご参照下さい。

はえ媛（百済 100%）
||-----顕宗天皇（23 代 応神 1/16 百済 7/8）
黒媛（百済 100%） ||-----仁賢天皇（24 代 応神 1/16 百済 7/8）
磐之媛（百済 100%）||----------市辺押磐皇子（応神 1/8 百済 3/4）
||----------履中天皇（17 代 応神 1/4 百済 1/2）
||
||----------反正天皇（18 代 応神 1/4 百済 1/2）
||
||----------允恭天皇（19 代 応神 1/4 百済 1/2）
||
||----------軽皇子（応神 1/4 百済 1/4）
||
||----------軽大娘（応神 1/4 百済 1/4）
||
||----------長田大娘（1/4 百済 1/4）
||
||----------安康天皇（20 代 応神 1/4 百済 1/4）
||
||----------雄略天皇（21 代 応神 1/4 百済 1/4）
|| 忍坂大中姫（応神 1/4）||-----清寧天皇（22 代 応神 1/8 百済 5/8）

||　　韓媛（百済 100%）
仁徳天皇（16 代）
||　　長田大娘（応神 1/4 百済 1/4 再婚し安康の皇后となる）
||　　||----------眉輪王（応神 1/4 百済 1/8）
||----------大草香皇子（応神 1/4）
||----------若日下部王（応神 1/4　雄略の皇后）
日向髪長媛

履中天皇は百済から黒媛を娶り、その間に市辺押磐皇子（いちのへのおしわのみこ）が生まれました。市辺押磐皇子は天皇の最有力候補です。その市辺押磐皇子も百済からはえ（草冠に夷）媛を娶ります。二人の間には二人の皇子が生まれました。百済との関係は順調です。このままバラ色の友好の道が将来に向かって伸びているように思えました。ところが番狂わせが起きます。百済王女と結婚していない允恭天皇の皇子・安康（あんこう）が天皇に即位するのです。

なぜ番狂わせと言えるのか。それは日本書紀に「安康は市辺押磐皇子に継いでもらおうと考えていた」と書かれているからです。書く必要のないことを安康没後の雄略の記事（即位前 10 月）に織り込んでいます。本音がそんな形で残ってしまったのでしょう。後に安康の身に起きる悲劇もそれを裏付けています。

１４．安康天皇の悲劇

天皇の妻には百済王女。その間に生まれた皇子が次期天皇。これが続けば、始祖王・応神の血は薄まるばかりで何れ天皇は百済王の濃厚なる親族になってしまいます。天皇家に危機感が高まったことは想像に難くありません。その危機感が安康即位に繋がったはずです。

安康天皇の母・忍坂大中姫（おしさかのおおなかつひめ）は応神天皇の孫。応神の血を 1/4 引いています。従って安康は応神 1/4、百済 1/4。百済の血が薄まった上に母が応神系だけに百済の影響力は低下します。百済大使は何としても安康の皇后を百済から出そうと考えたことでしょう。

ところが安康は、同父同母姉の長田大娘（ながたのいらつめ）を皇后にします。13.**番狂わせ**の系図の下の部分をご参照下さい。長田大娘は仁徳天皇の子・大草香皇子と結婚したのですが（近親婚の例として 16.**百済への対抗策**の表に掲載）、未亡人になっていました。

夫であった大草香皇子は、同母妹の若日下部王と大長谷王（おおはつせおう。後の雄略天皇）の結婚（近親婚の例として 16.**百済への対抗策**の表に掲載）をめぐって誅殺されたと古事記には書かれています。

古事記によれば長田大娘は安康の同父同母姉ですが、日本書紀では履中天皇の皇女です。古事記は日本書紀に先立って編纂されましたので「同父同母姉」は事実であり、その後日本書紀で修正されたと思われます。近親婚は先進国・中国では儒教的倫理観から忌避されていました。先進国の仲間入りをしようと初めて国の正史・日本書紀の編纂を進めているのに、天皇が同父同母姉と結婚したと書けば後進国であることを宣伝してるようなものだからです。

即ち、これ以上百済の血を入れず、応神の血を薄めない為に近親婚で次期天皇をもうけようとしたのです。

後に安康は皇后の連れ子の眉輪王（まよわおう）に暗殺され、安康の企ては潰えます。私には眉輪王の背後に百済大使の影が見えます。

１５．軽皇子の悲劇

読者の中には天皇家が同父同母姉弟で結婚するなどあり得ないと感じた方がおられるかもしれませんが、私が上記結論に達したのは同時期にもう一つの事例があるからです。13.**番狂わせ**の系図の中程をご参照下さい。

安康天皇が即位する前のことです。安康の同父同母兄・軽皇子（かるのみこ。軽太子）は允恭天皇の第一皇子でした。軽皇子は同父同母妹の軽大娘（かるのいらつめ。軽大郎女）との近親婚をとがめられ、皇太子を廃され伊予に流されたと古事記は記します。例によって日本書紀では修正を加えています。実際には次期天皇に確定した軽皇子が、これ以上百済の血を入れず応神の血も維持する為に近親婚を企てたところ、百済大使がそれを阻止したと考えるのが素直です。

軽大娘の別名は衣通姫（そとおりひめ）。美しさが衣を通して輝き出る絶世の美女とい

うことです。無念の死を遂げた皇女を鎮魂するための美化と思われます。

１６．百済への対抗策

まだ信じられない、という方のために少し後の事例も挙げましょう。

蘇我王朝（26 代継体天皇に始まる王朝を筆者はこう呼ぶ）では舒明天皇（34 代じょめい）と皇極天皇（35 代こうぎょく）の同父同母兄妹婚がありました。二人の間に生まれるのが天智天皇（38 代てんち）です。ここでも日本書紀が修正する前の記録が古事記に残っています（第三章 4.**五世代目**を御参照下さい）。蘇我、物部という両王家は同族であり（本章 25.**継体の素性**にて述べます）、血を守る為なら近親婚も厭わない文化を持っていました。

次に物部王朝の王家の近親婚（含いとこ、姪、叔母）をまとめました。左は初代応神天皇からの世代数です。

世代	天皇／皇子	婚姻相手		結果
第二	仁徳天皇（16 代）	異母妹	八田皇女	子ができず
第三	允恭天皇（19 代）	いとこ	忍坂大中姫	安康と雄略を得る
同	大草香皇子	姪	長田大姉	誅殺される
第四	大長谷王（21 代雄略）	叔母	若日下部王	結婚未遂（即位後結婚）
同	軽皇子	同父同母妹	軽大娘（衣通姫）	流罪になり心中
同	安康天皇（20 代）	同父同母姉	長田大姉	暗殺される

百済の影響力を強めようとする百済大使と対抗する方法は、百済王女以外の妻を娶れば足りるはずですが、問題は日本と百済のバランスです。近親婚により始祖王・応神の血をより濃く残す方法を取らざるを得なかったことが解ります。

第二章　物部王朝＜後編＞

１７．倭の五王

安康天皇が暗殺された後、安康の弟の雄略（ゆうりゃく）が躍り出るのですが、雄略天皇に入る前にここで各天皇の在位年を検討しておきましょう。解明に役立つのは中国の史書（正史）です。中国文明は四千年にわたり正確な歴史を書き残してきました。各王朝は記録マニアと言えるくらい詳細な記録を残し、それをその王朝が滅んで歴史観の揺らぎが落ち着いてから正史としてまとめるということを繰り返してきました。おまけに王朝の変遷とあまり関係のない中国外の国や地域については記録を改ざんする必要もありません。そんなことで中国の正史は信頼に足りるのです。

物部王朝の天皇は、朝鮮半島を巡る争いに中国南朝の権威を利用する目的で朝貢し、称号をもらいました。当時日本は朝鮮半島南部の任那（みまな）に拠点を持ち、百済（ひゃくさい）を盟友として、新羅（しんら）と朝鮮半島南東部の領有を巡って争っていました。なぜならそこが秦氏（はたし）、即ち物部王朝が率いた人々の母国・秦韓（しんかん）の地だったからです。

南朝の歴史書に残る倭（わ。日本の蔑称）の朝貢記録には、讃、珍、済、興、武（さん、ちん、さい、こう、ぶ）の五人の王が書かれています。五王をどの天皇にあてはめるか、史書には手掛かりとして弟、子、と相続関係が書かれています。これに該当するのは履中天皇から 5 人の天皇を即位順にあてはめた場合のみです。次の表をご覧下さい。

倭の五王対照表：

倭王	王朝と記録年（西暦）	天皇	記事	日本書紀在位年数	筆者推定在位
讃	宋 421,425,430	17 代 履中		6	421-438
珍	宋 438	18 代 反正	讃没，弟立つ	5	438-443
済	宋 443,451,460	19 代 允恭		42	443-462
興	宋 462	20 代 安康	済の子興立つ	3	462-468
武	宋 477,478,南斉 479,梁 502	21 代 雄略	興没、弟立つ	23	468-502

筆者推定在位の初年は雄略天皇を除いて中国の史書に最初に記録された年としました。即位後最初に朝貢した月がばらばらですから、前天皇没後間を置かずに新天皇が即位し、

朝貢使を派遣し代替わりを報告したはずです。朝鮮半島情勢は絶えず緊張していましたので正統な倭（わ。日本の蔑称）の王であることをすかさず認めてもらう必要があり、同時に朝鮮半島支配者の称号「安東将軍」を求めたのです。

雄略天皇は、稲荷山古墳（埼玉県行田市）出土鉄剣の文字から鉄剣が作られた「辛亥年」（471 年）は「獲加多支鹵大王」（ワカタケル大王。雄略天皇のこと）の時代であったことが解ります。とするならば雄略は即位直後に朝貢使を出さなかったことになります。いつ即位したか、その手掛かりは百済王から大王に贈られた七支刀に求めます。聖なる刀は大王即位に合わせて贈られたと考え、七支刀に刻まれた制作年「泰■四年」（■は不明ながら宋の年号・泰始と推定。468 年）を即位年とします。

中国の記録は正確です。日本書紀も在位年数を操作していることは間違いありませんが、天皇の系図は正確であることが確認できました。

写真７：七支刀

１８．在位年数の操作

在位年数が反正天皇は日本書紀の在位年数と中国の記録が 1 年違い。日本書紀の在位年数の単純合計が 79 年。この間、中国の史書は 82 年とほぼ一致します。履中、雄略を短くし、その分允恭を長くして調整したことが解ります。履中在位中は墨江中王（すみのえのなかつおう）の反乱があり（古事記）、雄略は百済滅亡と再興がありましたので、不都合な記録は削除し在位期間を短縮したものと推測できます。

以上から見て日本書紀の編纂にあたっては、実際の在位年を基礎にしながら記述を操作したであろうことがうかがえます。即ち、日本書紀が記す履中天皇以降の物部王朝の天皇在位年はある程度信頼できるということです。これが雄略天皇以降の天皇在位年を確定するのに威力を発揮します。これについては後述します。

１９．雄略の即位

番狂わせで即位した安康天皇が暗殺されたのは、天皇と百済王女の間に生まれた皇子が継承する、本来の筋に戻す力が働いたと言えます。次の系図をご参照下さい。次期天皇は市辺押磐皇子（いちのへのおしわのみこ）になるはずです。それを阻むのが雄略天皇です。

```
                                          はえ媛（百済 100%）
                                              ||--------顕宗天皇（23 代 応神 1/16 百済 7/8）
                      黒媛（百済 100%）       ||--------仁賢天皇（24 代 応神 1/16 百済 7/8）
                        ||---------------------市辺押磐皇子（応神 1/8 百済 3/4）
磐之媛（百済 100%）||---------------------飯豊王女（応神 1/8 百済 3/4）
    ||----------------履中天皇（17 代 応神 1/4 百済 1/2）
    ||----------------反正天皇（18 代 応神 1/4 百済 1/2）
    ||----------------允恭天皇（19 代 応神 1/4 百済 1/2）
    ||                    ||----------------------軽皇子（応神 1/4 百済 1/4）
    ||                    ||----------------------黒彦皇子（応神 1/4 百済 1/4）
    ||                    ||----------------------安康天皇（20 代 応神 1/4 百済 1/4）
    ||                    ||----------------------白彦皇子（応神 1/4 百済 1/4）
    ||                    ||----------------------雄略天皇（21 代 応神 1/4 百済 1/4）
    ||                忍坂大中姫（応神 1/4）||----------清寧天皇（22 代 応神 1/8 百済 5/8）
    ||                                          韓媛（百済 100%）
仁徳天皇（16 代）
```

雄略天皇（21 代）は、允恭天皇の第五皇子です。五人の皇子は全て忍坂大中姫（おしさかのおおなかつひめ）が生んだ子です。第一皇子・軽皇子（かるのみこ）と第三皇子・安康天皇は既に亡くなりました。第二皇子黒彦、第四皇子白彦は皇位継承順位で上位にあり、雄略は先ずこの二人を始末します。

次に安康天皇を暗殺した眉輪王（まよわおう）を始末しようとしますが、暗殺の黒幕であろう葛城円（かつらぎのつぶら）の屋敷に逃げ込みます。雄略は屋敷を包囲し、眉輪王と円を自害に追い込みます。そして本命の市辺押磐皇子を殺して即位します。

従来の学説では百済の存在に気付かず天皇に娘を出す葛城氏という豪族を仮定しましたので円の死をもって葛城氏の滅亡と考えました。葛城は、仁徳天皇（16 代にんとく）が皇

后である百済の王女・磐之媛（いわのひめ）のために葛城部（かつらぎべ。葛城に設けられた奉仕集団）を定めたことから百済王族縁の地になっただけのことで、葛城氏が幻であることは先に述べました。円は日本に大使として赴任した百済の王族です。

２０．雄略の結婚

雄略は即位後、叔母である若日下部王（わかくさかべおう）を皇后にします。皇子時代に娶ろうとしたものの、仲を取り持った大草香皇子が誅殺され、結婚未遂に終わったことは 14.**安康天皇の悲劇**で述べました。そして円の娘・韓媛（からひめ）を娶ります。その間に生まれるのが 22 代清寧（せいねい）天皇です。

雄略は百済との同盟を維持するために百済王の娘を娶るはずです。円は王の弟といった王の血筋に極めて近い人物と推測できますが、王ではありません。おまけに円は雄略から見て叔父・大草香皇子や兄・軽皇子と安康天皇の仇です。その娘をなぜ娶ったのでしょう。実はその時、百済は存在していなかったのです。

２１．雄略の時代

雄略の即位を 468 年としますと、即位後ほどなく朝鮮半島情勢の急変に見舞われたはずです。百済が高句麗（こうくり）に攻められたのです。そして 475 年頃、首都・漢城（かんじょう。現在のソウル）は陥落。王と王子は処刑され百済は滅びます。

先に雄略は即位後すぐには宋に朝貢使を出さなかったと書きましたが、そのような状況下、朝貢使を出す余裕がなかったものと推測します。

やがて雄略は大軍を派遣し高句麗、新羅と戦い、逃れていた百済王子を即位させ（文周王）、南の熊津（ゆうしん。現在の公州市）を首都として百済を再興します。

百済では再興後 6 世紀前半にかけて 10 基以上の前方後円墳が造られます。前方後円墳は日本独自の墳墓形態ですから日本と百済の関係が一層緊密になったことが解ります。

強い王の復活と引き換えに高い代償を払うことになりました。雄略は韓媛との間に生まれた清寧天皇（22 代せいねい）を跡継ぎにします。清寧は色素欠乏症で白髪。皇后もなく子も無し。雄略は応神の血を引く皇子を殺し尽くし、他の選択肢がなかったのでしょう。清寧は在位 5 年で亡くなります。応神の血は絶えるかと思われましたが意外な展開が待ち受けます。

写真８：雄略天皇陵との説がある河内大塚山古墳（墳丘長 335m。松原市、羽曳野市）

２２．清寧天皇没後

倭の五王対照表：

倭王	王朝と記録年（西暦）	天皇	記事	日本書紀在位年数	筆者推定在位
讃	宋 421,425,430	17 代 履中		6	421-438
珍	宋 438	18 代 反正	讃没，弟立つ	5	438-443
済	宋 443,451,460	19 代 允恭		42	443-462
興	宋 462	20 代 安康	済の子興立つ	3	462-468
武	宋 477,478,南斉 479,梁 502	21 代 雄略	興没、弟立つ	23	468-502

倭の五王対照表に戻りましょう。

一番下の筆者推定在位年で雄略天皇の在位を西暦 502 年までとしています。「日本書紀の在位年数の単純合計が 79 年。この間、中国の史書は 82 年とほぼ一致します」ので、中国の史書に矛盾しない最短在位期間が妥当と考えたからです。それを基に清寧天皇が 502 年に即位して在位 5 年（日本書紀）とすれば、崩御は 506 年。この 506 年は大きな節目の年です。

それは日本書紀が少なくとも継体天皇以降、天皇在位年の操作をやめたと考えられるところ、継体天皇の崩御は継体天皇 25 年（531）で「82 歳」、即位前年は「57 歳」と書かれており、それは西暦 506 年に当たるからです。22 代清寧崩御の翌年に 26 代継体が即位したとすれば 23 代から 25 代の入る余地がなくなります。

日本書紀の記述を見てみましょう。

「武烈天皇（25 代ぶれつ）崩御後、後継者はなく、翌年正月、（応神天皇の五世孫である）オホド王（継体天皇）を三国（福井県坂井市）に迎えに行き、オホド王は二月に即位した。」

25 代武烈の後が 26 代継体としています。これをどう考えれば良いのでしょう。

２３．王朝の並立

継体は 507 年に樟葉（くずは。大阪府枚方市）で即位してから奈良盆地に入るまで 19 年もかかり、入ったのは 526 年です。その理由は何だったのでしょう。本当は請われて平和裏に継承したのではなく血みどろの争いがあり、天皇即位を宣言したものの物部王朝と抗争が続き、526 年にようやく和平が訪れたと考えれば辻つまがあいます。即ち、507 年から 526 年までは継体と物部王朝が並立していたのです。私は継体に始まる王朝を蘇我王朝と呼んでいます。

この間、日本書紀によれば顕宗天皇（23 代けんそう）3 年、仁賢天皇（24 代にんけん）11 年、武烈天皇（25 代）8 年、合計 22 年。日本書紀では仁賢も武烈も前天皇が亡くなった翌年に即位したことにしていますが、二つの王朝が並立し正統性を争っている時に空位期間を設けるはずもありません。前天皇の没年に各々即位したとすれば足かけ 20 年になり、継体即位から奈良盆地に入るまでの 19 年間と一致します。

２４．物部王朝の在位年

雄略天皇の崩御を中国梁書の朝貢記録の 502 年と仮定した場合、日本書紀に書かれた後の天皇の在位年と辻つまが合うことが判明しました。ここで、これまでに明らかになった物部王朝の在位年を西暦で整理しておきましょう。

17 代　履中天皇 421-438 年
18 代　反正天皇 438-443
19 代　允恭天皇 443-462
20 代　安康天皇 462-468
21 代　雄略天皇 468-502
22 代　清寧天皇 502-506（没後、後の継体天皇が王位を要求）
　　飯豊王女 506-507（履中天皇の娘。後述）
23 代　顕宗天皇 507-509（507 年、継体天皇即位宣言。王朝並立開始）
24 代　仁賢天皇 509-519
25 代　武烈天皇 519-526（王朝並立終了）
（26 代　継体天皇 526-531　蘇我王朝開始。後述）

２５．継体の素性

蘇我氏が具体的に記紀が記す歴史に登場するのは蘇我稲目（いなめ）からです。蘇我稲目は継体天皇が亡くなって 5 年目（536）に大臣になり、間もなく二人の娘を欽明天皇（29 代きんめい）に嫁がせます。

欽明の父は継体天皇、母は仁賢天皇（24 代にんけん）天皇の娘です。継体が即位宣言をしてから継体天皇とその皇子に妃を出したのは天皇家（物部氏）であり、それは血の宥和を図ってのことでした。そこに蘇我氏は唐突に天皇に妃を出す家柄として登場するのです。これは継体天皇の血筋が蘇我氏であると考えてこそ初めて説明がつきます。事実、蘇我と物部は対等な立場で争っており、これを前提に日本書紀を読み直せば継体天皇以降の皇位継承争いを矛盾なく素直に説明できます。これは次の章で検証します。

旧事本紀巻十「国造本記」によれば蘇我氏の若長足尼（わかながのすくね）が三国の坂中井（福井県坂井市丸岡町）に置かれた役所で国造（くにのみやつこ）をしていました。日本書紀によると三国（みくに。福井県坂井市）に継体は居り、請われて 507 年、樟葉宮で天皇に即位します。やはり継体天皇の血筋が蘇我氏だったのです。

継体は日本書紀に応神の五世孫と書かれています。即ち武烈天皇（25 代ぶれつ）と同じ第六世代として応神の血を引いていたのです。ならば物部も蘇我も元は秦氏の王族です。秦氏は朝鮮半島南東部・秦韓（しんかん。辰韓とも）の地に居ました。4 世紀の新羅建国に伴い応神天皇率いる秦氏は朝鮮半島南東部から百済、北部九州を経由してヤマト国に入り物部王朝を建てたのに対し、応神の皇子率いる秦氏は朝鮮半島南東部から越前に入り、近江にまで勢力を拡大していました。その統領が継体です。継体の父は高島郷（滋賀県高島市）の拠点に居た時に振媛（ふるひめ）に求婚し、「三国の坂中井」に迎え、その間に生まれるのが継体です。

故地「シンカン」（秦韓）の地名は物部の移住経路の「サガ」（佐賀）、蘇我の経路の「シガ」（滋賀）に残りました。「ソガ」（蘇我）も「シンカン」から来ていると私は考

えています。
　先に物部王朝の創始者である応神天皇（15 代おうじん）の名が「ホムタワケ」で、秦氏の王を意味することを述べました。この「ホムタワケ」という名は、元は蘇我氏が使っていました。なぜなら日本書紀は「一に云はく、初め天皇、太子と為りて、越国に行して、角鹿（つぬが）の笥飯（けひ）大神を拝祭（おが）みたてまつりたまふ。時に大神と太子と、名を相易へたまふ。故、大神を号（なづ）けて、去来紗別（イザサワケ）神と曰す。太子をば誉田別（ホムタワケ）尊（みこと）と名（なづ）くといふ。然らば大神の本の名を誉田別神、太子の元の名をば去来紗別尊と謂（もう）すべし。然れども見ゆる所無くして、未だ詳（つまびらか）ならず。」（応神天皇の元の名はイザサワケで、ケヒ大神の名と交換してホムタワケになったといわれるが詳しくは解らない）と書いているからです。ケヒ大神とは気比神宮（福井県敦賀市曙町）の主神で、この地域を治めていた蘇我氏の祖先神と考えられます。その神の名が「ホムタワケ」で、この名を応神天皇に譲ったというのです。蘇我氏も秦氏であったこと、先に奈良盆地に入りヤマト国を滅ぼした物部氏の応神天皇に皇子（蘇我氏）が屈服したことを意味していると考えられます。
　継体は雄略の死後、清寧天皇が短期間で崩御し、その後継者が絶えたのを見て、応神の血を引く正統な後継者として中央に進出を企てたのです。

地図：6 世紀の朝鮮半島と秦氏関連地
写真９：気比神宮

２６．オケとヲケ

　対する物部王朝は後継者を探す必要に迫られました。暫定的に履中天皇の娘・飯豊王女（いいとよのひめみこ）が天皇の代わりを務めました。
　市辺押磐皇子（いちのへのおしわのみこ）は雄略に殺されましたが、二人の子が発見されました。兄はオケ、弟はヲケ。下の系図をご参照下さい。飯豊王女の甥にあたります。
　二人は父が殺された後、逃亡し身分を隠して潜伏していました。二人の母は百済王女。百済の血を 7/8 も引いていますが、それよりも応神の血を 1/16 引くことが重要でした。なぜなら対する継体天皇は応神の五世孫を名乗っているからです。継体側が一切近親婚をしていない場合の応神の血の比率は 1/2 の 5 乗で 1/32。おそらく両者に大差はなかったはずです。
　507 年、譲り合いの結果、弟ヲケが皇太子の兄に先んじて即位し顕宗天皇（23 代けんそう）。在位三年で亡くなり、509 年に兄オケが即位し仁賢天皇（24 代にんけん）。
　継体との抗争が続く中で皇太子の兄が即位を渋ったのは当然かもしれません。弟は戦死のはずです。記紀に仁賢の治世は良かったと書かれていますが実際は血みどろの戦いが続いていたことでしょう。なぜなら継体は本拠を樟葉から筒城（つづき。京都府京田辺市）、弟国（おとくに。京都府長岡京市）と移しているからです。物部側も仁賢天皇陵とみられる野中ボケ山古墳（藤井寺市青山 3 丁目。「ボケ」は天皇名「オケ」が変化したもの）の墳丘長は 122m しかなく、築造に余裕がなかったことがうかがえます。
　ところで、日本書紀によれば仁賢の皇后・春日大娘（かすがのいらつめ）は雄略天皇の娘です。仁賢にとって雄略は父の仇。その娘を皇后にするでしょうか。古事記に春日大娘の出自は記載されておらず、実際には雄略と血縁関係がないどころか、王家の血は引いていないようです。継体天皇との争いでは応神の血の比率が王朝の正統性の争点ですから偽装したものと考えられます。そして二人の間に生まれた武烈（25 代ぶれつ）が物部王朝最後の天皇になります。

黒媛（百済 100%）
　　||----------市辺押磐皇子（応神 1/8　百済 3/4）⇒
　　||----------飯豊王女（応神 1/8　百済 3/4）
履中天皇（17 代　応神 1/4　百済 1/2）

⇒
市辺押磐皇子（応神 1/8　百済 3/4）
　　||----------顕宗天皇（23 代　応神 1/16　百済 7/8）
　　||----------仁賢天皇（24 代　応神 1/16　百済 7/8）
はえ（草冠に夷）媛（百済 100%）||------武烈天皇（25 代　応神 1/32　百済 7/16）
　　||------手白香皇女（応神 1/32　百済 7/16）

春日大娘　　||----------欽明天皇（29 代）
継体天皇（26 代）

写真１０：野中ボケ山古墳（藤井寺市青山 3 丁目）

２７．武烈天皇

古事記には書かれていませんが、日本書紀で武烈は暴君として描かれます。これは次期王朝を正当化する為に中国の史書が使う手。日本書紀は中国に倣って作られた史書ですから、当然と言えば当然です。

武烈崩御後、後継者はなく、継体（26 代けいたい）を三国から呼び寄せ次期天皇にしたと記紀に書かれていることは 22.**清寧天皇没後**に述べた通りです。

事実は武烈在世中に継体との和平にこぎつけたはずです。両者協議の結果、仁賢の娘で武烈の妹・手白香皇女（たしらかのひめみこ）を継体に嫁がせることで宥和が図られました。その間に生まれるのが後の欽明天皇（29 代きんめい）です。526 年、ようやく継体は国の中心である奈良盆地に入ることができたのです。ここに名実ともに物部王朝は終わり、新しい王朝が始まります。

物部王朝は終わったものの王族が滅んだのではありません。記紀の記述で「物部」と書かれた勢力として残り、継体の血筋、即ち「蘇我」と争います。528 年に起きた磐井の乱もその一つと私は考えています。次の第三章では天皇擁立を巡る両者の争いについて述べます。

第三章　蘇我王朝と物部の血

2013 年 5 月 4 日、テレビで昼のニュースを見ていますとこの日、藤ノ木古墳の石室特別公開をしているそうです。この古墳は豪華な鞍が出土したことで有名です。連休中で会社は休み。焼きそばを作って食べた後、家内と見に行くことにしました。

埋葬は 6 世紀第 4 四半期と推定されています。この時期は後期古墳時代の終わりに近く、それほど大きな古墳が造られなくなった時代です。直径 50m の円墳ですがこの規模とてかなりの地位の人物が埋葬されたことでしょう。被葬者は二人。

日本書紀の記述と照らし合わせて、北側の被葬者を穴穂部皇子（あなほべのみこ）、南側は宅部皇子（やかべのみこ）とする学者が多いようです。用明天皇 2 年（587）6 月、蘇我馬子は物部氏に近かった穴穂部皇子と宅部皇子を殺し、翌月物部守屋を殺して物部氏を没落させます。

夫婦ならいざしらず、男二人を同じ棺に入れるなど通常あり得ません。南側の被葬者は男女判別に役立つ腰骨も頭蓋骨も溶けてしまっており、判断は下せません。残っている足首とかかとの骨を計ったところ、北側の男性より大きかったので「男性である確立は極めて高い」ということになり、こんな珍説が主流を占めることになったのです。

私は被葬者を推定するにあたり蘇我と物部の混血比率を用いることを思いつきました。これにより殺された者と殺された理由が浮かび上がってきます。この手法で蘇我王朝を追ってみましょう。

写真１：藤ノ木古墳
写真２：同古墳出土の鞍（レプリカ）
写真３：同古墳棺の説明パネル

１．継体天皇の次世代

手白香皇女（仁賢天皇の娘。物部 100%）
　||----------欽明天皇（29 代。蘇我 1/2、物部 1/2）
継体天皇（26 代。蘇我 100%）　　||
　||---安閑天皇（27 代。蘇我 100%）　||---敏達天皇（30 代。蘇我 1/2,物部 1/2）
　||---宣化天皇（28 代。蘇我 100%）　||
　||　　||----------石姫（蘇我 1/2、物部 1/2）
　||　橘仲皇女（仁賢天皇の娘。物部 100%）
尾張目子媛

継体天皇は蘇我王朝の始祖ですから蘇我の血が 100%です。次の世代は、継体天皇の三人の皇子が次々と天皇を継承します。その内、安閑天皇（27 代あんかん）と宣化天皇（28 代せんか）の母は尾張連草香の娘。即ち地方豪族の娘なので物部の血は零。この二人の天皇は蘇我と物部の対比で考える場合、蘇我の血は 100%と考えて良いでしょう。

欽明天皇（29 代）は、母が物部王朝の仁賢天皇の娘ですから、蘇我と物部の比率は 50%ずつです。

日本書紀は継体天皇の崩御を継体天皇 25 年（531）にした根拠として『百済本記』（現存せず）に「日本天皇及太子皇子 俱崩薨 由此而言 辛亥之歳」（辛亥年（531）に天皇、太子、皇子ともに亡くなった）と書かれていることを挙げています。継体天皇は皇子と共に殺されたのでしょう。続く安閑、宣化二代の 8 年間は物部氏と血で血を争う抗争があったように思われます。和解の条件として蘇我と物部の血を半々に引く欽明天皇が選ばれ決着したと考えれば辻つまが合います。欽明天皇の即位は 539 年です。

２．八幡神

欽明天皇が即位し、血の比率の均衡の上に平和が訪れました。その欽明天皇が 571 年に崩御。緊張が一気に高まりました。どうすれば平和裏に収められるか。その手段として八幡神を使うことにしたと私は考えます。八幡神とは応神天皇のことです。

物部も蘇我も応神天皇の子孫です。八幡神は物部と蘇我に共通する祖先神ですから中立な立場で次期天皇を決めてくれるはずです。その方法は占い。占いの結果を神託として示

せば拘束力を生じます。応神天皇が率いた秦氏は中国人であり高度な占い術も持っていました。そこで北部九州は宇佐の地に神廟を建て、八幡神を祀りました。宇佐は応神天皇の東征船団の出発地であったものと私は考えています。宇佐神宮の社伝によれば八幡神は欽明天皇 32 年（571）に「初めて宇佐の地にご示顕になった」とします。欽明天皇崩御の年です。これが宇佐八幡宮の始まりです。

占いの結果、蘇我と物部の血が半分ずつ入った敏達（びだつ）を次期 30 代天皇に立てるべしとの神託が出たのでしょう。占いとは言っても便法として使ったのみで、結果は決まっていたのかもしれません。

敏達天皇（30 代）の父・欽明天皇は、蘇我と物部のハーフ。母・石姫皇女は、継体天皇の皇子・宣化天皇（28 代せんか）と仁賢天皇（物部）の娘の間に生まれており、やはりハーフ。従って、敏達天皇もハーフ。蘇我・物部の権力争いの中で、バランスを取ったと考えられます。欽明天皇即位から敏達天皇崩御まで 46 年間、均衡が保たれます。

余談ですが、その後八幡神は継体天皇縁（ゆかり）の地にも祀られます。石清水八幡宮（いわしみずはちまんぐう。京都府八幡市八幡高坊 30）です。継体天皇は越前から大和に入る前に樟葉（くずは）に入り、507 年に樟葉で即位します。石清水八幡宮が建つ男山は樟葉の裏山です。貞観 2 年（860）に清和天皇により創建され、その後歴代の天皇、上皇、法皇の度重なる参詣が行われる、皇室にとって大変重要な神社になります。石清水八幡は、清和天皇の血筋である清和源氏の氏神でもあり、戦（いくさ）の神としても信仰を集めます。

写真４：宮内庁が指定する 29 代欽明天皇陵（明日香村平田）
写真５：見瀬丸山古墳（橿原市見瀬町・五条野町・大軽町。欽明天皇墓、もしくは蘇我稲目墓と推定）
写真６：石清水八幡南総門
写真７：石清水八幡南総門から見る本社
写真８：石清水八幡本社
写真９：宇佐神宮宇佐鳥居と西大門

３．三世代目

石姫（蘇我 1/2、物部 1/2）
　　||----------敏達天皇（30 代 蘇我 1/2、物部 1/2）
欽明天皇（29 代 蘇我 1/2、物部 1/2）
||　　||----------推古天皇（33 代 蘇我 3/4、物部 1/4）
||　　||----------用命天皇（31 代 蘇我 3/4、物部 1/4）
||　蘇我堅塩姫　　||----------聖徳太子（30 代 蘇我 3/4、物部 1/4）
||----------穴穂部皇女（蘇我 3/4、物部 1/4）
||----------穴穂部皇子（蘇我 3/4、物部 1/4）
||----------崇峻天皇（32 代 蘇我 3/4、物部 1/4）
蘇我小姉君

三世代目は、敏達を皮切りに欽明天皇の四子が次々と天皇を担います。

用明天皇（31 代ようめい）は 585 年に即位します。母は、蘇我堅塩媛で蘇我 100%。従って、用明天皇の蘇我の血は 3/4。ここで蘇我にバランスが傾きました。反撃の機会を狙っていたであろう物部側に対し、蘇我側から決定的な打撃が加えられます。587 年、天皇の死のあと、穴穂部皇子（あなほべのみこ）、物部守屋などが殺され、物部氏は没落します。因みに聖徳太子は用明天皇の子です。この穴穂部皇子が葬られたのが本章冒頭の藤ノ木古墳です。

穴穂部皇子の母は、蘇我小姉君で蘇我 100%。従って、蘇我の血はやはり 3/4。ところが皇位を狙う為に物部守屋と結んだと書かれています。物部の起死回生策とすれば穴穂部皇子に娘を嫁がせることを考えたはずです。子ができれば物部の血は 5/8 に回復するからです。日本書紀には書かれていませんが、物部の娘を夫人にしていたのでしょう。藤ノ木古墳の南側の被葬者は足首と手首に玉（たま）飾りを付けていたことが解っています。穴穂部皇子夫婦が葬られたものと私は考えます。

崇峻天皇（32 代すしゅん）は穴穂部皇子の同父母兄弟です。穴穂部皇子は物部に近かった為、殺されたと推測されるところ、崇峻天皇も物部に近かったのか、592 年に暗殺されます。崇峻は生年も記紀に記録されておらず、又暗殺当日に葬られるという異様さ。先代旧事本記では夫人の布都（ふつ）姫は物部守屋の妹と書かれています（「布都」は物部氏ゆかりの石上神宮に祀る神と同名）。そうであれば、布都姫との間に子ができれば物部の血は 5/8 に高まります。それが皇位を狙えば蘇我家にとって脅威です。おそらく布都姫も同時に殺されたことでしょう。

推古天皇（33 代すいこ。在位 593-629）は用明天皇の同母兄妹。従って、蘇我の血は 3/4。36 年に及ぶ長期政権で蘇我王朝は安定します。ただこの間に次の世代の皇位継承者が死に絶えたらしく、一世代飛んで五世代目に継承されます。

写真１０：32 代崇峻天皇陵（桜井市倉橋金福寺跡）
写真１１：赤坂天王山古墳（崇峻天皇陵の北東 1.7km。実際の崇峻天皇陵と推定）

４．五世代目

```
敏達天皇（30 代。蘇我 1/2、物部 1/2）
||     ||-----押坂彦人大兄（蘇我 3/4、物部 1/4）
||   広姫（蘇我系）||
||                 ||        法提郎女（蘇我馬子女）
||                 ||          ||-----古人大兄              姪娘（蘇我倉山田石川麻呂女）
||                 ||-----舒明天皇（34 代）              ||------元明天皇（43 代、707 年即位）
||                 ||          ||------------------------------天智天皇（38 代）
||                 ||          ||------------------------------天武天皇（40 代）
||                 ||          ||-------------------------------間人皇女
||                 ||-----皇極天皇（35 代,37 代斉明）   ||
||                 ||----------------------------------------孝徳天皇（36 代）
||                 ||
||------------------糠手姫皇女（蘇我 1/4、物部 1/4）
伊勢大鹿首小熊女
```

敏達天皇の子・押坂彦人大兄皇子（おしさかのひこひとのおおえのみこ）は異母兄妹の糠手姫と近親婚を行い、その間に生まれた三兄弟が即位します。

その前に四世代目、押坂彦人大兄の考察。父・敏達天皇は、蘇我と物部のハーフです。母は、息長真手王の娘・広姫。息長氏は継体天皇の本拠と考えられる滋賀県に縁があり、「王」が付くところから蘇我系皇族と推測します。従って、蘇我の血は 3/4、物部は 1/4 です。

そして五世代目。舒明天皇（34 代じょめい。在位 629-641）の母は、糠手姫皇女。皇女の父は敏達天皇、母は伊勢大鹿首小熊という地方豪族の娘。敏達天皇はハーフですから皇女は蘇我 1/4、物部 1/4。従って、舒明天皇は蘇我 1/2、物部 1/4。皇極天皇（35 代こうぎょく。在位 642-645。重祚して 37 代斉明天皇）、孝徳天皇（36 代こうとく。在位 645-654）も同母姉弟なので同じです。

舒明天皇と皇極天皇は結婚しますが、同父母兄妹間の結婚は先進国・中国では儒教的倫理観から忌避されていました。先進国の仲間入りをしようと初めて国の正史・日本書紀の編纂を進め、おまけに先進国の言語・漢文で書いているのに、天皇が同父母兄妹で結婚したと書けば後進国であることを宣伝しているようなものです。そこでその事実を隠す為に日本書紀では皇極天皇と孝徳天皇姉弟を一世代下げて六世代目にしています。こうすることにより舒明・皇極夫妻は叔父・姪の関係になります。なぜこのような事が解るかと言えば、日本書紀の 8 年前に完成した古事記には舒明天皇の同母妹弟として中津王（皇極天皇）と多良王（孝徳天皇とみられる）が記載されているからです。

五世代目の血は蘇我 1/2、物部 1/4。三世代目に比べ蘇我の比率が下がっていますが、物部没落の後ですから、物部の脅威は去っています。代わりに蘇我本家と王家の争いが始まります。

５．乙巳の変

蘇我と物部の妥協の結果、両者混血の血筋を王家（天皇家）としましたが王家に権力はなく、蘇我本家と物部本家が権力を巡って争っていました。物部が滅んだ後、蘇我本家は王家を擁立し続けましたが、蘇我本家の地位が更に高まりました。例えば日本書紀の皇極天皇即位（642 年）の記事は次の通りです。「皇后即天皇位、以蘇我臣蝦夷為大臣如故。大臣児入鹿自執国政、威勝於父。」（舒明天皇の皇后が天皇に即位し、蘇我蝦夷を従前通り大臣に任じた。大臣の児・入鹿は自ら国政を執り行い、その威は父・蝦夷に勝った）。

この背景には蘇我本家にも物部の血が入るという複雑な事情がありました。蘇我馬子没（626 年）後、蘇我本家の当主となった蝦夷の母は物部守屋の妹で、蝦夷は物部の血を 1/2 引いていたのです。物部の血を引くことが王家の最大の優位性でした。蝦夷は王家の誰よりも濃く物部の血を受け継ぎ、児・入鹿とて物部の血を 1/4 ひくのです。蘇我本家が一層権力を高めるのは自然な流れでした。

皇極天皇 4 年（645）6 月、乙巳の変（いっしのへん）と呼ばれる事件が起こり、蘇我蝦夷、蘇我入鹿など蘇我本家が滅ぼされます。ここに蘇我王朝は終わりを告げ、今日に続く天皇家の時代になります。

乙巳の変の切り込み隊長を務めた中大兄皇子（後の天智天皇）は、同父母兄妹の舒明・皇極天皇の間の子で六世代目。血の比率は変わらず蘇我 1/2、物部 1/4 です。

写真１２：石舞台（明日香村。蘇我馬子墓と推定）

６．濃厚な近親婚

蘇我入鹿を斬った中大兄皇子はもとより皇極天皇の脳裏には蘇我本家から独立した王家（天皇家）の概念が明確にあったはずです。王家を特徴付ける最大の要素は物部の血をひいていることでした。

4.五世代目の系図をご参照下さい。舒明、皇極、孝徳の三兄弟は異母兄妹（押坂彦人と糠手姫）の近親婚で生まれました。

舒明と皇極が同父母兄妹間で近親婚をしたのは物部の血の濃さを維持する為だったに違いありません。それ以外に物部の血を濃く持つ王位継承者はいませんでした。

更に舒明と皇極の同父母弟・孝徳天皇は、舒明と皇極の間に生まれた間人皇女（はしひとのひめみこ）を皇后にします。ここまで濃厚な近親婚が続くのは尋常ではありません。

おまけに天智天皇の兄弟である天武天皇は天智の 4 人の娘を妻にします。やはり物部の血を明確に意識していたのです。

７．白村江の戦い

660 年の百済滅亡後、百済復興を目指して朝鮮半島に出兵する決断をしたのは皇極天皇が重祚（ちょうそ。重ねて天皇に即位すること）した斉明天皇（37 代さいめい。在位 655-661）、実行した時点の最高権力者は中大兄皇子（後の天智天皇）でした。物部王朝は百済王族と濃厚な姻戚関係にありました。中大兄皇子は物部の血を強く意識するが故に国運を賭けて出兵したのです。

物部は偉大でした。「鉄は国家なり」。秦氏の持つ技術で鉄製農具を普及させて生産性を上げ、日本の国力を一気に高めました。大仙陵古墳（仁徳天皇陵とされているが、築造時期からみて履中天皇陵。第十三章 2.をご参照下さい）といった世界最大の墓も造りました。中大兄皇子は、偉大な物部の血を引くからこそ物部王朝の正統な後継者であり、先進国･中国に対抗できる立派な日本国を造る指導者たり得ると考えていたに違いありません。天皇家には蘇我と物部の血が何れも受け継がれています。

第四章　法隆寺と斑鳩寺

天智天皇の死後起きる壬申（じんしん）の乱、それにその勝者で日本を中央集権国家に変貌させた偉大なる天武天皇を述べることになりますが、その前に聖徳太子と法隆寺について考察することにしましょう。

法隆寺は日本のみならず世界最古の木造建築です。創建は推古朝（すいこちょう）とされてきましたが、日本書紀に焼けたという記述があるため、再建されたか、創建当時のままかという論争が明治時代に起きます。

昭和 14 年（1939）の発掘調査の結果、推古朝に建てられた寺院跡が現在建っている法隆寺の隣接地から発見されました。2004 年には焼けた壁画片も発見されました。これを以て、再建説が確定したとされます。

しかしこれは「再建されたか」という問いがあったが故に、推古朝に建てられた寺院跡を何の疑問もなく「法隆寺」と考えてしまった過ちでした。寺院跡を残した寺と現法隆寺、二つは名称も異なり、性格も異なる別の寺だったのです。

１．斑鳩寺

法隆寺が本尊としてきた薬師如来像の光背に、「用明天皇の治世丙午年（586）、後の推古天皇と聖徳太子が寺と薬師如来像を造ることを誓願したものの果たせず、丁卯年（607）に推古天皇と聖徳太子の命を受け、仕え奉った（実行した）」旨、刻まれています。これが推古朝創建の根拠です。ただ、「寺」と書かれているのみで「法隆寺」とは書かれていません。

日本書紀の記事に「法隆寺」は 1 箇所のみ。670 年 4 月「災法隆寺一屋無余」（法隆寺が全焼した）です。

一方、「斑鳩寺」（いかるがじ）の記述は 2 箇所あります。643 年に山背大兄王（やましろのおおえのおう。聖徳太子の子）一族が「斑鳩寺」で集団自決しています。669 年冬、「災斑鳩寺」（斑鳩寺が焼けた）と記されています。

とするならば、推古朝に建てられた寺が「法隆寺」であったとする根拠は、日本書紀の 1 箇所しかありません。おまけにこの記事は、法隆寺使用木材の年輪測定から事実ではないことが判明しています。これについては後に述べます。

日本書紀の「斑鳩寺」に対応可能な寺院跡は、法隆寺に隣接した遺跡だけです。即ち、推古朝に建てられたのは斑鳩寺だったのです。

２．伽藍配置

発掘調査の結果、斑鳩寺は門・塔・金堂が一直線に並んでいたことが判明しています。これは同じく聖徳太子が建てたとされる四天王寺（大阪市天王寺区）と同じです。

斑鳩寺伽藍配置（＊は回廊）：

```
＊＊＊＊＊＊
＊　金堂　＊
＊　　　　＊
＊　塔　　＊
＊　　　　＊
＊＊ 門 ＊＊
```

法隆寺伽藍配置（＊は回廊）：

```
＊＊＊＊＊＊＊
＊　　　　　＊
＊ 塔　金堂 ＊
＊　　　　　＊
＊＊＊門＊＊＊
```

法隆寺は、門から見て左に塔、右に金堂。塔と金堂は横並びです。この先行事例として法輪寺（ほうりんじ。奈良県生駒郡斑鳩町三井）と法起寺（ほっきじ。奈良県生駒郡斑鳩

町岡本）が挙げられます。法起寺は塔と金堂の左右が逆転しています。何れも法隆寺の北東徒歩圏内にあり、聖徳太子の子・山背大兄王と縁が深い寺です。寺名の最初に「法」の字が付いている点でも同じ系統と考えられます。

余談ですが、梅原猛氏は「隠された十字架」（昭和 47 年（1972））の中で法隆寺の門の柱数が 5 本と奇数で、入口真ん中に柱が立つ理由を聖徳太子の怨霊（おんりょう）を封じ込める為だと主張しました。これに対して、武澤秀一氏は「法隆寺の謎を解く」（2006 年、ちくま新書）で、中央の柱の左側が塔に対する入り口で、右側が金堂に対する入り口であり、その先行形態として百済大寺（くだらおおでら。桜井市吉備の吉備池廃寺）では回廊に各々の門があったことを論証されています。

写真１：四天王寺
写真２：法隆寺
写真３：法輪寺
写真４：法起寺

３．斑鳩寺創建理由

斑鳩寺遺跡の東側に斑鳩宮（いかるがのみや）がありました。聖徳太子は 601 年より建設を始め、605 年に遷（うつ）っています。斑鳩寺金堂は、少なくとも太子が亡くなる頃までに完成したはずです。後にも述べますが、太子が亡くなった翌 623 年、太子等身の釈迦三尊像（しゃかさんぞんぞう）を造って安置したとみられるからです。

推古天皇と聖徳太子は、実権を握っていた蘇我本家の影響下から少しでも逃れる目的で奈良盆地南東部の飛鳥から離れた盆地西部の斑鳩に宮を移し、天皇家を中心とした政治を行おうとしました。当時中国は隋（ずい）王朝の最盛期。仏教治国策（仏教を使って国を治める政策）が行われていました。都の大興にはその中心として立派な寺・大興善寺が建てられました。日本にも仏教治国策を導入すべく、その中心として斑鳩寺を建設したものと私は考えます。都・大興に大興善寺、都・斑鳩に斑鳩寺。都の名と寺の名が一致する点も共通です。この政策は百余年後の奈良時代、「鎮護国家」（ちんごこっか）の理念の下、総国分寺として東大寺、日本全国に国分寺が建てられ結実します。

４．遣隋使

中国の歴史書・随書（ずいしょ）巻 81 列伝第 46 東夷倭国には次のように書かれています。

「大業三年、其王多利思比孤（タリシヒコ）遣使朝貢。使者曰聞海西菩薩天使重興仏法、故遣朝拝、兼沙門数十人来学仏法」（607 年、倭王タリシヒコは、中国の皇帝が仏法を盛んにしていると聞き、使者を派遣すると共に、仏法を学ぶ者を数十人同行させた）。

五、六十人もの仏僧を一気に養成しようというのです。日本最初の本格的な仏教寺院・飛鳥寺建立が蘇我馬子により発願されてからまだ 20 年。天皇家も試しに寺院を建てようとしたと考えがちですが、そのレベルを超えています。

日本書紀には書かれていませんが、随書には大業三年の 7 年前、600 年に最初の遣隋使のことが記録されています。聖徳太子は百済から随の情報を入手し、600 年に直接遣隋使を派遣して調査、607 年に仏教治国策を導入する明確な意図のもと仏法を学ぶ者を数十人同行させたと推測できます。数十人といえば、おそらく全国に国分寺を建てる計画があったのでしょう。遣隋使は、600 年から随が滅ぶ 618 年までの間に少なくとも 5 回派遣されており、仏教治国策や先進制度の導入に驚くほど積極的であったことがうかがえます。

ところで 607 年は推古天皇 15 年ですが、「タリシヒコ」の「ヒコ」は「彦」のこと。即ち男性です。中国に女帝はおらず（後に唐王朝を乗っ取り周王朝を建てた武則天が中国史上唯一の女帝）、女帝であることを隠したものと推測できます。

５．「以和為貴」

斑鳩宮は斑鳩寺の東側と書きましたが、東西軸は北東方向に 20 度ずれています。その時代の土地区画は現在の法隆寺東大門と夢殿（ゆめどの）を結ぶ道路に残っています。その道路の西への延長上 700m に藤ノ木古墳があります。

藤ノ木古墳に葬られたのは二人。穴穂部皇子（あなほべのみこ）とその夫人と考えられることは第三章で述べました。二人は蘇我と物部の抗争で殺されました。推古天皇は穴穂部皇子の異母兄妹。聖徳太子は穴穂部皇子の甥（おい）にあたります。

斑鳩宮を選定する時点で既に穴穂部皇子の墓がありました。宮と古墳は一直線の道路で結ばれていたはずで、それを遮るように宮の西側隣接地に斑鳩寺を建てました。斑鳩寺の建設は慰霊の意味が込められていたことは間違いありませんが、蘇我と物部の抗争を悔い、平和共存を願う大きな概念がそれを包み込んでいたはずです。日本書紀に書かれた十七条憲法は太子没後の創作とされていますが、第一条冒頭の「以和為貴」（わをもってとうとしとなす）の理念こそ太子が目指した仏教治国策の概念に通じるものだったと私は考えます。前章の繰り返しになりますが、その背景を次に確認しておきましょう。

６．蘇我と物部の争い

5 世紀、応神天皇に始まる王朝は物部（もののべ）氏が天皇でした。5 世紀末、物部王朝が衰えを見せます。526 年、越前と近江を拠点とした継体（けいたい）天皇が奈良盆地に入ります。継体天皇の血筋が蘇我氏です。物部と蘇我、何れも中国系の秦氏（はたし）の血を引く王家でした。鉄と文明を背景に日本を支配する勢力になったのです。先に引用した隋書の続きには、倭（わ。日本の蔑称）の中心を「秦王国」と書いています（第二章 2. **秦氏の王・応神天皇**をご参照下さい）。

継体天皇の没後、物部との抗争を経て、物部の血が半分入った欽明、次いで敏達（びだつ）が天皇位につき、蘇我と物部の勢力が拮抗しながらも 46 年間平和が保たれました。

敏達の後、欽明天皇と蘇我の娘の間に生まれた、蘇我の血を 3/4 受け継ぐ用明（ようめい）天皇が 585 年に皇位を継いだところでバランスが蘇我に傾きました。争いが再燃します。

穴穂部皇子は皇位を狙う為に物部守屋（もりや）と結んだと書かれています。用明天皇の死後、587 年に蘇我本家により物部守屋と穴穂部皇子は殺されます。次に皇位に立った崇峻（すしゅん）天皇は 592 年に暗殺されます。夫人は物部の娘だったようです。物部氏は滅亡し、蘇我の世になりました。

蘇我堅塩姫（蘇我 100%）
||----------推古天皇（33 代）（蘇我 3/4，物部 1/4）
||----------用明天皇（31 代）（蘇我 3/4，物部 1/4）
欽明天皇（29 代）　||----------聖徳太子（蘇我 3/4，物部 1/4）
||----------穴穂部皇女（蘇我 3/4，物部 1/4）
||----------穴穂部皇子（蘇我 3/4，物部 1/4）
||----------崇峻天皇（32 代）（蘇我 3/4，物部 1/4）
蘇我小姉君（蘇我 100%）

７．聖徳太子の血

蘇我氏にとって物部というライバルがいなくなれば物部の血は不要ですが、崇峻の後も物部の血が入った天皇を傀儡（かいらい）として擁立しました。史上初の女帝・推古天皇です。推古を補佐したのが聖徳太子です。

聖徳太子は異母兄妹の用明天皇と穴穂部皇女の近親婚で生まれました。出生は 574 年。物部氏滅亡の前です。蘇我と物部の対立の結果、妥協の産物として双方の混血の「天皇家」の概念が生まれ、その頃には既にこれ以上蘇我の血の比率を高めたくない、物部の血を維持したいという意識が働き、近親婚を選んだものと思われます。太子が 13 歳の時、叔父の穴穂部皇子が殺されます。18 歳の時に叔父の崇峻天皇が殺されます。何れも母の同母兄弟でした。太子の父母、叔父、伯母、叔母、そして本人も蘇我の血が 3/4、物部が 1/4 でした。

物部氏の滅亡によって蘇我本家対天皇家という対立の構図が更に明確になりました。傀儡にすぎない推古天皇ですが、補佐する聖徳太子と固く団結し、仏教治国策で蘇我本家に対抗したのです。

８．山背大兄の死

天皇家から聖徳太子という素晴らしいリーダーが生まれたのは蘇我氏の誤算でした。死後も太子の評価は上がる一方です。それにつれて太子の子・山背大兄王（やましろのおおえのおう）の人望も高まったため、643 年に蘇我氏は斑鳩を襲わせます。山背大兄は斑鳩寺にて夫人など一族と共に自殺します。聖徳太子の血統はここに絶えました。

この後、天皇家の逆襲が待っていました。645 年、蘇我本家が滅ぼされ天皇家の時代が始まります。

９．法隆寺創建理由

敏達天皇（30 代。蘇我 1/2、物部 1/2）
||　　||-----押坂彦人大兄（蘇我 3/4、物部 1/4）
||　広姫（蘇我系）||
||　　||　　法提郎女（蘇我馬子女）
||　　||　　||-----古人大兄
||　　||-----舒明天皇（34 代）
||　　||　　||----------天智天皇（38 代）
||　　||　　||----------天武天皇（40 代）
||　　||　　||----------間人皇女
||　　||-----皇極天皇（35 代,37 代斉明）　||
||　　||----------孝徳天皇（36 代）
||　　||
||----------糠手姫皇女（蘇我 1/4、物部 1/4）
伊勢大鹿首小熊女

推古天皇の後、天皇の血筋は 30 代敏達天皇の孫の代に引き継がれます。舒明（じょめい）天皇、皇極（こうぎょく）天皇、孝徳（こうとく）天皇の三人は同父母の兄弟で、蘇我 1/2、物部 1/4。次の世代の天智（てんち）天皇は、舒明・皇極の近親婚の間に生まれたため、同じく蘇我 1/2、物部 1/4 です。これらの人々によって法隆寺は建てられました。

その目的は聖徳太子を慰霊し、併せて蘇我氏との抗争で亡くなった天皇家の人々を鎮魂することでした。圧倒的な蘇我氏に対し、「和」を武器に果敢に挑んだ聖徳太子の評価は死後ますます高まっていましたので、亡くなった天皇家の人々の象徴として聖徳太子を強く意識していました。一言で言えば、聖徳太子をその象徴として祀る寺として建立されたと言えるでしょう。

聖徳太子が亡くなった翌 623 年、太子等身の釈迦三尊像（しゃかさんぞんぞう）を造って供養していました。その像を斑鳩寺から移し、本尊として祀ります。

法隆寺は斑鳩寺とは違う目的のために建設されました。その違いは土地区画にも現れています。先に斑鳩寺の東西軸が北東に 20 度ずれ、西の延長上に藤ノ木古墳があることを述べました。法隆寺を建てるにあたっては土地区画を変更し、その角度を 9 度にして藤ノ木古墳を結ばないようにしたのです。象徴として祀られる聖徳太子を別にして、その他の天皇家故人の平等を図る意図があったものと私は考えます。

写真５：道路角度の変更（法隆寺東大門西側から夢殿を望む）

１０．法隆寺建設

2004 年に奈良文化財研究所が発表したデータによれば、法隆寺に使用された木材の伐採年は、金堂の天井材 667 年、五重塔第二層の雲肘木（くもひじき）673 年、中門 699 年。「工事の進行に応じて順次伐採が行われていた」（武澤秀一著「法隆寺の謎を解く」）そうですので、伐採から二、三年の内に加工して使用されたはずです。そうしますと、日本書紀が「法隆寺全焼」とする 670 年には金堂がほぼ完成しており、その後五重塔、中門の順に建てられたことが解ります。

一方、五重塔の心柱の伐採年は 594 年です。心柱には真っ直ぐで長い一本の檜（ひのき）材が必要で、このような木は少なく、大変貴重です。斑鳩寺の塔を一旦解体し、心柱を再利用したものと推測できます。

これらの事実により、日本書紀が記す唯一の「法隆寺」全焼の記事は事実では無く、特別な意図の下に書き加えられたことが判明したのです。

１１．全焼記事の意図

法隆寺には太子等身の釈迦三尊像を斑鳩寺から移しました。又、斑鳩寺の塔の心柱も再利用しました。斑鳩寺と法隆寺は近い関係とみられてしまうおそれがありました。それをどうしても断つ必要があったのです。なぜか。

答えは簡単。汚れ無き寺にしたかったからです。斑鳩寺では山背大兄一族が大量自死しています。読者の皆さんも自身に置き換えて考えてみて下さい。自殺者を出した中古住宅に住もうと思うでしょうか。自殺者の数が多かったとすればどうでしょうか。

「法隆寺」と名付けられた寺の建設が決まり、その金堂が完成し、斑鳩寺から釈迦三尊像を移し、再利用の心柱を抜いたところで斑鳩寺は焼却されたのです。これが日本書紀 669 年冬の記事「災斑鳩寺」（斑鳩寺が焼けた）と考えられます。そして約半年後の翌年 4 月に法隆寺全焼の記事を書き加えました。斑鳩寺が焼けてから程なく法隆寺が全焼したのであれば、法隆寺は一から再建されたことになります。こうして斑鳩寺の汚れが、後世に残る法隆寺に受け継がれる客観的な可能性を一掃することができたのです。

１２．混同の原因

法隆寺には二つの本尊仏があります。一つは聖徳太子の死後、太子等身に造られた釈迦三尊像。もう一つは薬師如来像。本章の最初に書いた通り薬師如来像の光背には、聖徳太子がこの像を「寺」と共に造ったと解釈できる文章が刻まれています。制作年を西暦に直すと 607 年。この像は当初から法隆寺にあったとみられることから、法隆寺が実際より 60～100 年古く見られ、ひいては斑鳩寺と混同される原因となったものです。

刻まれた文章には「天皇」の文字があります。「天皇」という称号を使い始めるのも、薬師如来信仰が始まるのも天武天皇の時代、670 年代のことです。実際には天武朝の建設中断期間をはさんで、おそらく 690 年頃にこの像は造られました。これは日本書紀の構想を時の権力者・藤原不比等（ふじわらふひと）が練っていた時期にあたります。藤原不比等については第六章で述べます。

法隆寺は聖徳太子を祀る為に建立されたのですから、本尊仏は太子等身の釈迦三尊像で足りるはずです。なぜ法隆寺建立に併せてもう一つの本尊・薬師如来像を造る必要があったのでしょう。

写真６：釈迦三尊像（法隆寺パンフレット）
写真７：薬師如来像（法隆寺絵葉書）

１３．二つの本尊の理由

日本書紀を編纂させた藤原不比等は、特別な意図の下に 670 年に「災法隆寺一屋無余」（法隆寺が全焼した）の一文を入れさせました。ならば、創建時期をそれよりも前に設定しなければなりません。では何時にするのか。そしてそれをどういう形で記録に残すのか。

先ずは時期。建設にかかる期間を除いてそれ以前でさえあれば良いのですから、必ずしも聖徳太子が建てる必要はありません。しかし法隆寺の性格上、太子との縁（ゆかり）が深いに越したことはありません。そこで推古天皇と太子が建てたことにしました。

次は記録方法。「本尊仏」として薬師如来像を新たに作り、その光背に刻むことにしました。本尊仏は寺で最も重要なものであり、大切にされ、後世に残るからです。

薬師如来像は、創建年を偽造し、それを後世に残す目的で作られました。薬師如来像の光背銘文は、日本書紀の全焼記事といわば一対を成すものだったのです。後の世に全焼記事との矛盾に気付く人が出たとしても、書物より現物が優先する常識を以て乗り切れると考えたはずです。

事実、斑鳩寺は忘れ去られ、光背銘文を根拠に法隆寺創建を推古朝とし、仏像を持ち出して被災を免れたという解釈がなされ、或いは全焼記事が疑われてきたのです。

１４．光背銘文解釈

読者の皆さんは前段最後の「全焼記事が疑われ」をお読みになって、「血塗られた斑鳩寺との関係を断つ為にせっかく挿入した全焼記事が疑われたのでは、意味が無い」と考えられたかもしれません。もう一つ踏み込んでおきましょう。

先に書いたように光背には、「用明天皇の治世丙午年（586 年）、後の推古天皇と聖徳太子が寺と薬師如来像を造ることを誓願したものの果たせず、丁卯年（607 年）に推古天皇と聖徳太子の命を受け、仕え奉った（実行した）」旨、刻まれています。

今日まで主流の解釈では、「寺」を「法隆寺」、「仕奉」の内容を「法隆寺建立と薬師如来像の製作」としてきました。このように解釈されることは、この薬師如来像を造らせた藤原不比等の意図したところでした。

ところがこの文章には「寺」と書かれているのみで「法隆寺」とは書かれていませんし、よく読めば「仕奉」の内容に寺が含まれていない可能性もあります。確実に読み取れるのは、現に文字が刻まれている「薬師如来像の製作」だけなのです。

１５．時間差効果

法隆寺完成は、中門の使用木材伐採年が 699 年であることから見て 705 年頃のはずです。その頃、光背を見る人は限られているとは言え、聖徳太子が「法隆寺」を建てたと書けば見え透いた嘘になります。一方、「寺」ならば斑鳩寺を連想する人がいたとしても、「斑鳩寺とは関係なく、薬師如来像だけ造った」と説明すれば斑鳩寺の汚れと切り離せます。当時の人は、聖徳太子が造らせた有り難い薬師如来像を、焼けた斑鳩寺以外のどこかの寺から移したと解釈したはずです。

斑鳩寺を知る当時の人の目さえごまかせば良かったのです。斑鳩寺のことを知る人がいなくなればその汚れも忘れ去られます。日本書紀を読んだところで斑鳩寺と法隆寺の繋がりについては何も書いていません。全焼記事が疑われようとも何の問題も起こらないのです。光背銘文は、当時の人の目をすり抜け、後世の人に対して太子との縁を深め法隆寺の価値を高める効果を発揮するよう計算された巧妙な文章だったのです。

１６．建設中断の謎

最後にもう一つの論点です。

昭和の解体修理で塔の構造部分から風雨にさらされた痕跡がみつかりました。建設が中断し放置されたとみられます。先に五重塔の第二層雲肘木の伐採年を 673 年と書きましたが、その後のことです。丁度、天武天皇の時代（在位 673-686）が中断時期にあたります。天武天皇は、法隆寺建設の熱意がなかったのでしょうか。

私は色々考えてみたのですが、藤原京の造営、本薬師寺（もとやくしじ）の建設を優先した結果に過ぎないと結論を出しました。

本薬師寺は、天武天皇が皇后（後の持統天皇）の病気平癒を願って建立したものです。藤原京右京八条三坊全域を占める巨大な寺でした。正確に都の区画に合わせて立地しますので、藤原京の建設も同時期に進められていたことが解ります。藤原京は日本最初の恒久的首都として建設が始まったもので、その後の平城京や平安京より面積が広かったことが発掘で判明しています。本薬師寺は、奈良時代に建てられる薬師寺（奈良市西ノ京町）とほぼ同規模で、平城京遷都後も 11 世紀までこの地（奈良県橿原市城殿町）に残りました。

写真８：本薬師寺跡
写真９：本薬師寺東塔礎石
写真１０：薬師寺東塔

第五章　天武天皇

天智天皇（38 代てんち）崩御の後、壬申の乱に勝利して即位した天武天皇（40 代てんむ）天皇。初めて「天皇」の称号を用い、八色の姓制度による新たな身分秩序を確立して皇族の地位を高めました。国号に「日本」を使用し、歴史書の編纂にも着手しました。新羅や唐の都にならって恒久的な碁盤目状の道路に区切られた大首都・新益京（あらましのみやこ。通称藤原京）の建設を始めました。飛鳥浄御原律令を制定しました。日本を強力な中央集権国家に変貌させたのが天武天皇です。

日本書紀の記述で天武は、「天命開別天皇（天智天皇のこと）同母弟也」。天武は天智の同父母の弟とされています。しかし、兄である天智天皇より年上であるとする研究も多々あり、天智の娘を四人も妻にしていることは同父母兄弟とすれば不自然です。

私が尊敬する井沢元彦氏の著書「逆説の日本史 2 古代怨霊編」を読み返している内にその正体についてひらめくものがありました。同書の助けを借りながら真実に迫ります。

１．不審な点

日本書紀は天武天皇が編纂を始め、奈良時代初期に時の権力者・藤原不比等（ふひと）が完成させたものです。40 人の天皇に、応神（おうじん）天皇の母・神功（じんぐう）皇后の事績を加えて 41 人分の伝記で構成されますが､天武天皇の伝記はページ数にして 1 割強を占めます。にもかかわらず年齢を確定できる記述がありません。これは故意に記載されなかったとみるべきです。

天皇家は物部の血を維持する為に近親婚を繰り返しました。実に天智と天武の父母である舒明（じょめい）天皇と皇極（こうぎょく）天皇は同父母の兄妹です。天智と天武が兄弟としても、兄の娘を弟が四人娶るというのはいくら何でも多すぎます。

２．同父母兄弟ではない

天皇家の菩提寺・泉涌寺（せんにゅうじ。京都市東山区泉涌寺山内町 27）には、天武の血を引く天皇、即ち天武から称徳（しょうとく）天皇まで七人八代（孝謙天皇が重祚して称徳天皇になったため）が祀られていません。38 代天智天皇の次は、これら七人を飛ばして、天智の孫の 49 代光仁（こうにん）天皇、その子の 50 代桓武（かんむ）天皇に続きます。

この事実は、非兄弟説を唱えた小林恵子氏が発見されたそうです。天皇家にとって天武は異質な存在であり、その子孫も同様に考えられてきたことが解ります。

年齢を故意に隠したということは、実は天武が年上であったことを意味しそうです。年上の同父母兄弟ならば天智より先に即位するのが普通です。即位順序が後ということは、天武は天智と同父母兄弟ではないということです。

写真１：泉涌寺大門
写真２：泉涌寺仏殿
写真３：泉涌寺霊明殿（天皇の位牌を祀る）

３．候補者

押坂彦人大兄（蘇我 3/4、物部 1/4）
　　||　　法提郎女（蘇我馬子女。蘇我 100%）
　　||　　||----------古人大兄
　　||-----舒明天皇（34 代）
　　||　　||----------中大兄皇子（38 代天智天皇）
　　||　　||----------大海人皇子（40 代天武天皇）
　　||-----皇極天皇（35 代,37 代斉明）-----漢王子
　　||-----孝徳天皇（36 代）----------有間皇子
糠手姫皇女（蘇我 1/4、物部 1/4）

天武は何者か。天智の娘を嫁にもらえるほど濃厚に天皇家の血を引き、血統の序列が高い出自であったことは間違いありません。天武は日本書紀に載っている天皇家の人々の中

にみつけることが可能かもしれません。
　継体天皇を初代とする蘇我王朝の王位継承において、四世代目が飛んでいますので、天武の血筋をたどる上で候補になるのは五世代目の舒明、皇極、孝徳の三天皇の何れかを父母とする皇子に絞って良いはずです。
　先ずは孝徳天皇。孝徳は 645 年、乙巳の変で蘇我本家が滅ぼされた後、皇極を継いで天皇になります。都を難波に移しましたが一人見捨てられ 654 年に孤独死。一人の男児・有間皇子は 658 年に謀反の疑いで刑死。
　次は皇極女帝。初婚の相手は用明天皇の孫。その間に生まれた漢王子について記録はありません（井沢氏は掲題の書の中で天武＝漢皇子説に傾いておられます）。再婚相手が舒明天皇。その間に中大兄（なかのおおえ。後の天智）、大海人（おおあま。後の天武）の二皇子が生まれたことになっています。
　最後に舒明天皇。皇極皇后との間に生まれた天智と天武以外に、舒明は蘇我馬子の娘・法提郎女（ほほてのいらつめ）を夫人とし、その間に古人大兄（ふるひとのおおえ）皇子が生まれています。古人大兄は舒明天皇の第一皇子。即ち、天智より年上で、天皇間に生まれた天智より即位序列は下。おまけにその娘・倭姫王（やまとひめのおおきみ）は天智天皇の皇后です。有力候補と見て良いでしょう。

写真４：明日香と難波を結ぶ竹内街道（大阪府南河内郡太子町）
写真５：36 代孝徳天皇陵（大阪府南河内郡太子町）

４．古人大兄皇子
　645 年、蘇我本家が滅ぼされた乙巳の変の後、古人大兄は、「皇極天皇退位を受けて皇位に即く事を勧められたがそれを断り、出家して吉野へ隠退した。しかし、同年 9 月 12 日 吉備笠垂（きびのかさのしだる）から『古人大兄皇子が謀反を企てている』との密告を受け、中大兄皇子が攻め殺させた。実際に謀反を企てていたかどうかは不明である。」（Wikipedia「古人大兄皇子」）
　殺されてしまったのではこの線もなくなります。ところが、宇治谷孟訳「日本書紀全現代語訳」から引用された注書きが付いています。「古人大兄を『討たせた』結果の『死』について、日本書紀の編者は『ある本』二書に語らせるのみで、直接的言及はなされていない。」
　天武天皇の在位は 673 年から 686 年で、この間に日本書紀の元になった国史編纂事業を行わせています（第七章で述べます）。とするならば、たかだか 30 年前の、しかも舒明天皇の第一皇子による、謀反という重罪で、殺されたかどうか不明で、「或本」（あるほん）で死亡を推定させるというのはあり得ないことです。古人大兄の謀反はなく、殺されもしなかったということです。ただ史書の中で意図的に古人大兄を消し去る必要があったことは明らかです。なぜ消し去る必要があったのか。それこそ天武天皇の血筋を偽装する目的以外に理由は考えられません。
　おまけに日本書紀の古人大兄の行動は、天智崩御前の天武の行動と全く同じです。即ち、天智天皇の病が悪くなり、東宮（大海人皇子、即ち天武）に後を託そうとしたところ、それを「断り、出家して吉野宮に入った」のです。創作したパターンを安易に重複して使ったことが見て取れるのです。
　なぜ創作と言えるのか。それは井沢氏が掲題の書の中で解明した重大な事実から導かれます。それについては 7.**天智暗殺**、8.**弘文天皇**で述べます。

５．天武の正体
　古人大兄皇子こそ大海人皇子、後の天武その人。古人大兄は舒明天皇の第一皇子。天智、即ち中大兄は舒明の第二皇子。但し皇極天皇との間に生まれた天智は王位継承順位が上。
　天武の娘・倭姫王は天智に嫁ぎ、皇后に。天智の娘四人は天武に嫁いだ、という交換関係です。
　ここで天武の血筋を偽装した理由に迫る前に、天智の娘四人を娶った理由は何か、蘇我と物部の血の比率から考察してみましょう。

　従来の系図は次の通りです。舒明、皇極、孝徳の三兄弟は全て蘇我 1/2、物部 1/4 です。舒明、皇極の近親婚で生まれた天智、天武も蘇我 1/2、物部 1/4 です。

押坂彦人大兄（蘇我 3/4、物部 1/4）
　　||　　法提郎女（蘇我馬子女。蘇我 100%）
　　||　　||----------古人大兄
　　||-----舒明天皇（34 代）
　　||　　||----------天智天皇（38 代）
　　||　　||----------天武天皇（40 代）
　　||-----皇極天皇(35 代,37 代斉明)
　　||-----孝徳天皇（36 代）
糠手姫皇女（蘇我 1/4、物部 1/4）

見直した系図は次の通り。天武（古人大兄）は蘇我 3/4、物部 1/8 と蘇我の血が濃厚です。天武が天智の娘を四人も娶った理由は明らかです。その間に生まれた子の血は蘇我 5/8、物部 3/16 になります。滅んでしまった物部の血は貴重です。物部の血を濃くするためにはこれしか方法がなかったのです。

押坂彦人大兄（蘇我 3/4、物部 1/4）
　　||　　法提郎女（蘇我馬子女。蘇我 100%）
　　||　　||----------天武天皇（蘇我 3/4、物部 1/8）
　　||-----舒明天皇（34 代）
　　||　　||----------天智天皇（蘇我 1/2、物部 1/4）
　　||-----皇極天皇(35 代,37 代斉明)
　　||-----孝徳天皇（36 代）
糠手姫皇女（蘇我 1/4、物部 1/4）

６．天武系除外の理由

天武の正体が解った今、天武系最後の 46 代孝謙天皇（重祚して 48 代称徳天皇）の血と、天智系に戻った最初の 49 代光仁天皇の血を比べてみましょう。

光仁天皇は、天智の孫です。祖母、母共に蘇我と物部の血は入っていないようです。従って、混血比率は蘇我 1/8、物部 1/16。12.5%対 6.25%、即ち 2 対 1 です。

一方の天武系。藤原不比等は父・天智天皇と母・鏡姫王の間の子で（次章で述べます）、鏡姫王は蘇我、物部何れの血も入っていないとしますと、不比等自身は蘇我 1/4、物部 1/8。その女（むすめ）宮子と光明子ですが、その母は何れも蘇我、物部の血を引いていないとみて、蘇我 1/8、物部 1/16 とします。孝謙天皇の比率は、蘇我 9/32、物部 5/64。28.125%対 7.18%で、蘇我比率が物部の 3.6 倍と圧倒的に高くなっています。

物部との対比で見る限り、蘇我比率が高すぎることは問題です。蘇我本家と天皇家の対立の結果、聖徳太子一族の血が絶えました。天皇家は 645 年、乙巳の変でこれに報い、蘇我本家を滅ぼしました。天皇家は蘇我の血が濃すぎることを許さなかったのです。

姪娘（蘇我倉山田石川麻呂女）
　||----------元明天皇(43 代　蘇我 3/4,物部 1/8)
天智天皇(38 代　蘇我 1/2,物部 1/4)　　||-------文武天皇(42 代)⇒
　||---持統天皇(41 代　蘇我 3/4,物部 1/8)||-------元正天皇(44 代)
　||　　||----------草壁皇子（蘇我 3/4,物部 1/8）
　||　天武天皇（40 代　蘇我 3/4、物部 1/8）
遠智娘（蘇我倉山田石川麻呂女）

⇒
文武天皇（42 代　蘇我 3/4、物部 1/8）
　||----------聖武天皇（45 代　蘇我 7/16、物部 3/32）
宮子(蘇我 1/8,物部 1/16)||----孝謙天皇(46 代　蘇我 9/32,物部 5/64)
　　光明皇后（蘇我 1/8、物部 1/16）

７．天智暗殺

日本書紀の記述では、天智は 671 年 12 月に近江宮で病死したとされますが、井沢氏は「逆

説の日本史 2 古代怨霊編」の中で天智天皇暗殺説を唱えます。根拠は次の通りです。
　天智は、日本書紀に墓所の記載がない唯一の天皇です。埋葬日も殯（もがり。貴人の死後、墓に埋めるまでの間、棺を安置して魂の平安を祈る儀式）の期間も記されていません。墓は山科にありますが、特異な死に方をしたと推測できます。
　平安末期、皇円という僧が書いた扶桑略紀（ふそうりゃくき）。天智は馬に乗って山階（山科）に出かけ、行方不明になり、沓（くつ）の落ちていた場所を墓にしたと書かれ、意味不明ながら「殺害」の文字も見えます。著者の皇円は園城寺（おんじょうじ。通称三井寺）の高僧。三井寺（みいでら）は大友（おおとも）皇子の息子（天智の孫）与多王が創建した天台寺門宗総本山。天智一族とは縁が深い寺です。大友皇子の墓（弘文天皇陵）も三井寺のある一画にあります。従って皇円は天智一族の慰霊を行う立場の人であり、その記述は信頼に値します。天智は近江宮で病死したのではなく、山科で殺されたのです。
　それを裏付けるのが天智天皇崩御の際に皇后（天武の娘・倭姫王）が詠んだ歌です。万葉集巻二 148「青旗の木幡の上を通うとは　目には見れどもただに会わぬかも」。天智の魂が木幡（こはた）のあたりを彷徨しているというのです。山科盆地に発する山科川は盆地の南から流れ出て、2km 南の木幡で当時は巨椋池（おぐらいけ）に注いでいました。巨椋池は、土砂の堆積と干拓で今はありませんが、北東から山科川、東から宇治川、南から木津川、北西から桂川、北から鴨川が流れ込む広大な面積の湖でした。大和国から見れば、木幡が山科の入口であり、木幡から北側が扶桑略紀が記す「山階」の範囲と言えます。日本書紀の記述通り近江宮で病死したのなら、魂が宮を離れた木幡の上を彷徨するのは解せません。
　宇治市小倉町の地蔵院にある「天智天皇」と書かれた碑は、かつて同町小字天皇にあり、そこが天智天皇墓との伝承があります。暗殺され、実際に葬られた場所に伝承が残ったのかもしれません。当時、小倉（おぐら）は巨椋池の池畔であり、木幡の 4km 南です。天智天皇陵（山科区御陵上御廟野町）の辺りに沓が落ちていたとしてそこが事件現場なら、小倉までの水運距離は 12km。川下りですし、帆が 12 月の北風を受ければ三十分です。位置関係を整理すれば次の通りです。

天智天皇陵（沓が落ちていた現場）
　⇓
　⇓　（山科川下り。南へ 8km）
　⇓
木幡（死後の魂が「上を通う」と詠まれた場所）
　⇓
　⇓　（巨椋池東岸沿い。南へ 4km）
　⇓
小倉（天智天皇墓伝承地）

　「天智」という諡号（おくりな）は、中国史上悪名の高い紂（ちゅう）王の持つ玉（ぎょく）のことで、紂王を象徴しています。「天武」は、紂を討って商（しょう）王朝を滅ぼし、周王朝を建てた武王を意味します。武王は紂王を殺しています。

写真６：天智天皇陵
写真７：園城寺（三井寺）金堂
写真８：木幡東部の山並
写真９：地蔵院（宇治市小倉町寺内 32）
写真１０：「天智天皇」碑（地蔵院）

８．弘文天皇（39 代）
　日本書紀によれば天智天皇の皇子・大友は壬申の乱に勝利した天武に追い詰められ、死に至ります。井沢氏は掲題の書の中で次のように述べます。
　「天智が死んだのは 671 年の 12 月であり、壬申の乱によって大友『皇子』が死んだのは 672 年の 7 月である。この間七か月もある。政権の動揺を抑えるためにも、大友は即位して天皇になったはずだ。」
　「もし『大友が天皇だった』と書けば、天武の反乱（壬申の乱）は、天皇への反乱すなわち『大逆』になってしまう。大逆罪というのは、どんな場合にでも絶対に許されない。」。従って日本書紀には即位した事実を書けなかったのです。

明治政府は大友に「弘文」という諡号を贈り、「天皇」と認めています。弘文は 38 代天智の次の 39 代天皇となり、その次の天武以後、一代ずつ繰り下がりました。
先に泉涌寺の祭祀から天武系が除外されている理由を、「天皇家は蘇我の血が濃すぎることを許さなかった」としました。蘇我本家は聖徳太子一族を皆殺しにしました。その結果、蘇我本家は滅びるのですが、その後も蘇我の血を濃くひく天武は天智を暗殺し、弘文天皇への反乱を起こし殺しました。天皇家の人々にとって蘇我の血は忌むべきものになったのです。

写真１１：弘文天皇陵

９．血筋偽装の理由
物部氏が滅んだ後、物部の血を濃く受け継いでいることが天皇の条件でした。5.**天武の正体**の見直し後の系図をご参照下さい。天智は物部の血を最も高い濃度で残す為に近親婚を行った父母（蘇我 1/2、物部 1/4）から物部の血を誰よりも濃く受け継ぎました。
一方、天武も自身が蘇我の血をより濃くひくこと（蘇我 3/4、物部 1/8）を十分意識していたはずです。壬申の乱において天武の軍勢は、大友の近江朝廷側と区別するために着衣に赤い布を付け、赤旗を用いました。これは中国の漢王朝を建てた劉邦（りゅうほう）が、ライバル楚の項羽（こうう）との決戦において用いた故事に習ったことでした。中国では王朝の交代を「革命」とします。天武には「革命」によって近江朝廷にとって替わるという明確な認識があったのです。
にもかかわらず天武が編纂させ、その死後それを改変してまとめられた日本書紀には天武の血筋について正確な事実が書かれませんでした。国史編纂の目的である「神代から万世一系の天皇に統治される偉大な日本国」の概念を打ち立てることができないからです。あくまでも天皇家は万世一系つつがなく引き継がれなければならないのです。天武が天智の同父母弟なら同じく物部の血を最高に受け継ぐ天皇であり、壬申の乱があったものの兄を継ぐ順当な、最も好ましい血を引く王位継承者になります。これが天武の血筋を偽装した理由です。

１０．桓武の郊祀
天智系に戻った最初の 49 代光仁（こうにん）天皇と百済王家の血を引く高野新笠（たかのにいがさ）との間に生まれた山部親王が即位して 50 代桓武（かんむ）天皇になります。第二章で述べたように物部氏は百済王家と姻戚関係にありました。天皇家にとって桓武の血は、より一層理想に近づいたに違いありません。
桓武は延暦 3 年（784）、平城京から長岡京に遷都します。その一年後、河内国交野（かたの。大阪府交野市）で郊祀（こうし）を行います。郊祀とは、中国で王朝交代時に天を祀る儀式です。桓武は天武系から天智系への回帰を明確に「王朝交代」として意識していたのです。
因みに交野市には太陽神・ニギハヤヒが降臨したとされる磐船（いわふね）神社があり、そこから天野川（あまのがわ）が流れ出ています。ニギハヤヒ神については第九章で述べますが、ひと言で言えば神話と歴史の中間に位置する神武天皇（初代じんむ）が生み出される前の形がニギハヤヒ神で、同神が物部氏の祖先という設定になっています。桓武天皇が交野で行った郊祀は、自身を物部王朝の正当な後継者として、物部氏の祖先とされたニギハヤヒ神を祀るものであったと私は考えています。

写真１２：磐船神社（交野市私部 9 丁目 19-1）

第六章　物部の血と藤原不比等

34 代舒明天皇（593-641）から 46 代孝謙天皇（718-770）までの系図を以下に示します。濃厚な近親婚が繰り返されており、その理由は偉大なる物部の血を残すことにあると推測できます。

物部氏の滅亡は 587 年。そのすぐ後に生まれた同父母兄妹である舒明天皇と皇極天皇は何れも蘇我の血が 1/2、物部が 1/4。その 6 世代後、物部氏滅亡から 131 年後に生まれた孝謙天皇にも物部の血は 5/64、即ち約 8%残ったのです。

舒明天皇（34 代）
‖　姪娘（蘇我倉山田石川麻呂の娘）
‖　　‖----------元明天皇（43 代 蘇我 3/4,物部 1/8）
‖---天智天皇（38 代 蘇我 1/2,物部 1/4）　　‖-------文武天皇（42 代）⇒
‖　　‖---持統天皇（41 代 蘇我 3/4,物部 1/8）‖-------元正天皇（44 代）
‖　　‖　　‖----------草壁皇子（蘇我 3/4,物部 1/8）
‖　　‖　天武天皇（40 代　蘇我 3/4、物部 1/8）
‖　　‖-----大田皇女（皇孫）
‖　　‖-----建皇子（皇孫）
‖　遠智娘（蘇我倉山田石川麻呂の娘）
皇極天皇（皇祖母尊。35 代,37 代斉明）

⇒
文武天皇（42 代 蘇我 3/4、物部 1/8）
‖----------聖武天皇（45 代 蘇我 7/16、物部 3/32）
宮子（蘇我 1/8,物部 1/16）‖----孝謙天皇（46 代 蘇我 9/32,物部 5/64）
光明皇后（蘇我 1/8、物部 1/16）

注：蘇我倉山田石川麻呂は物部守屋の妹を妻とした蘇我馬子の孫であり、その二人の娘・姪娘と遠智娘は物部の血を 1/8 ひく可能性があるが確証がなくこの系図には反映させていない。

１．直系継承

日本書紀は皇極天皇を「皇祖母尊」と呼び、皇極天皇を天照（アマテラス）大神に擬して特別な地位に置きます。そして孫の大田皇女と建皇子は「皇孫」とします。この二人の父親は天智天皇。即ち、天智天皇の子孫を皇祖神アマテラスに直結した神聖な系列に置く意図がうかがえます。皇極天皇-天智天皇の後、持統天皇-草壁皇子-文武天皇という直系継承の流れができました。これについては第八章 皇祖神アマテラスの創造にて再度述べます。

蘇我氏でもなく物部氏でもない、その双方の血を受けた混血の血筋が意識され、それを代々受け継ぐべき血脈として、氏族から独立した「天皇家」というものが確立したと見ることができます。その天皇家に、蘇我氏に代わって血を入れるのが藤原不比等（ふひと。659-720）です。

２．藤原不比等の血

天智天皇は、その妃・鏡姫王を中臣鎌足（なかとみのかまたり）に下賜し、鎌足は正妻とします。鏡姫王は、王が付いていることから明らかなように王女、即ち皇族です。皇族でない中臣鎌足が王女を下賜されており、特異な事情があったと推測されます。

鏡姫王はやがて男児を生みます。それが藤原不比等です。

系図の下の部分をご参照下さい。不比等は娘・宮子を文武天皇（42 代もんむ）に嫁がせます。更に、生まれた子、後の聖武天皇（45 代しょうむ）にも娘を嫁がせます。後の光明皇后です。二代続けて天皇に娘を嫁がせ、近親婚をさせているのです。不比等は自身の血を濃厚に天皇家に入れました。

３．藤原家の誕生

藤原不比等とは何者なのでしょう。父は中臣鎌足。先ずは中臣氏の血筋を明らかにしましょう。

私は中臣（なかとみ）氏は、出雲王族の後裔と推測します。記紀によれば神武東征により出雲王朝の王・登美（とみ）ナガスネヒコがヤマト国の軍門に降ります。「なかとみ」の「とみ」は、「とみナガスネヒコ」の「とみ」と共通です。

出雲国も太陽神を祀りました。神の名はニギハヤヒと呼んでいました。出雲は 3 世紀にヤマト国に製鉄技術で貢献し今の枚岡神社（東大阪市出雲井町）がある場所でニギハヤヒを祀っていましたが 3 世紀後半、ヤマト国に滅ぼされた後も王の末裔は、祭祀継続を許されたと考えます。

今日、枚岡神社に祀る神は太陽神ニギハヤヒそのものではなく、祭祀を行う王族の祖先アメノコヤネです。中臣鎌足は、このアメノコヤネの祭祀を司る中臣家の主です。既に滅ぼされた王朝の末裔ですから地位が高い訳はありません。その鎌足に天智天皇が妃・鏡姫王を下賜したというのです。鎌足は死の間際に天智天皇から藤原の姓を賜ります。藤原氏の氏神はアメノコヤネで、枚岡神社から分祀して春日大社（奈良市春日野町）に祀っています。

草香と春日の地名について、椎野禎文氏は著書「日本古代の神話的観想」の中で、「KUSAKA は KASUGA と母音交代と濁音化で変わっているが同じである。春日山の漢字表記は冬至に復活する太陽信仰に基づくのだろう。中臣氏が草香山山麓の枚岡神社から春日山麓に信仰の場を移した」としています。

写真１：枚岡神社拝殿
写真２：春日大社一之鳥居

４．影の天皇家

藤原不比等は、天智天皇の子であったという説があります。鏡姫王は既に天智の子を孕（はら）んでおり、それを知った上で下賜したというのです。

天智天皇の死後、壬申の乱（じんしんのらん）を経て天武の世になります。天武に気付かれず鏡姫王の子は無事成長し藤原不比等と名乗ります。天智は忠臣・中臣鎌足を使って自分の血を残すことに成功したことになります。そして中臣氏が不比等を当主に据えることで中臣家と天智天皇の血筋が合体し、生まれたのが藤原家という訳です。

私は不比等が天智の子であるという説を信じます。その理由は何よりも娘を文武天皇、そしてその子の聖武天皇に嫁がせたことに尽きます。藤原家は天智天皇の血を受け継ぐ、いわば影の天皇家として、天皇家の血脈維持に寄与していると考えるのが素直です。天武亡き後、皇后を即位させ持統天皇としたのも、持統政権を支えたのも不比等でした。

とするならば不比等に流れる物部の血は 1/8。その娘・宮子と光明子（光明皇后）は 1/16。この血を入れることにより聖武天皇 3/32（9%）、孝謙天皇 5/64（8%）と、物部の血は維持されたのです。

不比等は 41 代持統天皇から 44 代元正天皇まで天皇を擁立するキングメーカーとして日本の政治を牛耳りました。その後も藤原氏は天智天皇の血を継ぐ者として特別な存在であり続けます。

写真３：天武・持統天皇陵（高市郡明日香村）
写真４：45 代聖武天皇陵（奈良市法蓮町）

第七章　物部氏と石上神宮

石上神宮（いそのかみじんぐう）は、奈良県天理市街の東側、布留（ふる）山の麓にあります。

同社の公式ホームページによりますと、「当神宮は、日本最古の神社の一つで、武門の棟梁たる物部氏の総氏神として古代信仰の中でも特に異彩を放ち、健康長寿・病気平癒・除災招福・百事成就の守護神として信仰されてきました。」とあります。

物部氏は 5 世紀の応神天皇に始まる「天皇家」ですから石上神宮は国家的な祭祀の場所としてスタートしたはずです。8 世紀に完成した日本書紀に「神宮」と記されたのは伊勢と石上の二社のみです。この章では石上神宮の成り立ちを解き明かします。

写真１：石上布留神社絵図（石上神宮絵葉書より）

１．歴史書の編纂

伊勢神宮は、斎宮（さいぐう）の発掘調査から天武天皇（40 代てんむ）の時代に創建されたことが明らかです。「神宮」という共通の称号から考えれば、石上神宮も天武天皇が創建したと考えられそうです。

天武は、天皇を中心とした中央集権国家建設に邁進し、その一環として歴史書の編纂に着手します。720 年に完成する日本書紀には天武天皇 10 年（681）に帝紀、上古の諸事を記録させたと記されています。又、712 年に完成する古事記序文には天武天皇が帝紀・旧辞をまとめて真実を後世に伝えさせるべく編纂事業をさせ、それを稗田阿礼（ひえだのあれ）に記憶させたとあります。

和銅 4 年（711）9 月、元明天皇は太安万侶（おおのやすまろ）に命じて稗田阿礼の記憶を書面にするよう命じ、翌年 1 月に古事記が献上されたとしています。膨大な内容がたった 4 ヶ月で、しかも漢文で書き上げられたのです。それは古事記作成にあたって、天武天皇の時代にまとめられた内容には、一切手を加えていないという主張に他なりません。

これら日本書紀と古事記の記事は、先ず天武天皇が編纂した基になる歴史書が既にあったこと、それに記紀を編纂させた時の権力者・藤原不比等（ふひと）が自己に都合の良いように手を加えたことを浮かび上がらせます。天武天皇の死後、日本の政治を牛耳った不比等は、天皇を擁立する自己の権力基盤を強固なものにする為に、記紀編纂によって初代神武天皇から続く「万世一系の天皇の血筋」を偽装し天皇の権威を高めたのです。

２．天武の歴史書

天武は歴史書の編纂を行いました。それは物部と蘇我の血みどろの争いを経た過去に鑑み、天皇家による中央集権国家建設を目指した天武にとっては王朝の正統性を主張し、権威を向上させる必要に迫られてのことに違いありません。それならば、天武もその編纂させた歴史書の中で、自身につながる「万世一系の天皇の血筋」を主張したはずです。

太陽神ニギハヤヒを信仰する登美（とみ）ナガスネヒコ率いる出雲王朝の後、それを滅ぼした神武と崇神天皇、5 世紀の応神天皇に始まる物部王朝、6 世紀の継体天皇に始まる蘇我王朝、乙巳の変（いわゆる大化の改新）、そして壬申の乱を経て天武天皇に到るまで、一貫した「天皇家」の虚構を作り上げたのは藤原不比等の独創ではなく、天武天皇が先行していたと私は考えます。

３．石上神宮に祀ったもの

歴代天皇が継承する「三種の神器」（さんしゅのじんぎ）は、曲玉（まがたま）、鏡、剣の三宝を指します。しかし、日本書紀が書かれた時点の実態は「二種の神器」でした。日本書紀の即位の記事において神器に触れているのは継体天皇と宣化天皇、持統天皇の三天皇だけであり、しかも継承されるのは鏡と剣でしかないのです。

天武が考えた神器は鏡と剣の二種類でした。天武は、万世一系の王、即ち「天皇」の血筋を歴史書によって創造しました。二種の神器とは、その歴代の王が連綿と継承してきた血筋の象徴として考案されたものです。実際には王朝は交代しており、現実に継承されてきた二種の神器というものはあり得ません。それを安置し祀る建造物を造ることによって神器の実在を虚構し、視覚的に人々に「万世一系」を納得させることを考えついたはずです。それが「神宮」と呼ばれる伊勢・石上、二つの施設だったのでしょう。

伊勢には鏡を太陽神の象徴として祀りました。この時点ではまだ今日我々が知るところの伊勢神宮の内宮外宮はありません。祭祀を行う役所・斎宮（さいぐう）を以て伊勢神宮としたのです。「神宮」の「宮」は斎宮を指しているものと考えます。その遺跡は三重県多気郡明和町に残ります。詳しくは次の章で述べます。
石上には剣を祀りました。石上にも斎宮があったという言い伝えが残っています。「神宮」という名称自体、斎宮があったことを暗示しています。

４．神剣の所在
記紀によれば、皇位を象徴する神器・クサナギ（草薙）の剣は、神話時代にスサノオが退治したヤマタノオロチの尾から取り出しました。アメノムラクモの剣とも呼ばれます。
日本書紀には天智天皇 7 年（668）、「新羅僧道行が盗んで新羅に持ち帰ろうとしたが、船が難破し戻った」とあります。クサナギの剣がどこに祀られていたかは書かれていません。
熱田神宮では、熱田神宮から持ち出されたものが宮中に戻され、朱鳥元年（686）、天武天皇崩御前の病気を機に熱田に戻されたとします。しかし、その当時熱田が皇位を象徴する剣を安置し祭祀する特別な場所として存在していたとは思えませんし、その痕跡もありません。
一方、石上神宮の摂社、出雲建雄神社（いずもたけおじんじゃ）に書かれた由緒では、「出雲建雄神は草薙の神剣の御霊に坐す。今を去ること千三百余年前、天武天皇朱鳥元年、布留川上日の谷に瑞雲立ち上る中、神剣光を放ちて現れ、『今、此の地に天降り、諸の氏人を守らん』と宣り給い、即ちに鎮座し給う。」とあります。即ち、天武天皇治世の末年（686）に石上で祭祀が始まったということになります。

写真２：摂社出雲建雄神社
写真３：出雲建雄神社拝殿（内山永久寺から移築。国宝）

５．二種類の神剣
天武天皇の時代、神話時代から連綿と続く皇位の象徴としてクサナギの剣が祀り始められたことを述べました。ところが、これを祀る出雲建雄神社は摂社です。石上神宮の主祭神はフツミタマ（布都御魂）という別の剣に宿る神です。これはどうしたことでしょう。
日本書紀によりますと、フツミタマの剣は初代神武天皇が出雲王朝を征服する過程で窮地を脱する時に役立ちました。その前の神話時代、フツヌシ（経津主）とタケミカヅチ（武甕槌）が葦原中国（あしはらなかつくに。出雲、そして日本を暗示）を征服します。フツ御魂（みたま）は、フツ主（ぬし）の魂（たましい）で、フツヌシはフツミタマの剣に宿る神を暗示しています（注）。
即ち、皇位の象徴としての神剣が二種類存在したのです。天武天皇が創建した石上神宮はこれら二つの神剣を祀る施設であったことが解ります。

注：「フツ」に充てられた漢字が「布都」、「経津」とそれぞれ異なる。記紀は漢文（中国語）で記述されており、日本語の「フツ」に漢字を充てるにあたって近い音（おん）の漢字を選んだに過ぎず、漢字の意味は必ずしも考慮する必要はない。

６．藤原不比等の概念
平安時代、927 年にまとめられた延喜式神名帳には、伊勢、鹿島、香取の三社のみが神宮で、石上が抜け落ちています。鹿島神宮にはタケミカヅチ神が祀られフツミタマの剣を神宝としています。香取神宮にはフツヌシ神を祀ります。これら二社が石上に代わってフツミタマを祀る存在になったことを示しています。
もう一つのクサナギの剣は、前述のように熱田神宮が神宝として安置したとしており、石上の存在意義が低下したことが解ります。
第九章と十章で述べますが、鹿島神宮、香取神宮、諏訪大社など主要な神社、祭祀の施設は藤原不比等の時代に建てられました。この点から見れば、天武が石上に祀った剣、及び祭祀の概念は、不比等が構想したものと必ずしも一致しておらず、不比等が石上の地位を他に求めたことに気付かされます。
ここで注目したいのは日本書紀の次の記事です。
天武天皇 3 年（674）8 月、「遣忍壁皇子於石上神宮以膏油瑩神宝。即日勅曰元来諸家貯

於神府宝物今皆還其子孫。」（天武は忍壁（おさかべ）皇子を石上神宮に派遣し、膏油で神宝を磨かせ、即日諸家の宝物を皆その子孫に返還せよと命じた）。

壬申の乱の勃発は 672 年 6 月、天武天皇の即位は 673 年 2 月。それから一年半で石上「神宮」が完成していたはずはありません。この記事は天武が石上神宮を創建する準備の為に行った指示を記録したものです。即ち、天武が石上神宮を創建しようとした時点で、既に石上神宮の基になるものが存在していました。これを石上社（いそのかみしゃ）としましょう。

石上社には「諸家の宝物」が納められていました。即ち、「万世一系の天皇の血筋」の存在を視覚的に訴える役割を担った社（やしろ）としては純粋性に欠けることになります。天武天皇は、「諸家の宝物」を放り出して神器剣を祀る「石上神宮」として再出発を図ったのです。しかし、それでも藤原不比等が意図した純粋性には達しません。石上には別の神器・十種神宝（とくさのかんだから。剣 1 種、鏡 2 種、玉 4 種など。詳しくは第九章で述べる）が残されたからです。それは今日の石上神宮が、十種神宝に宿る神霊を布留御魂（ふるみたま）として祀っていることで裏付けられます。神名の布留（ふる）は石上神宮のある山の名称でもあります。山の神と同化した十種神宝に宿る神を外すことは不可能だったに違いありません。山の神については第十四、十五章で述べます。

７．物部氏と石上社（いそのかみしゃ）

冒頭に引用した石上神宮のホームページには「武門の棟梁たる物部氏の総氏神」とあります。石上神宮の前身である石上社は物部氏、即ち 5 世紀の天皇家が創建したことを意味します。又、石上神宮は、ニギハヤヒの子・宇摩志麻治（ウマシマジ）を「当神宮祭主（さいしゅ）物部氏の祖神」としています。

太陽神ニギハヤヒを信仰したのは登美ナガスネヒコ率いる出雲王朝の人々です。九州から東征した初代天皇・神武、そして崇神天皇に滅ぼされます。出雲の人々は、古事記と日本書紀が描く神話時代の主役です。

一方、物部氏は 5 世紀の天皇家です。出雲王朝、崇神王朝に続く三番目の王朝を始めました。物部氏が出雲王朝の神ニギハヤヒの子・ウマシマジを自らの祖先神とした理由は一つ。それは天武天皇や藤原不比等同様、王統の一本化により王権の正統性を高め、権力基盤を強化し、王権の永続を狙ったからに違いありません。

即ち、被征服者の歴史を自身の歴史に組み込んで王権を強化する方法は、天武天皇や藤原不比等に先立って、5 世紀の天皇家であった物部氏が行っていたのです。中国では王朝の交代を天の声による「革命」として肯定しますので、際立った対照をなす考え方が日本に始まったと言えます。それを視覚化した施設が石上社だったのです。

８．石上社の原風景

物部氏が石上社を造るにあたってはヤマト国が拠点とした奈良盆地東部を見下ろす位置を選びました。石上神宮境内から 5 世紀に造られたとみられる巨大な須恵器の甕が発掘されています。

石上社には三種の神器の元とも言える、祖先神ニギハヤヒが地上にもたらした十種神宝を祀りました。ニギハヤヒは出雲王朝と崇神王朝共通の太陽神であり（第九章で述べます）、十種神宝は出雲王朝が崇神王朝に変わる時から物部王朝に至るまで連綿と受け継がれてきたのです。その神器を受け継ぐ物部王朝は正当な統治者です。その十種神宝の実在を視覚化するために石上社は造られたのです。

石上社には百済王から雄略天皇に贈られた七支刀（国宝。第二章 17.**倭の五王**を参照下さい）など王権を象徴する重要な品々も納めました。5 世紀頃の鉄盾（重要文化財）もあります。先に引用した日本書紀天武天皇 3 年（674）の記事からすれば「諸家の宝物」も収納していました。それを 674 年に整理したとしても、物部天皇家にとって重要なものは現代に到るまで収蔵し続けたのです。

写真４：重要文化財・鉄楯（石上神宮絵葉書より）

第八章　皇祖神アマテラスの創造

前章では天武天皇が造った二つの神宮の内、石上神宮について述べました。この章ではもう一つの伊勢神宮について論じます。

天皇の代替わり毎に都を移転することを歴代遷宮（れきだいせんぐう）と言います。武澤秀一氏はその著書「伊勢神宮と天皇の謎」の中で、歴代遷宮に代わるものとして伊勢神宮の式年遷宮（しきねんせんぐう）が始まったとしています。

「七世紀末、伊勢神宮において式年遷宮がはじまったころ、『皇孫』としての天皇の座は『皇祖』によって根拠づけられるようになっていた。『皇祖神』を設定しなければ、大王一族の単なる世襲による王位独占となってしまい、正統性を欠くからである。天皇をオーソライズする『皇祖』の存在を明確にするものとして、これをまつる伊勢神宮が『再スタート』していたのである。」

即ち、伊勢神宮が「再スタート」する前は天皇の代替わり毎に宮殿を造り替え、正統な後継者であることを世に知らしめていましたが、「再スタート」後の伊勢神宮は皇祖神（こうそしん）を祀る神殿を定期的に建て替え続けることで皇祖神は永続的な命を得、天皇は代替わりしようとも皇祖神の子孫として日本を統治する正統性を維持できるという仕組みです。この仕組みのできた過程を追ってみましょう。

１．皇太子殺し

天武天皇は天智天皇の娘二人との間に皇子を成します。姉の大田皇女との間に生まれたのが大津皇子（おおつのみこ）、妹の持統（じとう）天皇との間に生まれたのが草壁皇子（くさかべのみこ）です。

持統は我が子草壁皇子を天皇にしたかったに違いありません。天武天皇崩御から間もなく、謀反の嫌疑をかけ大津皇子を死に追いやります。

中国では次期皇帝を「皇太子」と定める制度がありました。日本書紀では天武天皇 10 年（681）に草壁皇子を皇太子にしたとあります。ところが、天武天皇 12 年 2 月に大津皇子が「始聴朝政」（国の政治を行い始めた）と記します。皇太子が決まっているのに別の皇子に政治を任せるでしょうか。

天武天皇の世に日本書紀の元になる歴史書はほぼ完成していたはずです。持統は大津皇子を死に追いやった後、急遽「草壁皇子を皇太子にした」との記述を挿入させたものの、大津皇子の「始聴朝政」の記事を見落とし、消し忘れたのでしょう。実際に「始聴朝政」した大津皇子こそ皇太子でした。

```
舒明天皇（34 代）
  ||        遠智娘
  ||          ||-------------------------大田皇女（皇孫）
  ||          ||                              ||---------------------大津皇子（皇太子）
  ||          ||                          天武天皇（40 代）
  ||          ||-----建皇子（皇孫）    ||---------------------草壁皇子
  ||          ||-------------------------持統天皇（41 代）    ||
  ||------天智天皇（38 代。皇祖？）                          ||--------文武天皇（42 代）
  ||          ||-----------------------------------------------------阿部皇女（43 代　元明天皇）
  ||      姪娘
皇極天皇(皇祖母尊。35 代,37 代斉明)
```

写真１：大津皇子を葬ったと見られる鳥谷口古墳（葛城市染野）
写真２：同石棺（寄せ集めの石で組まれている）

２．アマテラスの創造

天武天皇崩御の時点で国史編纂事業はほぼ完成していたであろうことを前章で述べました。持統は日本の国造りを進めた偉大な天武天皇の皇太子を死に追いやりましたので、正統性が揺らいでいます。自身、それに草壁皇子の正統性を高める必要に迫られました。そこで皇祖神アマテラスの創造を思いつき、それを日本書紀に追記したと私は推測します。

日本書紀を見てみましょう。巻第一「神代」には神話が書かれています。イザナギ・イ

ザナミの夫婦神が日本列島を生み、山川草木を生みます。最初に生んだ神は日の神オオヒルメ、次いで月の神ツクヨミです。夫婦は次々と神を生みますが妻イザナミは火の神カグツチを生んだ時に焼け死にます。ところがその後、夫イザナギは一人で太陽神アマテラス、月の神ツクヨミを生むのです。

大地、草木、太陽、月の順に夫婦神が生んでいく、この流れは自然です。かたやイザナギが男やもめになってからオオヒルメとは別の太陽神アマテラスを新たに生み、月の神ツクヨミを重ねて生むなど大変不自然です。アマテラスは、持統、それに記紀の編纂を進めていた藤原不比等が急遽創造し、書き加えた神と推測できます。以下、この推測を前提に追っていきます。

３．皇祖母尊

持統と時の権力者・藤原不比等は皇祖神アマテラスを創造し、歴史書に書き加えました。そしてアマテラスと持統天皇、そしてそれ以降の皇統との関係を書き込みました。その時、「皇祖母尊」（こうそぼそん）、「皇孫」（こうそん）という言葉を作り出します。

第六章にも書きましたが、日本書紀は皇極天皇を「皇祖母尊」と呼び、皇極天皇を天照（アマテラス）大神に擬して特別な地位に置きます。そして孫の大田皇女と建皇子は「皇孫」とします。この二人の父親は天智天皇。即ち、天智天皇の子孫を皇祖神アマテラスに直結した神聖な系列に置く意図がうかがえます。皇極天皇-天智天皇の後、持統天皇-草壁皇子-文武天皇という直系継承の流れが正統化されました。

４．天武の伊勢神宮

創造したアマテラスは歴史書の中に存在するだけでは現実味が足りません。アマテラスを祀る神殿を造り、可視化させねばなりません。伊勢神宮の再スタートです。

先ずは再スタート前の伊勢神宮の形を明確にしましょう。

伊勢神宮を創建したのは天武天皇です。その時点では斎宮（さいぐう）を以て伊勢神宮としていました。日本書紀は第 11 代垂仁天皇の時代にアマテラスを宇陀、近江、美濃を経て伊勢に移したとしますが、事実とは異なります。なぜなら太陽神を祀った檜原神社（ひばらじんじゃ。桜井市三輪）、移動した道中にある長谷寺、室生寺、それに伊勢神宮斎宮（さいぐう）跡（三重県多気郡明和町）は何れも同一緯度上にあり（注 1）、長谷寺と室生寺の起源は天武天皇の時代とみられ、斎宮も発掘調査から天武天皇の頃に始まったことが判明しているからです(注 2）。

天武天皇は斎宮の中に神器、即ち太陽神を象徴する鏡を祀ったのみで、今日ある場所には伊勢神宮は建設していません。太陽神の名はイザナギ、イザナミの夫婦神が生んだオオヒルメだったはずです。「オオ」は美称。「ヒ」は「日」、即ち太陽。「ル」は格助詞「の」の古語。「メ」は「女」。太陽の巫女（みこ）を意味します。とすれば、オオヒルメは、斎宮の主である斎王（さいおう）をも指していたと考えられます。初代斎王は、天武天皇の娘で大津皇子の姉にあたる大来皇女（おおくのひめみこ）が選ばれました。天武の娘は神。神の父・天武も神ということになります。

注 1：小川光三氏が発見した「太陽の道」（「大和の原像　知られざる古代太陽の道」大和書房 1973 年）。詳しくは第十五章で述べる。

注 2：崇神王朝（3 世紀初から 4 世紀末まで約 200 年間）14 天皇の記紀の記述について。初代神武（じんむ）は神話混じり。第 2 代綏靖（すいぜい）から第 9 代開化（かいか）までは事績や物語がほとんど書かれておらず「欠史八代」（けっしはちだい）と呼ばれる（第九章 18.**歴史の延長**をご参照下さい）。第 10 代崇神から 14 代仲哀までは 5 世紀から 7 世紀の情況を織り込んだ内容が多く信頼性に欠ける。おそらく崇神王朝の記録は第 15 代応神天皇に始まる物部王朝に受け継がれず、記紀或いはその基になった天武天皇の歴史書編纂にあたって、適宜創作した事績で埋めたものと筆者は考えている。即ち崇神王朝の歴史は記紀で追えず、専ら考古学に頼らざるを得ない。

５．持統の伊勢神宮

次は再スタート後の伊勢神宮です。

持統天皇と不比等は、鏡を祀る宮・斎宮とは別に、あたかも神そのものが実在するかのように見せる神殿建設を思い立ちました。

新たに造ったというのでは権威や正統性を高める効果はありません。遙か昔から存在し、

建て替えを続けてその時代に至っていることにしなければなりません。斎宮南東には手つかずの照葉樹林に覆われた丘陵地が広がっていました。古代を連想させる適地です。建物は、弥生時代から続く独立棟持柱（どくりつむなもちばしら）を持った高床式倉庫の形態を採りました。今日に続く内宮（ないぐう。注）です。神の実在を強調する為に神に食事を提供する豊受（とようけ）神を祀る神殿・外宮（げぐう）も二年後に建てます。それが今日に続く伊勢神宮の創建です。

持統は即位の年、持統天皇 4 年（690）9 月に式年遷宮を行ったと記されていますが、式年遷宮ではなく新たに神殿を造ったのです。「伊勢神宮」という同じ名称であれば区別はつきませんが、天武が創建したものは神器鏡を安置する斎宮という宮（役所）でした。持統が創建したものはアマテラス神が住む一棟の神殿でした。その両者で「伊勢神宮」を構成したのです。二年後、外宮が加えられます。南北朝時代（14 世紀前半）に斎宮が廃止されても内宮・外宮二つの神殿は建て替えが続けられ、今日に残りました。斎宮は忘れ去られ、神殿だけで伊勢神宮と呼ばれるに至ったのです。

注：「ないくう」と清音を主張する人もいるが、本来日本語は口にこもった発声で清音濁音の区別があいまいであり、筆者は特段清音にこだわらない。因みに「宮」の現代中国語発音記号は「gong」。中国語には清音濁音の区別はなく、「g」は口にこもった発声、「k」は息が出る発声を表す。

写真３：伊勢神宮皇大神宮前階段
写真４：伊勢神宮皇大神宮（アマテラスが住む神殿）

６．持統のあせり

持統が大津皇子を死に追いやってから二年半後、持統 3 年（689）4 月、次期天皇と期待した我が子・草壁皇子が早逝（そうせい）します。

持統の吉野宮（奈良県吉野郡吉野町宮滝）行幸が始まります。吉野は中国から入って来た道教の聖地とされていたようです。最初の行幸は草壁皇子が亡くなる三ヶ月前。草壁の病気平癒を祈ったのでしょう。残念ながら草壁皇子は亡くなります。持統は大津皇子の祟りと怖れたに違いありません。持統は孫（草壁皇子の子。後の文武天皇）の成長を待たなければなりません。

孫まで死なせる訳には行きません。頻繁に吉野宮への行幸を繰り返し、祈ります。持統天皇 4 年から同 10 年まで年平均 4 回です。この間、持統天皇 4 年（690）正月、伊勢に神殿が完成します。日本書紀によればこの年に恒久的首都・藤原京への遷都を決意し、もはや天皇の代替わり毎に宮殿を造り替える必要はなくなりました。

持統天皇 11 年（697）2 月、文武は無事天皇に即位します。同年 4 月、持統は吉野へ行幸します。お礼参りと思われます。これ以降は一度だけ行幸するのみで吉野行きは止みます。

写真５：吉野宮跡（吉野郡吉野町宮滝）
写真６：吉野宮復元模型（吉野歴史資料館）

第九章　神器の創造と変遷＜前編＞

歴代天皇が継承する「三種の神器」（さんしゅのじんぎ）は、記紀に書かれた神話の中で「天孫」（てんそん。太陽神アマテラスの孫）ニニギが「降臨」（こうりん。天から地上に下ること）してもたらしたヤサカニの曲玉（まがたま）、ヤタの鏡、クサナギの剣の三宝を指します。

ただ現実として、記紀が書かれた 8 世紀の時点では鏡と剣の「二種の神器」でした。不思議なことにその剣は二種類あります。一つはクサナギの剣（別名アメノムラクモの剣）。もう一つはフツミタマの剣。これについては第七章で述べました。

この章では神話と神器が創られた経緯と理由、神器が祀られる場所とその変遷を整理してたどって行くことにしましょう。

写真１：出雲王朝出現まで栄えた唐古鍵遺跡出土の勾玉

１．神器の創造

第七章**物部氏と石上神宮**でも触れましたが、先ずは神器が考え出された理由を整理しておきましょう。

中国では王朝の交代を「革命」として肯定します。即ち、滅んだ王朝の皇帝に徳がなかった為に天命が革（あらた）まり、新しい王朝ができたとします。王朝間の連続性は天命によって断たれます。新しい王朝は、その正当性を天によって与えられたとします。

一方、日本では新しい王朝はその前の王朝の神話や歴史を自身の歴史に組み込む「万世一系理論」によって正統性を持たせます。王朝の連続性を仮想することによって新しい王朝の権力基盤を安定させる方法です。

この考え方で編まれたものが記紀です。神武（じんむ）天皇に始まる天皇の血筋が一貫して日本を統治してきたとされました。それを証拠立てるものとして「神器」を考案しました。「私は正統なる後継者である。その証拠に神世（かみよ）から受け継がれてきた神器を持っている。」という訳です。

賢明な読者の皆様には申し上げるまでもないことですが、「神世から受け継がれてきた神器」など実在するはずもありませんし、前政権がやすやすと神器を渡してくれるはずもありません。神器はあくまでも概念上のものです。天皇家でも、神器を祀る各々の神宮でも、神器を象徴する形ある物として剣や鏡を持っているのです。

２．王朝の変遷

記紀では、初代神武天皇がいわゆる出雲王朝を降した後、万世一系の天皇家が統治したことになっています。即ち王朝の変遷は出雲から天皇家への一回のみです。しかしながら纒向遺跡の発掘調査が進んだ結果、出雲王朝はなかったことが判明しました。そこで考古学の成果と記紀の分析を通じて、次のように王朝の変遷をまとめます。

先ず 3 世紀初頭にヒミコ（卑弥呼）を王に立てて新設された連合国家・ヤマト（邪馬台）が広い意味での日本国の始まりです。記紀は二人の初代天皇を記します。神話時代と歴史の間に位置する神武天皇（初代じんむ）、歴史時代の崇神天皇（10 代すじん）です。後者に因んで崇神王朝と呼びます。この王朝を特色づけるものは、前方後円墳、鏡、太陽信仰です。

それから 200 年ほど経った 5 世紀初め、九州から秦氏と共に東征してきた応神天皇（15 代おうじん）に始まる王朝がこれに代わります。特色は、巨大前方後円墳、大土木工事、鉄製甲冑、馬具、鉄製農具、須恵器、機織り、畑作の普及です。この王朝の天皇は「物部」と形容されることから物部（もののべ）王朝とします。

約百年後、西暦 507 年に即位する継体天皇（26 代けいたい）に始まる王朝は蘇我王朝です。蘇我王朝は 645 年の乙巳の変で蘇我本家が滅んだことを以て終わり、現代に続く天皇家の時代になります。

写真２：出雲の四隅突出型古墳模型（弥生の森 3 号墓）
写真３：聖なる山・三輪山（桜井市）

３．最初の王朝交代

記紀によれば初代神武天皇は九州から東征し、奈良盆地に入ります。神武天皇は天から

降臨したニニギの子孫です。奈良盆地は同じく天から降臨したニギハヤヒ神を信じる登美（とみ）長髄彦（ながすねひこ）が治めていました。記紀にナガスネヒコと出雲の関係については書かれていませんが、ナガスネヒコは崇神王朝ができるまえの奈良盆地を中心とする広い地域の支配者ですから出雲王朝の王です。

ナガスネヒコは、神武が「天神之子」（太陽神アマテラスの子孫）であることを知りますが従わず、ニギハヤヒ神に殺され、一族は神武に服従します。

その後、神武は大物主（おおものぬし。奈良盆地東部の三輪山に祀られる神。出雲の神・大国主に同じ）の孫・ヒメタタライスズ姫（古事記では、大物主の娘）を娶ります。

ここで、神武登場まで真面目に日本書紀を読んできた人なら「何でやねん！」と大きな疑問が湧くはずです。神話時代が終わって、ようやく初代天皇の件（くだり）になったと思っていると、現実世界で征服された出雲王が信じていたニギハヤヒ神を差し置いて、「179 万 2 千 4 百 70 余年」以上前に登場した大物主神の孫娘が出てくるのです。その理由は、後編 17.**天孫降臨と神武天皇の創造**で述べます。

ともかく、姫の名の「タタラ」は製鉄の溶鉱炉、「イスズ」は水辺に鈴なりになる原料の褐鉄鉱。出雲の製鉄技術を継承したことを暗示します。二人の間に生まれるのが第二代綏靖（すいぜい）天皇です。記紀の上では出雲から崇神へ、二つの王朝を接続する神話が創られたのです。

４．最初の神器の可能性

崇神王朝は、後にフツミタマと呼ばれる神器剣を創った可能性があります。記紀の記述では、フツミタマの剣は神武が登美ナガスネヒコを征伐する過程で、窮地を脱する時に使われました。

日本書紀ではニギハヤヒに「饒速日」という字が当てられています。太陽神です。ニギハヤヒは「天神之子」と書かれています。神武天皇も太陽神アマテラスの子孫で「天神之子」。共通する「天神之子」という表現を以て、ニギハヤヒも太陽神アマテラスの子孫であることが暗示されています。その共通の祖先神アマテラスを象徴する神器としての鏡を創った可能性もあります。崇神王朝が造営した前方後円墳には多くの鏡が副葬され、鏡への嗜好が明確です。この点については、後に述べます。

実はこの時点では共通の太陽神をアマテラスとは呼んでいません。前章で述べたようにアマテラスは 7 世紀末、藤原不比等（ふひと）と持統（じとう）天皇が生み出した名称です。

崇神王朝は太陽神を何と呼んでいたのか。ニギハヤヒと呼んだはずです。それは次の物部王朝にもニギハヤヒ信仰が引き継がれたことで解るのです。

５．接続神話

記紀によれば物部氏は、ニギハヤヒと出雲王朝最後の王・登美ナガスネヒコの妹との間に生まれたウマシマジを祖先としています。

ニギハヤヒは太陽神、即ち神ですから現実として結婚はありえず、征服者であろうウマシマジを正当化する為に作られた王朝間の接続神話のようです。とするならばこの神話を作ったのは崇神王朝であり、物部氏は前王朝の神話を受け継いだことを意味します。

上記 3.**最初の王朝交代**で記紀に書かれた出雲王朝から崇神王朝への接続神話を記しましたが、ここで最初の王朝交代における接続神話の当初の形を確定すると共に、後に記紀において記された内容との対比を行っておきましょう。

当初の形は太陽神ニギハヤヒが十種神宝（とくさのかんだから）を持って降臨し、太陽神を信仰する前王朝の王（神）の妹と結婚。生まれたのが征服者（継承者）のウマシマジです。即ち、太陽神の降臨があり、その太陽神は共通の信仰の対象であり、その太陽神と被征服者の神の妹との婚姻により生まれたのが征服者であるとして、征服者の正統性を担保するという形でした。

次は記紀。先ず太陽神アマテラスの孫・ニニギが三種の神器を持って降臨し、ニニギの子孫で、神話と歴史の間に位置する神武天皇が前王朝を征服し、前王朝の神・大物主の（孫）娘と結婚し、生まれるのが継承者・綏靖天皇（2 代すいぜい）です。神武は初代天皇として統治も行っていますので、神と征服者を兼任しています。

太陽神ニギハヤヒの役割は、太陽神アマテラス、その孫・ニニギ、その子孫・神武天皇が担うことになりました。日本の歴史を長く見せるために神を分化し複雑にしたのですが、これについては後に述べます。

ウマシマジの征服者としての役割は神話と歴史の中間にあたる神武天皇が、前王朝の継

承者としての役割は婚姻によって生まれた綏靖天皇が担うことになりました。この綏靖天皇は日本の歴史を長く見せる為の架空の存在で（欠史八代。18.**歴史の延長**で述べます）、実態は崇神天皇です。

物部王朝は前王朝の歴史も自身のものに組み込みました。崇神王朝最後の仲哀（ちゅうあい）天皇と神功（じんぐう）皇后の間に生まれた応神（おうじん）天皇が物部王朝初代です。やはり王朝間の接続話を創ったのです。それは王墓の形状として前方後円墳を継承したことで裏付けられます。

６．物部王朝の神器

今日、物部氏ゆかりの石上（いそのかみ）神宮（奈良県天理市）は、ニギハヤヒが天から地上にもたらした十種神宝に宿るフルミタマ神を祀ります（十種神宝は現存せず）。この章の冒頭にニニギが天孫降臨によって三種の神器を地上にもたらしたと記紀に書かれていることを述べましたが、それに先だってニギハヤヒが天より降臨する神話が創られていたことが解ります。

十種神宝は、剣 1 種、鏡 2 種、比礼（ひれ。振ることによって力を持つ、神事に用いる道具）3 種、玉 4 種です。この十種神宝は、後に生み出される三種の神器の前の形であろうと推測できます。

今日、石上神宮の主祭神はフツミタマです。フツミタマの元はこの十種神宝の剣であったものが、後に天武天皇が石上神宮創建にあたって「フツミタマ剣に宿る神」として独立させたものと私は考えます（注）。

第七章で述べましたが、物部王朝は神代から受け継がれる神器である十種神宝の実在感を高めるために神宝（神器）を祀る社（やしろ）を建てました。それが石上神宮の前身、石上社です。

注：日本後紀桓武天皇延暦 23 年（804）2 月、石上社の兵仗（ひょうじょう。神器ではない武器）を移したところ天皇が病気になり怪異が起こる。この時の鎮魂の対象がフツミタマではなく十種神宝に宿るフルミタマであったことからフツミタマの原点は十種神宝にあったことが解る。

「兵仗を移した」理由について。桓武天皇は物部の血を強く意識しており（第五章天武天皇 10.**桓武の郊祀**をご参照下さい）、物部王朝が考案した神器・十種神宝を祀る石上神宮の純化を図るためにそれ以外の武器類の保管場所を別に求めたものと筆者は推測する。

写真４：石上神宮宝物（同宮絵葉書より）

７．物部王朝の神話と歴史

この当時、天皇の呼称はまだ使われていませんが、天皇という語を使って物部王朝の神話と歴史を整理すれば次の通りです。

太陽神ニギハヤヒの降臨（十種神宝の創造）
↓
出雲王朝の滅亡
↓
ニギハヤヒと出雲王朝の神の妹の結婚、
ウマシマジの誕生（王朝間の接続神話）
↓
崇神王朝の成立
↓
仲哀天皇と神功皇后の結婚、
応神天皇の誕生（王朝間の接続話）
↓
物部王朝の成立

８．蘇我王朝

蘇我王朝の初代継体（けいたい）天皇は、前王朝の初代応神（おうじん）天皇の五世孫。王朝間の接続は容易でした。

現実としても蘇我王朝は前王朝の物部氏と姻戚関係を結びました。物部氏の勢力は強く

残存しており、継体は太子、皇子と共に殺され 8 年間の抗争が起きます（第三章 1.**継体天皇の次世代**を参照下さい）。やがて即位した欽明（きんめい）天皇、次の敏達（びだつ）天皇は蘇我と物部のハーフです。

587 年、蘇我氏が物部氏を滅ぼしますと物部の血は不要ですが、その後も物部の血が入った天皇を傀儡（かいらい）として擁立し続けました。蘇我と物部の混血が天皇の血筋となり、今日に続く天皇家の概念が生まれます。

その天皇家から聖徳太子という素晴らしいリーダーが生まれたのは蘇我氏の誤算でした。死後も太子の評価は上がる一方です。それにつれて太子の子・山背大兄王（やましろのおおえのおう）の人望も高まったため、蘇我氏は 643 年に一族を皆殺しにします。

そこに天皇家の逆襲が待っていました。645 年、天皇家によって蘇我本家が滅ぼされるのです。蘇我王朝の滅亡、そして今に続く天皇家の時代の始まりです。

９．歴史書編纂

672 年、壬申（じんしん）の乱に勝利した天武（てんむ）は、天皇を中心とした中央集権国家の建設に邁進します。「天皇」の呼称を始めたのが天武天皇です。中国の「皇帝」を意識してのことでした。それまでは「大王」（おおきみ）だったのです。

天武は日本を中国に対抗できる立派な国家にしようと考えました。中国は広大な国土と膨大な人口を擁します。そして長い文明と歴史を持ちます。日本も長い歴史と文明を持ち続けてきたという記録を残さなければなりません。中国は絶対的な権力を持つ皇帝が統治します。日本も絶対的な力を持つ天皇が神代（かみよ）から統治してきたとする歴史を作り、天皇を神格化し、未来に向けて天皇による統治を容易にする歴史書を作ることにしました。

１０．二つめの神剣

天武は、太陽神ニギハヤヒが地上にもたらし出雲王朝の征服に役立った剣を「フツミタマ」として、十種神宝から独立した神剣として祀ることにしました。その上で二つめの神剣を創造します。クサナギの剣です。

第七章に書きましたが石上神宮の摂社・出雲建雄神社（いずもたけおじんじゃ）に書かれた由緒では、「出雲建雄神は草薙の神剣の御霊に坐す。今を去ること千三百余年前、天武天皇朱鳥元年、布留川上日の谷に瑞雲立ち上る中、神剣光を放ちて現れ、『今、此の地に天降り、諸の氏人を守らん』と宣り給い、即ちに鎮座し給う。」とあります。即ち、天武天皇治世の末年に石上（いそのかみ）で祭祀が始まりました。

写真５：出雲建雄神社

１１．二つの理由

なぜ二つめの神剣を創る必要があったのでしょう。天武はフツミタマの剣に欠陥があることに気づきました。なぜならこの剣は最初の出雲王朝の征服に役立ったものであり、出雲王朝から継承されたものではないからです。

天武は王朝間の連続性を強化するほど長い歴史の頂点に自身が立つことになり、盤石な中央集権国家が形成できると考えました。その為には最初の出雲王朝から受け継がれた剣が必要でした。

まず天武は太陽神ニギハヤヒとは別に、ニギハヤヒの祖先として太陽神オオヒルメを創造しました。おそらく出雲で祀られていたであろう神・スサノオをオオヒルメ（古事記、日本書紀編纂時に「アマテラス」に改変）の弟ということにします。スサノオは天下り、退治した八岐大蛇（やまたのおろち）からクサナギの剣を得ます。そしてスサノオの子が大国主（おおくにぬし）、即ち出雲王朝の王（神）ということにしました。クサナギの剣こそ初代出雲王朝が成立する前から存在し､連綿と受け継がれてきた神器となったのです。

天武天皇が創造した神話と歴史は次のようなものだったと推測できます。

創造神イザナギとイザナミの結婚
↓
太陽神オオヒルメの誕生
↓
オオヒルメの弟・スサノオの降臨
↓

八岐大蛇退治（クサナギの剣の神話）
↓
スサノオとクシイナダ姫の結婚、
大国主の誕生、大国主による国造り
出雲王朝の成立
↓
太陽神オオヒルメの子ニギハヤヒ神の降臨
（フツミタマ剣の神話）
↓
大国主（大物主）の国譲り
↓
ニギハヤヒ神と大物主の妹の結婚、
ウマシマジ（綏靖天皇）の誕生（王朝間の接続神話）
崇神王朝の成立（これ以前は神話、以後は歴史）
↓
ヤマトタケルの遠征（クサナギの剣の神話）
↓
仲哀（ちゅうあい）天皇と神功（じんぐう）皇后の結婚、
応神（おうじん）天皇の誕生（王朝間の接続話）
物部王朝の成立
↓
継体（けいたい）天皇（応神天皇の五世孫）
（蘇我王朝）
↓
天武天皇

１２．神器鏡の再生

天武は太陽神オオヒルメの象徴として神器鏡を創造しました。その鏡を祀るために伊勢神宮を、フツミタマの剣を祀るために石上神宮を創建しクサナギの剣を加えました。天武が創った「神宮」とは、「宮」の文字が示すように神器を安置し祭祀を行う役所・斎宮（さいぐう）のことでした。

天武が神器鏡を創造したのは、初めて神器の鏡を創造したであろう崇神（すじん）王朝を意識してのことでした。なぜそのようなことが言えるのか。崇神王朝が奈良盆地に最初に造った大前方後円墳・箸墓（はしはか）古墳は同王朝の始祖王・崇神天皇墓（ヒミコ墓の可能性が高い。第十五章で述べる）とみられますが、その古墳と、そのそばの太陽を祀る桧原（ひばら）神社、伊勢神宮斎宮跡が同緯度に並んでいるからです（小川光三氏が発見した「太陽の道」。詳しくは第十五章で述べる）。太陽は始祖王墓の真東（まひがし）、伊勢神宮の彼方から昇ります。明確に太陽と鏡を意識して斎宮の場所を選んだことが解ります。

写真６：石上神宮楼門（重要文化財）
写真７：石上神宮拝殿（国宝）

１３．山の神

天武が創った神器の鏡は、太陽神のみならずもう一つの神を象徴していました。生死を司り、豊穣をもたらす山の神です。山の神の象徴は蛇。「カガミ」の「カカ」は蛇の古語。「ミ」は身。鏡は蛇神を映すもの、山の神の象徴でもあったのです。

この山の神信仰は弥生時代に始まるもので、その前の唐古・鍵（からこかぎ）遺跡を残した人々にも共通したものでした。崇神王朝も持っていたはずです。天武は鏡と共に山の神信仰も再生したのです。山の神信仰については第十四章で詳しく述べます。

天武は山の神を神話と歴史に織り込みましたが、後に記紀が編纂される時にその記述は削除されてしまいます。意図的であったかどうかは解りませんが、次の箇所には明確に残りました。

天武はクサナギの剣を創造し、その実在感を高める為にヤマトタケルの東国遠征のくだりを挿入します。第 12 代景行天皇の世、皇子ヤマトタケルはクサナギの剣を持ち東国遠征に向かいます。「クサ」は猛々しいという形容詞で、クサナギの剣とは「ギラギラ光る切

れ味抜群の剣」といった意味ですが、その剣で草をないで危難を切り抜けたので草薙剣（くさなぎのつるぎ）と呼ばれるようになったとする駄洒落（だじゃれ）のような一説も記して印象を高めています。その後、剣を持たずに出かけたヤマトタケルは伊吹山（いぶきやま）で山の神との戦いで消耗し、これが死につながります。

クサナギの剣自体、スサノオが退治した八岐大蛇（やまたのおろち）の尾から出たものです。大蛇に呑まれようとするクシイナダ姫、その老父母アシナヅチ、テナヅチ、その祖先ヤマツミ神の名は全て蛇神を意味しています。即ち、それぞれ「櫛稲田姫」、「足無つ霊（ち）」、「手無つ霊」、「山つ蛇（み）神」です。櫛は蛇の象徴であり蛇は稲田の守護神、蛇には足も手もありません（吉野裕子著「山の神」第一章）。クシイナダ姫とスサノオの子が出雲の王（神）大己貴（おおあなむち。大国主に同じ）です。太陽神の弟であるスサノオが天から降臨し、稲作農民を象徴する山の神の娘・クシイナダ姫と結婚し、その間に生まれた子で太陽神の子孫でもある大国主が出雲を征服し、そして日本を支配したとする神話です。

私は本章 5. **接続神話** で、「物部氏は、ニギハヤヒと出雲王朝最後の王・登美ナガスネヒコの妹の間に生まれたウマシマジを祖先としています。（中略）征服者であろうウマシマジを正当化する為に作られた王朝間の接続神話のようです。」と述べました。出雲王朝の初代であり征服者の大己貴（大国主）と崇神王朝の初代であり征服者のウマシマジが相似関係にあることが解ります。

第九章＜前編＞終わり

第九章　神器の創造と変遷＜後編＞

１４．神話の完成

686 年に天武（てんむ）天皇が亡くなると藤原不比等（ふひと）の時代がやってきます。不比等は天智（てんち）天皇の子であり天皇家に娘を嫁がせる藤原家の実質上の初代です。天武は天智を暗殺し、壬申（じんしん）の乱で天智の子である弘文天皇を自決させたことは第五章で述べました。不比等は天武を憎んでいます。

690 年、中国・唐の高宗の皇后・武則天（ぶそくてん）が皇帝に即位し、国号を周と改めました。国の乗っ取りです。都も長安（ちょうあん）から洛陽（らくよう）に遷し、神都（しんと）と改名しました。武則天は、中国史上初、そして唯一の女帝です。

不比等は天武天皇の皇后を持統（じとう）天皇として擁立しますが、周にならってその即位年を武則天と同じ 690 年にします。建設途上の藤原京に代えて、神都と同緯度に平城京を建設します（第十四章で詳しく述べます）。

不比等は、天皇を中心とした中央集権国家建設の一環として天武が編纂した歴史書に手を加えます。神話を更に長く複雑なものにし、歴史時代の始まりを千年近く遡らせて延長することで、日本が長い歴史をもつ立派な国であるように偽装しました。完成したものが古事記と日本書紀です。天皇家の神格化は一層進み、頂点に立つ天皇の地位は一段の高みに上がりました。

主たる改変は、神話時代から実質上の初代天皇である崇神（すじん）にかけての部分で行われました。次にその流れを記します。不比等が新たに盛り込んだ部分には左側に「＊」と、以下で触れる段落の番号を付けました。

創造神イザナギとイザナミの結婚
↓
太陽神オオヒルメの誕生
↓
＊15 イザナミの死
↓
＊15 太陽神アマテラスの誕生
↓
アマテラスの弟・スサノオの降臨
↓
八岐大蛇退治（クサナギの剣の神話）
↓
スサノオとクシイナダ姫の結婚、
大国主の誕生、大国主による国造り
出雲王朝の成立
↓
＊16 フツヌシとタケミカヅチの降臨
（フツミタマの剣の創造）
↓
＊16 大国主の国譲り（一回目。神話時代）
↓
＊17 ニニギの天孫降臨（三種の神器の創造）
↓
＊17 神武天皇の誕生
↓
登美ナガスネヒコの国譲り（二回目。歴史時代）
↓
初代神武天皇と大物主の孫娘の結婚、
二代目綏靖天皇の誕生（王朝間の接続神話）
↓
＊21 二代目から九代目まで架空の天皇（欠史八代）の創造
↓
第十代崇神天皇（実質上の初代天皇。これ以降歴史時代）

１５．アマテラスの創造

山の神信仰を含んだ太陽神オオヒルメは不要です（山の神信仰が太陽信仰と結びついたことについては第十四章で詳しく述べます）。「皇祖神」（皇室の祖とされる神）の概念を明確にし、純粋な太陽神アマテラスを皇祖神として創造します。

その方法はかなり杜撰（ずさん）です。天武が創った太陽神オオヒルメはそのまま残し、重ねて太陽神アマテラスを生むことにします。即ち、創造神イザナギとイザナミ夫婦が日本列島、オオヒルメ、月の神ツクヨミ、スサノオを生んだ後、女神イザナミが死にます。男やもめになったイザナギがアマテラスを生み、ツクヨミ、スサノオを重ねて生みます。多くの「一書」（別の書物）を引用してオオヒルメの別名がアマテラスであるかのような記述も盛り込みました。

矛盾に満ちた複雑で長いものになりましたが、それは不比等の狙ったところでした。長くて複雑なほど日本は中国に対抗できる長い歴史と文明を持つことになるからです。

伊勢神宮斎宮の南東には手つかずの照葉樹林に覆われた丘陵地が拡がります。不比等と持統天皇はここにアマテラスが住む神殿を建てます。これが今日まで続く伊勢神宮であることは前章で述べました。伊勢神宮斎宮（さいぐう）は維持しますが、祭神をアマテラスに変え、それを象徴する鏡を取り替えたであろうことは想像に難くありません。

１６．二度の国譲りとフツヌシ神の創造

天武天皇はフツミタマの剣の欠陥に気付き、最初の出雲王朝成立前から受け継がれるクサナギの剣を創造しましたが、フツミタマはそのまま残されました。

不比等は、国譲りの話を一回増やして二回にし、フツミタマの欠陥を補います。

先ず、タケミカヅチとフツヌシの二神が降臨し、出雲王朝の大国主が国を譲ることにしました。フツヌシ神はフツミタマの剣に宿る神を象徴しています。その後神武天皇が東征し、フツミタマの剣で窮地を切り抜け、登美ナガスネヒコが国（出雲王朝）を譲ります。

即ち、出雲王朝を二つに分け、神話時代に設定された出雲王朝は大国主が国を譲り、歴史時代に設定された初代神武天皇の東征においては登美ナガスネヒコが国を譲ります。その二回の国譲りにおいてフツミタマが役に立ちます。フツミタマの剣は出雲王朝成立以前から皇祖神アマテラスの住む天の世界に存在したという設定であり、フツミタマの剣は、地上で得られたクサナギの剣より古く尊い存在になったのです。

実は、日本書紀に先行して完成した古事記には肝心のフツヌシ神の降臨が抜けています。古事記編纂時点では、以下に述べる歴史の延長を目的として先ずは「二度の国譲り」を創造し最初の国譲りではタケミカヅチだけを降臨させました。第十四章で述べますが、タケミカヅチは平城京の守護神として創造されたものです。8 年後の日本書紀完成までにフツヌシ神を創造してフツミタマの剣の欠陥を補ったことが解ります。

１７．天孫降臨と神武天皇の創造

そもそも国譲りで出雲王朝に国を譲らせたのは、降臨した太陽神ニギハヤヒでした。本来「国譲り」は神話時代に押し込められた出雲王朝から現実の王朝への接続神話です。

不比等はこれを二回に分け、一回目は新しい神タケミカヅチとフツヌシを降臨させました。二度の国譲りを設定した不比等としては二回目は歴史時代の出来事にしなければなりません。神を降臨させる訳にはいきません。そこで初代神武天皇を登場させました。神武の在位は 76 年とし、この後述べる「歴史の延長」にも利用します。

神武登場を具体的に見てみましょう。不比等は新しくニニギ神を創造し、神話時代の国譲りの後、三種の神器を持って降臨したとし、海幸彦（うみさちひこ。隼人の祖先）と山幸彦（やまさちひこ。神武天皇の祖父）の神話を挿入した上で、ニニギ降臨から「179 万 2 千 4 百 70 余年」後に神武（じんむ）が東征し、国を譲り受けることにします。

神武の結婚相手は、神話時代の出雲の王である大国主の孫・ヒメタタライスズ姫（**3.最初の王朝交代** をご参照下さい）。実在を前提とする初代天皇にもかかわらず何十万歳かの嫁をもらったわけで、明らかに神武は神話と歴史の中間の存在になっています。

こうして太陽神ニギハヤヒの果たした役割を太陽神アマテラス、タケミカヅチとフツヌシ神、それにニニギ神と神武天皇が分担することになり、ニギハヤヒ神の出る幕がなくなってしまいました。ニギハヤヒ神は隅っこに追いやられたのです。その追いやられ方はひどいものです。征服した側から外され、単に征服された登美ナガスネヒコが信じる神になったのです。

１８．海幸彦と隼人

海幸彦が出たところで隼人について考察しておきましょう。

記紀は、応神天皇の北部九州から大和への東征における海上輸送と水軍、秦氏の朝鮮半島から大和に至る移住を助けた海上輸送、物部王朝の海上交通と交易、雄略天皇による百済再興のための大規模な兵力の輸送を担った者の記述を欠きます。しかし意図的に一切の記録を消す理由はなく、何かしらの手掛かりが残るはずです。

記紀に隼人の祖は海幸彦とあります。日本書紀の海幸彦山幸彦の神話は 4 つの異説（「一書」）を挙げるなど長文であり、意図的に重点を置いたことは明らかです。記紀に「天皇と同じ太陽神アマテラスの子孫である『海幸彦』を祖とする」と設定された隼人こそが航海の民であり、物部王朝の盟友として海上輸送、海上兵力を支えたものと私は考えます。

隼人の拠点はどこにあったのか。これも記紀に手掛かりがあります。ニニギは日向（ひゅうが。現在の宮崎県と鹿児島県。後に薩摩と大隅が分離）の高千穂に降臨し、コノハナサクヤヒメとの間に海幸彦、山幸彦が生まれます。高千穂は霧島連山にあり、その東は大淀川水系を成し下流は宮崎平野。南は菱田川水系を成し、鹿児島県大隅半島東側、志布志湾に流れ込みます。この地域には 4 世紀中頃から 5 世紀後期にかけて大古墳が築かれ（宮崎県の生目古墳群と西都原古墳群、大隅半島北部の唐仁古墳群と横瀬古墳）、相応の地方勢力の存在が推定できます（注）。

日本書紀に隼人の居住地が最初に記されるのは天武天皇 11 年（682）7 月。大隅と阿多（現在の鹿児島県南西部）の隼人が朝廷で相撲を取ったとあります。日向国から薩摩国が分離するのは 702 年、大隅国が分離するのは 713 年ですから、この時点で日向国の南部（宮崎県南部から鹿児島県）は隼人の根拠地であったことが確認できます。ニニギが降臨したとする高千穂は隼人の聖なる山だったのです。

注：主要古墳一覧

古墳名	墳形	所在地	墳丘長	築造時期
生目古墳群 3 号墳	前方後円墳	宮崎市	137m	4 世紀中頃
唐仁大塚古墳	同	鹿児島県肝属郡	140m	4 世紀末
女狭穂塚古墳	同	宮崎県西都市	176m	5 世紀前半
男狭穂塚古墳	帆立貝形古墳	宮崎県西都市	176m	5 世紀前半
横瀬古墳	前方後円墳	鹿児島県曽於郡	137m	5 世紀中-後半

１９．隼人と大王

記紀では応神天皇と仁徳天皇が日向の媛を娶ります。媛は隼人の王女のはずです。応神天皇は泉長媛。この婚姻により隼人の海上輸送と水軍の協力を得て応神は朝鮮半島南部を支配すると共に、物部王朝を開くことができたのでしょう。皇子の仁徳は髮長媛。二人の間に大草香皇子と若日下部王が生まれ（第二章 13.**番狂わせ**系図をご参照下さい）、若日下部王は雄略天皇の皇后になります。

日本書紀の隼人初出は、仁徳天皇没後（420 年頃）の王位継承争いとみられる墨江中王の乱。中王を裏切る近習として登場します。雄略天皇の葬儀（503 年と推定）にも近習の隼人が悲しみのあまり食事が喉を通らず死ぬ記事があります。5 世紀を通して隼人の一定の地位のある者が大王（天皇）と極めて近い関係を維持していたようです。第二章前編で「仁徳天皇が磐之媛のために葛城部（かつらぎべ。葛城に設けられた奉仕集団）を定め」葛城が百済の拠点となっていたこと、「百済から極めて地位の高い王族が、おそらく途切れずに日本に派遣され」いわゆる大使の役割を果たし、「天皇に嫁いだ百済王女を支援すると共に、次の天皇もしくは次期天皇と目される皇子に百済王の媛を嫁がせることを主たる任務としていた」ことを書きました。隼人と王家の関係もこれと同様であったと私は考えます。

二つの記事の「近習隼人」は隼人の王族であり、地名から京田辺市大住（おおすみ）を中心とした地域を拠点にしたと推測できます。大住は木津川が巨椋池に流れ込む地点にあり、巨椋池から淀川を 30km 下れば大阪湾（瀬戸内海）に至ります。木津川を挟んだ対岸の城陽市にはこの地域最大の前方後円墳・久津川車塚古墳（5 世紀前半。墳丘長 180m）があり、この古墳には三角の帆を張る船が描かれた円筒埴輪が並べられました。

大草香皇子は妹・若日下部王と大長谷王（後の雄略天皇）の結婚をめぐって殺されます。百済と隼人の間で、媛を天皇や皇子に嫁がせる競合があったのです。西都原古墳群の女狭穂塚（めさほづか）古墳（5 世紀前半）は、上石津ミサンザイ古墳（5 世紀初頭-前期。堺市西区石津ヶ丘。宮内庁は履中天皇陵とするが、筆者は築造年代から仁徳天皇陵と推定。

第 13 章注書きを参照下さい。墳丘長 365m）と相似形で、前者は後者の墳丘長の 48.3%、後円部高 52.9%です。大草香皇子が母の母国日向の女狭穂塚古墳に葬られ、父・仁徳の墓の 1/2 の規模で造成されたと考えれば辻褄が合います。

写真８：久津川車塚古墳後円部（城陽市平川車塚。5 世紀前半）
写真９：船が描かれた円筒埴輪（久津川車塚古墳出土。城陽市歴史民俗資料館展示物）

２０．隼人の凋落

隼人は、天智天皇の百済再興を目指した朝鮮半島出兵の海上輸送と共に水軍の主力を担い、白村江の敗北（663 年）の結果、勢力が衰えたものと私は考えています。

隼人は 713 年、大隅国の設置に伴い反乱を起こします。その後日本書紀が完成する 720 年にも大規模な反乱を起こしますが鎮圧され、律令体制に組み込まれます。

不比等は記紀編纂にあたり、隼人の反乱を鎮め、統治を容易にする為に隼人の聖地・高千穂をニニギ降臨の場所に選んでニニギを天皇家と共通の祖先神としました。飴です。

古事記はニニギの妻・コノハナサクヤヒメの本名をカムアタツヒメ（アタの女神）と記します。アタ（阿多）は鹿児島県南西部。隼人を追いやりたい辺境地アタの地名を入れてそこがあたかも隼人の母国であるかのように記したのです。

日本書紀の海幸彦山幸彦神話第二の「一書」の最後に「是以火酢芹命苗裔諸隼人等至今不離天皇宮墻之傍代吠狗而奉事者矣」（海幸彦が神武天皇の祖父である山幸彦に仕えるようになったので、海幸彦の後裔である諸々の隼人は、今に至るまで天皇の内裏の傍らを離れず番犬になりお仕えしているのだ）とあります。隼人はその始まりから今に至るまで番犬に過ぎなかったという朝廷に都合の良い歴史を創ったのです。そして隼人の反発を和らげる為に、４つもの「一書」を並べてその中に埋もれる形にしました。その上でそれを実体化する目的で朝廷に「隼人司」を置きました。

尚、宮崎県西臼杵郡（にしうすきぐん）にも高千穂があります。隼人の元の聖地はここであったものが、船材用の木材資源の枯渇から本拠を南方に移したとも考えられます。

２１．歴史の延長

中国の初代王朝・夏（か）ができたのは紀元前二千年。不比等が生きた時代に中国は二千七百年の歴史を持ちました。一方日本は、3 世紀にヤマト国（邪馬台国）ができてから五百年の歴史しかありません。不比等は、歴史を延ばそうと考えました。方法は簡単です。神武天皇の即位を九百年余り遡らせ、紀元前 660 年（昭和 15 年を皇紀 2600 年とした場合）とします。浮いたその九百年間に架空の天皇八代を設定したのです。第 2 代綏靖（すいぜい）天皇から第 9 代開化（かいか）天皇まで。この間、記紀には事績や物語がほとんど書かれていません。これを「欠史八代」（けっしはちだい）と言います。

第十代崇神（すじん）が実質上の初代天皇。日本書紀も神武天皇と同様、「ハツクニシラス」（初代天皇）とします。

初代神武天皇と欠史八代で九百年を埋めるのは困難ですので、崇神天皇の即位も実際よりはかなり古く設定され、寿命も百二十歳。この後の天皇も延長した歴史を埋める為に 16 代仁徳天皇に至るまで長寿にされます。

２２．鹿島神宮と香取神宮

神器に戻りましょう。

不比等は皇祖神アマテラスを祀る神殿を建設しました。斎宮にはアマテラスを象徴する神器鏡を祀りました。次は、二つの神剣を祀る神社の建設です。

不比等は、二つの剣のみならずニギハヤヒ神がもたらした十種神宝（とくさのかんだから）や物部王朝の宝物を併せて祀る石上（いそのかみ）神宮に代わって、純粋に神器剣を祀る鹿島（かしま）、香取（かとり）、熱田（あつた）の三つの神社を造ります。

鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）にはタケミカヅチ神が祀られ、フツミタマの剣を神宝としています。香取神宮（千葉県香取市）にはフツヌシ神を祀ります。フツヌシ神がフツミタマの剣を象徴していることは第七章 5.**二種類の神剣**で述べた通りです。これら二社が石上に代わってフツミタマを祀る存在になりました。二社になった理由は、先に述べたように平城京の守護神として先ずはタケミカヅチを創造し、タケミカヅチだけを祀る鹿島神宮を建設しましたが、日本書紀ができるまでの間にフツヌシを創造しましたので別に香取神宮を建設せざるを得なくなり、そうすると神器と関係のないタケミカヅチの重みが減る為、やむなく鹿島神宮もフツミタマの剣を祀ることにしたのでしょう。

石上は国家級の祭祀を行う場所ではなくなりました。平安時代、927 年にまとめられた延喜式神名帳には、伊勢、鹿島、香取の三社のみが神宮で、石上が抜け落ちています。
尚、鹿島、香取は「神宮」とは言うものの、斎宮は伴っていません。高い格付けを表す為に「神宮」の呼称が使われるようになったのです。

写真１０：物部王朝が祀り始めた住吉大社
写真１１：物部守屋を追悼する善光寺

２３．熱田神宮
もう一つの神剣・クサナギは熱田神宮（名古屋市）に祀ります。熱田は鹿島、香取に比べて神階が低かったのですが、いつのまにか神宮を名乗るようになります。
熱田神宮では、ヤマトタケルの死後、その妃が剣を熱田に祀ったのが神宮の始まりとしています。
日本書紀には天智天皇 7 年（668）、「新羅僧道行が盗んで新羅に持ち帰ろうとしたが、船が難破し戻った」とあります。熱田神宮では、熱田神宮から持ち出されたものが宮中に戻され、朱鳥元（686）年、天武天皇崩御前の病気を機に熱田に戻されたとします。朱鳥元年といえば石上で祀り始めた年です。熱田が石上にとって代わったことを示します。

２４．熱田神宮その後
熱田神宮は鎌倉時代にも栄えます。源頼朝（みなもとのよりとも）の生母が熱田神宮の大宮司藤原季範（ふじわらすえのり）の娘だったのです。室町時代も守護・斯波（しば）氏の保護を受け、織田信長の寄進も得ました。一時衰退しますが、貞享 3 年（1686）、徳川五代将軍綱吉が再興。綱吉が帰依した真言宗豊山派の寺として生まれ変わります。
明治維新の廃仏毀釈により、ほとんどの建物は破壊され、記録も失われてしまいました。新たに国家神道を担う熱田神宮としての再出発です。記紀に書かれた三種の神器・クサナギの剣を祀っていることが権威付けに役立ちました。大日本帝国拡大の為に戦争が続きましたので「戦の神」として大繁盛しました。しかし、敗戦を経て平和国家になった現代日本では、何とも収まりの悪いことになってしまいました。ただ今日も多くの参拝者で賑わいます。それは伊勢、鹿島、香取、石上と同様にこの国の成り立ちに関わる神器に宿る神が祀られているからに他なりません。

第九章終わり

第十章　物部氏と善光寺

587 年、用明天皇（31 代ようめい。在位 585-587）の死後、物部氏の当主・物部守屋（もりや）は蘇我馬子らによって殺され、物部氏は滅亡します。いわゆる丁未の乱（ていびのらん）です。その物部守屋の鎮魂施設が善光寺（長野市元善町 491）であることはほとんど知られていません。本章では善光寺の本質に迫ります。

『善光寺縁起』によれば、御本尊の一光三尊阿弥陀如来様は、インドから朝鮮半島百済国へとお渡りになり、欽明天皇十三年（552 年）、仏教伝来の折りに百済から日本へ伝えられた日本最古の仏像といわれております。この仏像は、仏教の受容を巡っての崇仏・廃仏論争の最中、廃仏派の物部氏によって難波の堀江へと打ち捨てられました。後に、信濃国司の従者として都に上った本田善光が信濃の国へとお連れし、はじめは今の長野県飯田市でお祀りされ、後に皇極天皇元年（642 年）現在の地に遷座いたしました。皇極天皇三年（644 年）には勅願により伽藍が造営され、本田善光の名を取って「善光寺」と名付けられました。創建以来十数回の火災に遭いましたが、その度ごとに、民衆の如来様をお慕いする心によって復興され、護持されてまいりました。（信州善光寺公式サイト）

写真１：善光寺山門

１．守屋柱

善光寺本堂一番奥の内々陣と呼ばれる祭壇の上、左側に本尊、右側に本田善光（ほんだぜんこう）家族像。そして祭壇の中央には守屋の霊魂が宿る守屋柱があります。

「本堂で手を合わせることは、内々陣左手に鎮座する阿弥陀如来に祈りをささげることとともに、内々陣中央に峙立する守屋柱に宿る物部守屋の霊を鎮魂することに通じる。

また戒壇めぐりを行うことは、守屋柱を一周し、錠前、すなわち鎮魂の法具の独鈷によって守屋柱に宿る守屋の霊を封ずることに通じる。いいかえれば毎年、七百万人もの人々が守屋の霊魂を現在もねんごろに鎮め続けていることになる。」（宮元健次著「善光寺の謎」第三章物部守屋鎮魂の寺）

善光寺は物部守屋鎮魂の為に建てられた寺です。ほとんどの参拝者はその事実を知らず、ただ阿弥陀如来の御利益を求めています。

写真２：善光寺山門より臨む本堂

２．棄仏

日本書紀の記述では百済の聖明王が欽明天皇に贈ったのは「釈迦仏金銅像」です。それを本尊として祀る善光寺は「一光三尊阿弥陀如来」としています。金銅仏であることに違いはないのですが、釈迦如来か阿弥陀如来かの違いがあります。善光寺本尊は絶対秘仏で公開されませんので確認の術がありません。何れにせよ以下に述べる論点には影響がありません。先ず、それが届いた時の様子を日本書紀でたどるところから始めましょう。

欽明天皇 13 年（552）10 月、天皇はその仏像を幡蓋（ばんがい）、経論（きょうろん）と共に受け取った時、仏教を「微妙之法」（素晴らしい教え）と感じたものの受け容れるべきかどうか決められません（「朕不自決」）。そこで「群臣」に尋ねたところ蘇我稲目が肯定的な意見を述べたため、祀らせてみることにしました。稲目は向原（むくはら）の家を寺にして祀っていました。その後（「於後」）、疫病が流行し、物部尾輿と中臣鎌子はその原因が仏教受容にあるので棄仏（きぶつ）すべきと提言し、それを容れた天皇の命により、「有司」（家臣）は仏像を難波堀江に流し棄て、また伽藍に火を付け、焼き尽くしました（「以仏像流棄難波堀江復縦火於伽藍焼尽更無余」）。ここでは、仏像は焼かれていないことを頭に留めておいて下さい。

通説では蘇我氏と物部氏の間で起きた崇仏論争の中で物部氏が勝手に仏像を棄てたことになっていますが、日本書紀を正確に読めばそれが誤りであることは明らかです。天皇の心は揺れており、棄仏はあくまで天皇の命によるものだったのです。

もう一つ気になる点があります。「於後」とあるだけで、棄てた時期が明記されていないことです。百済王から贈られた極めて貴重な金銅仏です。天皇は仏教を「微妙之法」と感じ、試しに祀り始めました。仏像を棄て、寺まで焼くにあたって時期を記録しないことがあり得るでしょうか。

３．二度目の棄仏

私の疑念を深めたのは、仏像を「難波堀江」に棄てた日本書紀の記事がもう一つあることです。敏達天皇 13 年（584）9 月、百済から鹿深臣（こうがのおみ）がもたらした「弥勒石像」と佐伯連（さえきのむらじ）がもたらした「仏像」（以下、従仏と記す）を蘇我馬子が祀っていました。翌年、疫病が流行し、その原因が仏教受容にあると考えた敏達天皇は 3 月、仏法を断てと命じ（「詔曰（中略）宜断仏法」）、それに従って物部守屋自身が仏塔を切り倒して焼き、仏像と仏殿を焼きました（焼仏像與仏殿）。焼け残った仏像は難波堀江に棄てさせました。疫病と棄仏、天皇の命によることまで同じパターンが繰り返されています。

従仏については詳細が書かれていませんが、石の仏像が燃えないことくらい誰でも解ることです。

棄仏されるまでこれら二体の仏像を祀っていた蘇我馬子は、入手した仏舎利（釈迦の遺骨。仏教界に於ける最高の宝物）を金槌で叩いたり、水に投げ入れたりと、とんでもないことをします。おまけに馬子がこの仏舎利を心柱の基礎に埋めて建てた仏塔は、物部守屋が自身の刀で切り倒せたのですから、それくらいショボいものでした。

仏教寺院の概念からすれば仏塔が中心になり、その回りに仏殿が建つはずですが、仏殿は「宅東方」と「石川宅」の二箇所。仏塔は「大野丘北」という別の場所です。

この記事は、仏像を棄てた最初の記事との混同を狙ってねつ造されたように思えます。主仏として扱われる石仏に注意を引き、従仏への注意をそらす巧妙な仕掛けも盛り込まれています。その裏には重要な目的が隠されているのですが、それについては 9.**難波**で述べます。

４．向原の場所

違う方向からアプローチしましょう。最初の棄仏記事では、蘇我稲目は向原（むくはら）の家を寺にして百済王から贈られた仏像を祀ったとしています。明日香村豊浦の向原寺（こうげんじ）とその一帯がその場所に当たります。

向原寺の前身は豊浦寺（とようらじ）という尼寺でした。向原寺境内の発掘調査で出土した瓦から豊浦寺は 7 世紀第 2 四半期に建設されたことが判明しています。その下の層には掘立柱建物跡があり、出土する土器から 7 世紀初頭の建物跡であることも解っています。これは推古天皇が飛鳥最初の宮として築いた豊浦宮と推定されています。

とするならば、日本書紀が寺を焼いたと記す 6 世紀には、豊浦寺も豊浦宮も未だ存在していません。では蘇我稲目の家が建っていたのでしょうか。

「倭王は、土地と人とを領有・支配する一般氏族と異なり、農耕神に仕える祭主であり、その宮は神事の場であった。祭主が死去すれば、次の倭王は穢れなき土地と宮を求め、そこに遷る。高句麗・百済・新羅、また倭の氏族においても例をみない、歴代遷都の慣行が、倭において厳守されていた。」（季刊明日香風 119「再考・飛鳥仏教」九州大学名誉教授・田村圓澄）

豊浦は甘樫丘（あまかしのおか）の北西隣接地であり、丘と飛鳥川にはさまれた 2ha ほどの狭い地域です。仮に豊浦宮に先だって蘇我稲目の家があったとしても焼かれた建物は穢（けが）れており、その跡地や近辺を宮殿にするはずはありません。

即ち、豊浦宮に先だって蘇我稲目の家があったかもしれませんし、それを寺にして仏像を祀ったかもしれませんが、寺が焼かれることはなく、従って百済王から贈られた貴重な仏像が棄てられることもなかったことになります。

写真３：向原寺
写真４：豊浦宮掘立柱抜き跡（左奥）と石敷（向原寺境内）

５．江戸時代の発見

明和 9 年（1772）、向原寺に隣接する難波池（なんばいけ）から金銅の観音菩薩像の頭部が発見されました。その像は身体部分、台座、光背が補われ、同寺に祀られています。

この仏像について奈良国立博物館名誉館員・鈴木喜博氏は、次のように記します。

「目鼻立ちの構成は飛鳥後期の小金銅仏（七世紀末八世紀前半）の造形感覚をなお十分に留めており」、「仏教伝来当時の百済仏ではなく、飛鳥時代後期、いわゆる白鳳期の一作と考えられるのである。」（季刊明日香風 119「三十六年ぶりに戻った向原寺（旧豊浦寺）の金銅観音菩薩像について」）

普通、仏像の首を折って池に投げ捨てるなどという罰当たりなことはしません。おまけに発見された地が「向原」で、しかも「難波」池というのは出来過ぎです。「難波」といえば大阪の地名を思い浮かべますが、日本書紀に記された「難波堀江」がこの池のこととすれば、棄仏された 6 世紀後半と、「七世紀末八世紀前半」とみられる仏像制作年との差をどう解釈すれば良いのでしょう。

日本書紀が完成するのは 720 年。時の権力者は藤原不比等。天皇を擁立する立場の藤原氏の都合に合わせて「日本書紀」という歴史を創造し、創造した歴史に合わせて現実の痕跡をねつ造していったものと私は考えます。仏像が製作された年代は日本書紀の構想を練り、編纂していた時期にピタリと重なります。豊浦寺境内の池を「難波池」と命名し、出来合いの仏像の首を折って投げ入れたのでしょう。

写真５：難波池（向原寺隣接地）
写真６：向原寺金銅観音菩薩立像（季刊明日香風 119 より）

６．棄仏の理由

最初の棄仏記事は、百済王から仏像と幡蓋、経論がもたらされた点は事実かもしれませんが、後段は「貴重な仏像を棄てた」という虚偽の事実を記すために天皇の心の揺れと疫病を交えて創作した文章のようです。では、なぜ百済王から贈られた仏像を棄てたことにしなければならなかったのか。それは、天皇家が善光寺の為に仏像を提供したことを隠蔽する必要があったからです。既に無かったとすれば、提供しようがないということです。

天皇家は物部氏を鎮魂する施設である善光寺には仏像を提供できません。その理由を説明しましょう。5 世紀、物部王朝の時代は物部氏が天皇でした。6 世紀、蘇我氏（物部王朝の創始者応神天皇の五世孫継体天皇の血筋。第二章をご参照下さい）が天皇になり蘇我王朝が始まりましたが、物部の勢力は依然強く、妥協の結果、物部と蘇我、両方の混血が天皇の血筋になります。天皇家には偉大なる応神天皇、物部の血が流れています。物部本家最後の当主である物部守屋は悲惨な最期を遂げており、その霊を鎮魂しなければなりません。ところが天皇を中心とする中央集権国家確立の為に、それは天皇を擁立する立場にある藤原不比等と藤原氏の為でもあるのですが、作られた国史・日本書紀及び古事記では、かつて天皇家であった物部や蘇我を天皇家とは次元の異なる、単なる豪族として規定しました。従って天皇家は表だって一豪族に過ぎない物部氏の鎮魂を行えなかったのです。天皇家は、最高の礼を尽くして物部守屋の霊を祀ろうと考えました。それには百済王から贈られた貴重な仏像が最適です。ところが仏像が貴重であればあるほど天皇家は提供できません。

解決策が練られました。そして天皇が仏像を一旦棄てるという行為を挟んで、事後行為として善光寺に運ばれたことにしたのです。事後行為ならば天皇家のあずかり知らぬことです。

善光寺が国家的な鎮魂施設であることも秘匿されました。善光寺が今日に至るまで物部守屋との関係について外部に明言してこなかった理由はここにあります。

７．善光寺の位置と創建時期

日本書紀で創造された歴史の解りやすい実例は前章で取り挙げたフツヌシ神です。フツヌシはタケミカヅチと共に葦原中国（あしはらなかつくに）に天降り、大国主（おおくにぬし）に国を譲らせた神です。

このフツヌシの降臨は 712 年完成の古事記には記載がありません。即ち、古事記完成以降、日本書紀完成までの 8 年間に創造されたことを示します。鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）にはタケミカヅチを祀り､利根川をはさんで近接する香取神宮にはフツヌシを祀りました。藤原不比等は日本書紀に記載された内容を視覚化する為に、その頃神社を造営して行ったと推定できます。

勝者タケミカヅチを祀る鹿島神宮は常陸国（ひたちのくに）にあります。「ひたち」、即ち日が昇る地です。鹿島神宮は「神宮」が示すように神器・フツミタマの剣を神宝とする重要な神社です。日が沈む西にはそのタケミカヅチとフツヌシに国を譲った敗者大国主の長男であるタケミナカタを祀る諏訪大社があり、守屋山を御神体としています。そしてこの守屋山の真北に善光寺があります。これらの位置関係は、宮元健次氏が先に引用した著書「善光寺の謎」で指摘されています。

鹿島神宮の緯度は 35 度 57 分 56 秒。守屋山は長野県諏訪市と伊那市の境、緯度は 35 度 58 分 03 秒。その差 7 秒は 217m。誤差の範囲です。

守屋山は東経 138 度 05 分 36 秒、善光寺は東経 138 度 11 分 16 秒とほぼ真北です。

（北）
善光寺
　↑
守屋山←鹿島神宮（東）

同じく冒頭の引用では、本田善光は仏像を「はじめは今の長野県飯田市でお祀り」したといい、元善光寺（飯田市座光寺 2638）がその場所とされています。藤原不比等は当初そこに物部守屋の鎮魂施設を建設するつもりだったのでしょう。宮元健次氏にならって緯度を比較してみますと、敗者大国主を祀る出雲大社と元善光寺の南に見える神之峰が同じ緯度です。神之峰はひときわ目立つ山で、テレビ各局の中継局が設置されています。この山を「守屋山」と名付けようとしていたのかもしれません。

古事記と日本書紀編纂にあたっては構想段階からかなりの年数がかかったことは想像に難くありません。古事記の完成は 712 年。両書の内容はかなり重複していますので、構想は少なくとも 7 世紀終わり頃から練り始められたはずです。その構想の下に善光寺、諏訪大社、鹿島神宮はセットで建設されました。その証拠に善光寺の創建は、出土した瓦から 7 世紀末から 8 世紀初期であることが判明しています。

冒頭に引用した信州善光寺公式サイトでは『善光寺縁起』からの引用として「皇極天皇三年（644 年）には勅願により伽藍が造営」とされていますが、創建を古く見せるための創作のようです。「勅願により」と書かれていますが日本書紀同年にも造営の記事はありません。もっとも天皇家が表に立てない以上、「勅願」で造るはずもありません。

８．本田善光

我々が善光寺で拝見するのは本尊の写しである前立（まえだち）本尊です。本尊の阿弥陀如来像は秘仏とされ公開されません。しかしながら、前立本尊を見る限り仏教伝来の頃の日本で最も古い仏像であろうことが推測できます。創建以降、現代に至るまで厚い信仰を集めた所以です。この像を「難波堀江」で拾って運んだのが本田善光とされています。先に日本書紀の記述がねつ造であり、仏像は捨てられなかったことを述べました。善光寺の開祖・本田善光について考えましょう。

日本書紀の 7 世紀後半の記事に「善光」という人物が記録されています。日本の隣国百済は 660 年に滅びますが、百済最後の王・義慈（599-660）の王子です。善光は人質として来日し、百済滅亡後も日本に留まり、693 年（696 年説もあり）に日本で生涯を終えました。亡くなった年と善光寺創建時期が符合しています。この善光が本田善光なのでしょうか。

古代中国には一族の先祖の供養は同族の者に行わせなければ魂を鎮めることができないという考えがありました。例えば紀元前 11 世紀、周が商を滅ぼした後、商の王族に杞（き）という小国を与えて先祖を祀らせました。余談ですが、「杞憂」（きゆう）という言葉があります。これは杞の人々は今にも天が落ちてきはしないかと怯えていると馬鹿にしたことから、取り越し苦労を意味する言葉として定着したものです。

同様に物部氏の鎮魂には物部の血を引く者が最適です。王子善光が物部の血を引いているなら本田善光と同一人物である可能性が高まります。第二章で物部王家には百済王家の血が濃厚に入ったことを述べましたが、その逆を検討しましょう。

私は第二章 21.**雄略の時代**で次のように述べました。

「475 年頃、首都・漢城は陥落。王と王子は処刑され百済は滅びます」が、「雄略は大軍を派遣し高句麗、新羅と戦い、逃れていた百済王子を即位させ、南の熊津を首都として百済を再興」。「百済では再興後 6 世紀前半にかけて 10 基以上の前方後円墳が造られます。前方後円墳は日本独自の墳墓形態ですから日本と百済の関係が一層緊密になったことが解ります。」

前方後円墳が再興後の百済で継続して造られたことは、百済王家に物部王家の血が入ったことを物語ります。王子善光は物部の血を引いていたはずです。

善光寺は時の最高権力者・藤原不比等が、自身もその血を引く（第六章をご参照下さい）物部氏の当主・物部守屋の鎮魂施設として造らせたもので、重要な国家プロジェクトでした。それは 7.**善光寺の位置と創建時期**で述べた鹿島神宮と諏訪大社（守屋山）との位置関係や百済王から贈られた貴重な金銅仏を本尊としたことでも裏付けられます。その施設の名称には「善光」という人名が用いられました。「善光」は、「信濃国司の従者」（信州

善光寺公式サイト）どころか他に代えがたい国家級の高貴な人物でなければなりません。
　王子善光は、持統朝から「百済王」（くだらおう）の氏姓を与えられています（日本書紀持統天皇 7 年正月、続日本紀天平神護 2 年 6 月 28 日条）。とするならば本田善光とは、物部の血を引く、百済王子の、百済王善光と考えても良さそうです。
　では「本田」は何を意味するのか。「本田」の音は「ホムタ」に通じます。5 世紀に始まる物部王朝の始祖王・応神天皇の名はホムタワケ。この「ホムタ」が秦（はた）であることは第二章 2.**秦氏の王・応神天皇**で述べました。善光が物部の血を引く、即ち物部王朝の始祖応神の子孫なら、その形容詞に秦（はた）、即ち「本田」を付けることに不自然さはありません。

写真７：三輪山（奈良県桜井市）
写真８：出雲バス停（奈良県桜井市）

９．難波
　百済王家は大阪の難波に拠点を置きました（日本書紀天智天皇 3 年 3 月）。仏像を流すならどこでも良さそうなものですが、「難波堀江」にしたのは何かしらの縁を求めたからに違いありません。善光寺が創建された当時、寺名の「善光」が百済王善光であることは知られていたはずです。難波を拠点とする善光なら「難波堀江」で拾ったことに不自然さはありません。日本書紀は百済王善光の手掛かりを残してくれていたのです。
　天皇家は、百済王から贈られた貴重な仏像を善光寺に提供した事実を隠す為に難波堀江に仏像を棄てたとしました。実際は天皇家からその仏像が提供されて善光寺ができますが、表向きは百済王善光が大阪の難波で拾って運んだとされました。しかし一旦海に棄てたものがみつかる可能性はほとんどなく、みつかったとすれば奇跡です。その奇跡を信じさせる工夫こそ 3.**二度目の棄仏**で取り上げた記事だったのです。
　私の推測も交えて説明しましょう。
　敏達天皇の部分まで日本書紀の編纂が終わって程なく、明日香向原の難波池で金銅仏の胴体が発見されます。発見されたとは言っても発見されたことにしただけのことで、予定された発見です。発見を知った人々は日本書紀を調べ、「向原」と「難波」から最初の棄仏記事に注目します。やがて「難波堀江」に仏像を棄てたもう一つの記事に行き当たります。当時、漢文（中国語）を流暢に読める人は限られており、藤原不比等の意向を受けた人が予定された方向に誘導することは容易でした。
　敏達天皇 13 年 9 月に仏像がもたらされてから翌 14 年 3 月に難波堀江に棄てられるまで 600 字弱。漢文ですから長文です。蘇我馬子が仏像をもらい受け、祀り、疫病、棄仏と書き進められますが、最初に「仏像二体」とあるのみで最後まで従仏には触れられません。詳しく読んで初めて主仏として扱われている弥勒石仏に、一貫して従仏が伴っていた可能性に気付きます。それを前提とした場合、「焼かれた」ことから従仏は石仏ではないこと、従仏も棄てられたであろうことが推理できます。確かに発見されたのは石仏ではなく金銅仏で、その首が取れ、焼けた痕跡もあります。そして棄てられた場所は「難波堀江」。難波といえば百済王家が拠点とする大阪の地のはずですが、発見された難波池は明日香です。しかし「難波」が付く以上、「難波堀江」と言えなくもありません。検討の末、発見された金銅仏がこの従仏であるという結論に誘導されます。
　人々は、日本書紀が仏像を棄てる動詞まで正確に使い分けていることにも気付かされます。最初の棄仏記事で仏像が棄てられた大阪の難波は海であり流れがありますので「流棄」（流し棄てる）。明日香は池ですので単に「棄」。記述の正確さは驚きをもって受け容れられました。
　人類最大の喜びは知ることです。謎解きは楽しみです。解明に障害があったり、手数が掛かるほど知った喜びは増します。「向原」という地名に惑わされたものの二回目の棄仏記事を発見できました。新たに発見された遺物と記事を付き合わせて推理を重ね、ようやく結論に達しました。そして 135 年以上も前の記録が正確であったことを知ったのです。人々は歴史ロマンをかき立てられ、喜びと興奮に包まれます。
　ならば百済王から贈られた金銅仏はどうでしょうか。日本書紀の記述は正確です。記事では焼かれずにそのまま棄てられました。確かに善光寺の仏像は完全な形です。大阪の難波に棄てられたのも間違いなさそうです。ならば難波で発見されたというのは本当かもしれません。歴史ロマンに触発された気持ちの高ぶりは、推測をやがて確信に変えます。確かに海に棄てたものが見つかったのです。奇跡です。百済王から贈られ善光寺の本尊になった金銅仏は、奇跡を起こす霊験あらたかな仏像になったのです。

従仏の頭は難波池に残され、それが江戸時代の発見につながります。
百済王家は奈良時代に北河内（現在の枚方市中宮）に拠点を移しました。同地には今も百済王神社があり、百済寺跡が残ります。

１０．鎮魂施設
「善光」という人名を寺の名に使う特異性。仏塔がなく、本堂が全てと言ってもよい特殊な伽藍配置。その本堂の祭壇の中央に守屋柱。そして無宗派（注）。善光寺は鎮魂を目的とした特別な施設であることを思い知らされます。記録では 11 回焼け、その都度再建されてきました。極楽浄土へ導いて下さる本尊への信仰が再建をかなえたことは事実ですが、一方で物部守屋鎮魂の施設は必ず存在し続けなければならなかったのです。物部の血が天皇家に流れていることを意識し続けてきたことが解ります。

注：善光寺そのものは無宗派であるが、その運営は善光寺境内にある独立した組織（寺院）である大勧進（だいかんじん。天台宗）と大本願（だいほんがん。浄土宗）によって行われている。本来、両者の役割には明確な区分があり、大勧進が物部守屋の鎮魂を、大本願が民衆の本尊信仰を担ってきたものと筆者は考える。

写真９：善光寺本堂東面

第十一章　大和に残る製鉄神の累積

奥野正男氏によると、砂鉄などチタン分の多いものは高温でないと還元できないが、褐鉄鉱を原料として密閉式の炉内に木炭や原料を入れて点火し、送風をつづけると、半溶解状の海綿鉄が得られる。この中から良質な部分をとりだして加熱・鍛打をくりかえして純鉄を得ることができるというものである。（中略）褐鉄鉱は 900～1000 度の低温でも還元できるからである。すでに青銅器の鋳造を行って、精度の高い銅鐸さえも製作していた弥生時代人であるから、当然おこないえたことは間違いない。ただ残念なことは、弥生時代のそうした鉄製品の遺物が発見されていないことであるが、それは、ひとつには砂鉄より精錬した鉄製品よりも純度が低いため、酸化腐食する度合いも早く、形態を遺していないからにほかならない。（中略）

渡来系技術者によって砂鉄による精錬の方法を習得したことにより､弥生時代は終焉し、古墳時代に移行した。

真弓常忠著「古代の鉄と神々」（1997 年学生社）

１．葦原中国

真弓氏は同書の中で、鉄分の多い水流のある水辺では葦（あし）、茅（かや）、薦（こも）などの根のまわりに褐鉄鉱の塊ができ、やがて植物が枯れ、褐鉄鉱の中空の固まりだけが残るとします。中空の固まりの中には小片が混じるものがあり、それを振ると音がすることから水辺で採れる褐鉄鉱そのものを「スズ」と名付けたであろうことに同氏は気づきます。果物などがぎっしり実った状態を「すずなり」といいますが、自然界に「すずなり」という状態があってこそ生まれる言葉であることも指摘されています。

記紀によりますと出雲の別名は、葦原中国（あしはらなかつくに）です。この「葦原」は褐鉄鉱が生成しやすい場所です｡褐鉄鉱を鉄の主原料としていた弥生時代においては｢鉄資源の豊富な国」を意味していたに違いありません。やがて偉大なる大国主（おおくにぬし）の下、砂鉄による新たな製鉄技術を得た出雲の国は栄えます。「鉄は国家なり」は、弥生時代にも通じる言葉だったのです。

２．鉄と国の始まり

真弓氏は、渡来系技術者による砂鉄精錬の開始が古墳時代の幕を開いたことを指摘しています。

鉄器の普及は当時の主食・米の生産性を一気に高めました。鉄は、鋤（すき）や鍬（くわ）先になり田を深く耕せるようになります。稲の根は深く張り、多くの収穫をもたらしました。

収穫時、それまでの石包丁による穂先刈りに替えて、鎌で根本近くから刈り取ります。翌年深く耕された田に水を引き、別に育てた苗を植えます。田植えの始まりです。ある程度育った苗を植えるのは雑草に対する優位性を保つためです。

水田が拡がり、畑の面積が拡がりました。食料生産の拡大につれ人口密度が高まっていきました。

集約的な食料生産は職業の分化を促し、複雑な社会、そして国を生み出しました。国は大きくなり、王の権力は高まり、王墓は大型化していったのです。

３．出雲の国

記紀に描かれた神話時代の中心は出雲です。出雲では鉄製農具により農業生産性が向上し、人口が増えました。鉄剣、鉄の矢尻など武器の性能も上がり、葦原中国は出雲から因幡まで勢力を伸ばします。

記紀によりますと少彦名（すくなびこな）は海の彼方から出雲にやってきて、大国主を助けて葦原中国を平定し、やがて海に去って行きます。少彦名は、製鉄技術者を伴ってやってきた渡来人を象徴しているようです。

少彦名はなぜやってきたのでしょう。2 世紀の第 4 四半期に気候が地球規模で寒冷化したからです。中国大陸の北方から遊牧民や騎馬民族が温暖な気候を求めて南下します。その内、今日の中国遼寧省から朝鮮半島北中部を領土とする高句麗（こうくり）を建国したツングース系民族・穢（わい）人が製鉄技術者を伴って海を渡ったものと私は考えています。その気候寒冷化の影響で、中国大陸では 220 年に漢帝国が滅び、三国が鼎立する分裂時代に入ります。

砂鉄による新たな製鉄技術を得た出雲の勢力は 3 世紀に奈良盆地東部の纏向を首都として建国された連合国家・ヤマト（邪馬台）にその技術をもたらします（第一章をご参照下さい）。

島根県出雲市役所の南東 2km に広がる西谷丘陵上には弥生時代末期、2 世紀末から 3 世紀にかけて造られた古墳群があります。その内、2 号墓、3 号墓、4 号墓、9 号墓は一辺 30m 以上もある方墳です。何れも四隅（よすみ）が突出しており、四隅突出型古墳と呼ばれます。この時代としては際立った規模の古墳を連続して造れたのですから、出雲では他の地域より一足早く渡来系技術者による砂鉄精錬が始まったことが解ります。

写真１：西谷古墳群 2 号墓突出部（出雲弥生の森）

４．出雲王朝から崇神王朝へ

桜井市街の東、円錐形の三輪山の麓に大神神社（おおみわじんじゃ）があり、三輪山を神体とします。ここに祀られる神は出雲の神。大国主の分身である大物主（おおものぬし）です。

その境内、北側にある狭井神社（さいじんじゃ）の祭神は、大神荒魂（おおみわあらみたま）、大物主、ヒメタタライスズ姫、セヤタタラ姫、事代主です。事代主は大国主の息子です。そして二柱の姫の名は何れも「タタラ」（製鉄炉）を含みます。おまけに「狭井」は、鉄の古語「サヒ」から来ていると見られ、サヒ神社。即ち鉄神社です。

記紀によりますと、九州から東征してきた神武が奈良盆地に入り、初代天皇になったとします。崇神王朝の始まりです。日本書紀ではセヤタタラ姫と大物主の間に生まれたヒメタタライスズ姫を初代天皇・神武（じんむ）が娶ります。これが王朝間の接続神話であり製鉄祭祀の継承を意味することは第九章で述べました。この神話を視覚化した施設が狭井神社のようです。

崇神王朝はヤマト国（邪馬台国）です。出雲から製鉄技術が伝わり、3 世紀半ば頃までに勝山古墳（墳丘長 114m）、矢塚古墳（墳丘長 96m）、石塚古墳（墳丘長 93m）、ホケノ山古墳（墳丘長 72m）が纏向の地に築造されます。そして 3 世紀が三分の二を過ぎた頃、規模の異なる墳丘長 278m の大古墳・箸墓古墳が築造されました。その北東 2km の渋谷向山古墳（天理市渋谷町。4 世紀後半頃）の墳丘長は 300m、その北 1km の行灯山古墳（天理市柳本町。4 世紀前半頃）の墳丘長は 242m。古墳の規模から崇神王朝では出雲を超える鉄器の普及を推定することができます。食料生産効率が高まり、国家が形成され、王墓の造営に多くの労働力を振り向ける余裕のある社会であったことを物語ります。

写真２：三輪山
写真３：狭井神社

５．穴師坐兵主神社

狭井神社から 2㎞ほど北の、穴師坐兵主神社（あなしにいますひょうずじんじゃ）の付近では鉄滓（てつさい）が発見されています。かつて三輪山北麓一帯で製鉄が行われていました。再び真弓常忠著「古代の鉄と神々」から引用しましょう。

「古墳時代の鉄製品は、五世紀初頭を中心とした約一世紀間に構築された畿内の大古墳にもっとも多く副葬されている。それらの鉄製品が渡来系技術者集団、すなわち、韓鍛冶の指導によって製作されたことは疑いない。彼らによって古墳時代の生産はさらにいちだんの進歩を示したであろう。それをうかがわしめるのが応神・仁徳朝における河内を中心として進められた大規模な土木工事である。

五世紀代、これだけの土木工事が進められるには絶対に鉄製器具が必要であり、それも舶載の鉄挺を鍛造するのではなく、この需要を賄うにたりる国内生産がなされていなければならず、そのためには、原始的な露天たたらや手吹子のごとき幼稚なたたら炉ではなく、かなり進んだ製鉄技術があったとしなければならない。その新しい製鉄技術の担い手が、イタテ神、あるいはアメノヒボコ、または兵主神を奉ずる韓鍛冶であった。」

「兵主」は中国古代の神・蚩尤（しゆう）のこと。武器を発明したとされ、武神として日本に伝わりました。兵主神を祀るこの神社は 5 世紀に始まる渡来系製鉄技術者の信仰が基になっているようです。

写真４：穴師坐兵主神社拝殿
写真５：同本殿

６．信仰の累積
弥生時代、三輪山を人の生死・田の豊穣を司る山の神とする信仰がありました。「みわやま」の「み」は蛇。「わ」は輪。「みわ」はとぐろを巻く蛇を意味します。山の神のシンボルは蛇。円錐形の三輪山をとぐろを巻く蛇の姿に見立て、聖なる山としていたのです。
弥生時代末期の 2 世紀末、砂鉄を原料とする製鉄技術を背景に生産力が高まり、人口が増え、勢力を増した出雲の人々がヤマト国にやってきました。そして三輪山に出雲の神である大国主を祀ります。出雲は鉄の国。鉄は国家なり。鉄は豊かな農産物、そして豊かな生活物資を生産する基となります。大国主は鉄によってもたらされる「物」を生み出す神「大物主」とされます。大物主は、製鉄神としての性格が濃厚だったはずです。

出雲から製鉄技術を受け継いだヤマト国では今も湧き出る狭井神社境内の井戸を製鉄神の宿る場所として祭祀を行ったはずです。
そして 5 世紀。北部九州からやってきた新たな勢力がヤマト国を征服します。物部王朝です。この勢力は、朝鮮半島から移住してきた秦氏など、崇神王朝より一層進んだ製鉄技術を持った人々を伴っていました。そして大物主とは別に、鉄と武器及びその製造を司る兵主神を祀りました。

写真６：5 世紀の鉄製甲冑（黒姫山古墳出土）
写真７：円筒埴輪（黒姫山古墳）
写真８：黒姫山古墳模型（堺市立みはら歴史博物館）

７．今日の形
8 世紀初期、藤原不比等の時代、仏教寺院を参考にして神を祀る専用の建造物「神社」が造られて行きます。不比等が記紀編纂を通じて創造した神話を、現実の建物によって視覚化すると共に、山の神のシンボルを蛇から猪（亥）に変更する、一種の宗教改革を伴っていました（第十四章で述べます）。
建造物を持った大神（おおみわ）神社が創建され大物主が祀られました。三輪山の山の神信仰は大物主と習合して今日に受け継がれました。
現在、狭井神社は大神神社の摂社（付属する神社）ですが、当初は独立した神社として建設された可能性を私は考えています。「サヒ」（鉄）神社という名称と相まって記紀に描かれた出雲とヤマトの製鉄祭祀の継承と融和が神社の形に視覚化されています。
物部王朝の製鉄神を祀る兵主神社もこの時に建てられたことでしょう。こうして鉄にかかわる三つの神社は、聖なる山・三輪山の麓の極めて近い距離に並存し、今日に至りました。

第十二章　吉備津宮

井沢元彦氏が指摘されたように日本には古来より怨霊信仰があり、怨霊信仰を理解せずして日本史の解明はできません。例えば東大寺大仏建立は長屋王の祟りを鎮める為、平安遷都は長屋王の祟りから逃れる為に行われたことを井沢氏は解明しています。
私は吉備津神社に参拝し、ここにも怨霊信仰が隠されていることに気付きました。3 世紀の第 3 四半期に崇神王朝によって征服されたこの地の豪族が怨霊になり、三百年も後の 6 世紀末に鎮魂の仕組みが作られていたのです。

岡山市北区にある JR 吉備津駅。南に目を向けますと、1km 先の木々の間に立派な建物が垣間見えます。吉備津神社です。祭神は吉備津彦（きびつひこ）。崇神天皇（10 代すじん）が諸国平定の為に派遣した四将軍の一人です。

石段を登って一つめの門をくぐり、更に石段を登って二つめの門・割拝殿をくぐると目の前が拝殿です。この拝殿は本殿と一体化した構造で、六百年前に足利義満が建てたものです。

崇神天皇が纏向に都を定めた頃といえば吉備には大きな独自勢力があったことが解っています。吉備の人達が自分たちの王ではなく、自分たちを征服した人を、かくも盛大に祀るものでしょうか。同様に大きな勢力を持った出雲には出雲大社があり、出雲の王であり神でもある大国主（おおくにぬし）を祀っているのとは対照的です。崇神天皇が派遣した他の三将軍で、これほど立派に祀られている者もありません。この違和感は比翼入母屋造り（ひよくいりもやづくり）と呼ばれる独特の形をした巨大な本殿を見て更にふくらみました。

もう一つの違和感は、直線距離にしてわずか 1.5km の場所に同じ吉備津彦を祀る吉備津彦神社があり、備前国一宮（いちのみや）として高い神格と規模を誇っていることです。吉備津神社と吉備津彦神社。同じ神を祀る立派な神社がどうして隣り合って存在しているのでしょう。

写真１：吉備津神社随神門から割拝殿を見上げる
写真２：吉備津神社拝殿
写真３：吉備津神社拝殿と本殿

１．桃太郎

桃太郎さん、桃太郎さん、お腰につけた黍團子、一つわたしに下さいな。
やりませう、やりませう、これから鬼の征伐に、ついて行くならやりませう。
行きませう、行きませう、あなたについて何處までも、家來になって行きませう。
そりや進め、そりや進め、一度に攻めて攻めやぶり、つぶしてしまへ、鬼が島。
おもしろい、おもしろい、のこらず鬼を攻めふせて、分捕物をえんやらや。
萬萬歳、萬萬歳、お伴の犬や猿雉子は、勇んで車をえんやらや。
（明治 44 年　文部省唱歌）

桃は中国では不老長寿の象徴です。桃太郎の話は、桃を食べて若返った老夫婦の間に男児ができ、成長した児が鬼退治をして財宝を持ち帰るという筋書きです。「桃から生まれた」とするのは、明治 20 年に小学校教科書に載せられた内容です。

桃太郎は鬼を退治します。岡山では、桃太郎は吉備津彦、鬼は温羅（うら）と伝わっています。

２．温羅伝説

伝説によりますと、温羅は百済の王子で、吉備の国にやってきて総社市の鬼ノ城（きのじょう）に住み、吉備を治めていました。その悪行に困った人びとが都に訴えたところ、征伐するために吉備津彦が派遣されてきます。

吉備津彦は山の上に石の楯を建てて陣を張りました。これが倉敷市矢部の楯築（たてつき）遺跡とされます。

吉備津彦は、現在吉備津神社のある場所から矢を放ったところ、温羅が投げた石と空中でぶつかります。その矢の落ちた所が岡山市北区高塚の矢喰宮（やぐいのみや）とされます。

吉備津彦が一度に 2 本の矢を放つと 1 本は温羅の左目に当たり、血が流れた川が総社市の血吸川（ちすいがわ）。温羅が鯉に変身して血吸川に逃げたところ、吉備津彦は鵜（う）に姿を変えて食いつきました。それが倉敷市矢部の鯉喰神社（こいくいじんじゃ）。

温羅は吉備冠者（吉備王）の名を吉備津彦に捧げた後、首をはねられます。その首は何年経ってもうなり声を上げ続けましたが、ある夜吉備津彦の夢枕に温羅が立ち、「悪行の償いにこれからは釜をうならせて吉凶を占う」と言い、それが吉備津神社の鳴釜神事（なるかましんじ）の始まりといいます。

吉備津彦は吉備を平定した後、吉備に土着し一生を終えました。吉備津彦は吉備津神社の裏山、それは吉備津彦神社の裏山でもあるのですが、そこに葬られました。中山茶臼山古墳です。宮内庁が管理しているため詳しい調査はできませんが、3 世紀末から 4 世紀初頭の前方後円墳であることが判明しています。

関連地図（筆者作成）：
●鯉喰神社
　●楯築遺跡　　○JR 吉備津駅　　○JR 備前一宮駅
王墓山古墳　←2.5km→　吉備津神社　←1.5km→　吉備津彦神社
　◎----------◎----------中山----------◎　→夏至の太陽が昇る方向
　●真宮神社　　●中山茶臼山古墳

写真４：吉備津彦を葬った中山茶臼山古墳

３．吉備の聖域
　総社市鬼城山（きのじょうざん）には古代の山城があります。遺跡は、城門 4 カ所を持つ 30ha の規模で、7 世紀のものと推定する学者が多いのですが、3 世紀に温羅の拠点が置かれていたことを否定するには至りません。この山城と吉備津彦が陣を構えた吉備津神社の中間点に矢喰宮があります。おそらくこのあたりで激闘が繰り広げられたのでしょう。
　温羅が追い詰められた鯉喰神社は矢喰宮の南東 3.5km。この神社は南北 30m、東西 40m の、弥生時代末期（3 世紀前半）としては巨大な古墳上に後世建てられたものです。
　鯉喰神社の南に隣接して南北 1km ほどの丘があります。王墓山丘陵です。その北側の頂が吉備津彦が最初に陣を張った楯築遺跡です。遺跡上部には、楯状の石が環状に立てられています。住宅建設に伴う発掘で 2 世紀後半から 3 世紀頃に築かれた古墳であることが判明しています。直径 50m の円墳の両側に突出部を持ち、宅地開発で突出部が削られた後でも全長 72m に及ぶ弥生古墳としては傑出した規模です。その棺には 30kg もの朱が用いられており、吉備地方の王かそれに準ずる人が葬られたと見られます。
　丘の南側、真宮神社の境内にも直径 10m ほどの環状列石があります。
　環状列石は何に使ったのか解りませんが、二つの環状列石と王クラスの者が葬られた二つの古墳。この丘は吉備の人びとにとって特別神聖な場所であったものと推測されます。吉備津彦には吉備人にとって重要な場所をいち早く押さえることで優位に立とうとする意図があったに違いありません。

写真５：鬼ノ城西門を見上げる
写真６：鬼ノ城西門と岡山平野
写真７：楯築遺跡環状列石

４．吉備津宮の創建
　吉備津神社の創建時期は、あいまいな三つの説があるのみです。もう一つの吉備津彦神社は吉備津彦が亡くなった住居跡に社（やしろ）を造ったとするのみで創建時期には触れていません。
　ところで、吉備津彦神社では「夏至には太陽が正面鳥居の真正面から昇り神殿の御鏡に入ることから『朝日の宮』とも呼ばれている」としています。この日同社では日の出祭を行います。同社を特色づける主要行事です。
　この地における夏至の日出は真東から北に 29.6 度です。それを延長したところに吉備津神社があります。私は地図を見て気付いたのですが、更にその延長線上に王墓山古墳があります。王墓山古墳は先に述べた聖なる丘の上に 6 世紀終わり頃に築かれた、古墳時代末期としては大きい直径約 25m の古墳です。
　始点が決まらなければその延長線上の二点を決めることはできません。これらは一体を成すものとして作られたと考えられないでしょうか。始点となる王墓山古墳に謎を解く鍵がありそうです。

写真８：吉備津彦神社拝殿

５．鎮魂
　王墓山古墳は 6 世紀末に造られた 25 基ある王墓山古墳群の中で最大のものです。立派な石室、7 枚の石で組まれた家形石棺、豊富な副葬品（東京国立博物館収蔵）。間違いなく特別な人の為に造られたものです。私は、温羅の霊を鎮めるために立派な墓を作ったと推測します。加えて温羅一族の為に 24 基の墓。そして夏至の朝日の昇る方向に向かって二つ

の社を建てたのです。
　温羅の死は 3 世紀第 3 四半期。三百年も経ってからなぜそのようなことをしたのでしょう。その秘密を解く鍵は平安時代末期、後白河法皇が編纂した歌謡集「梁塵秘抄」（りょうじんひしょう）に載せられた歌にあります。
「一品聖霊吉備津宮、新宮、本宮、内の宮、隼人崎、北の南の神客人、艮みさきは恐ろしや」
　吉備津宮の分社であった艮御崎宮（うしとらみさきのみや）は、少なくとも平安時代にはたたる神として畏敬されていたのです。漢字は音（おん）が同じ場合は偏（へん）を省くことがあります。「艮」は「恨」に通じます。「うしとらみさきはおそろしや」は「恨み先は恐ろしや」とも読めそうです。
　温羅は降服して、王の地位を譲ったにもかかわらず首をはねられました。無残な死でした。一族も同様に殺されたのでしょう。無念な死を遂げた霊はたたります。吉備津神社で続く鳴釜神事は、温羅がその神意を示すものです。温羅を丁重に葬り、二つの社を建て、鳴釜神事で霊に神の役割を与えることで霊が納得すると考えたのです。

６．太陽の意味
　さて、夏至の太陽が昇る位置に何の意味があったのでしょう。聖なる丘の環状列石は太陽の位置観測に関係がありそうです。
　ところで、夏至に伊勢二見浦で見る日の出、いわゆる御来光は 200km 離れた富士山の背後から射し、そのシルエットを浮き上がらせます。富士（ふじ）は「不死」に通じ、古来聖なる山と考えられてきました。夏至の太陽は一年で一番高く昇ります。「日の出の勢い」という言葉があるように、太陽が生まれ出る時は一番力がみなぎります。夏至に富士から登る太陽が見える位置にあるからこそ夫婦岩（めおといわ）が特別な場所になったのでしょう。古代の日本人にとって、夏至の朝日には一年で最も強い太陽の力を受け取る、特別な意味があったに違いありません。
　では、吉備津彦を祀る社（やしろ）がなぜ二つ必要だったのか。私は二つの社を隔てる中山の存在に着目しました。吉備津彦神社に射す夏至の日出の光は、中山にさえぎられて吉備津神社には届きません。日の届く陽（よう）の世界は滞りなく平安に満たされ、日の届かない陰（いん）の世界は中山で遮断されるのです。中山には吉備津彦が葬られています。吉備津彦の霊力が温羅の霊を閉じ込めるのに役立ちます。
　こうして見ますと二つの社の役割は明確になります。吉備津神社は、表向きは吉備津彦を祀るものの、主たる目的は鳴釜神事により温羅の霊に居場所と役割を与え、そこに留め置くための施設です。吉備津彦神社は温羅の霊が出てこないように守ってくれる吉備津彦の霊を夏至の朝日のみなぎる力で鼓舞するための施設だったのです。

第十三章 秦氏がもたらしたもの

5 世紀に始まる物部王朝は、いわば「秦氏の王朝」です。5 世紀は秦氏がもたらした製鉄をはじめ高度な技術により日本の社会が一変します。その基礎には食糧生産力の増大があったはずです。その変化を追います。

狩猟採集によって高い生産力を誇った集団のなかには、首長社会の段階にまで達したものもあるが、国家の段階にまで達したものは一つとしてない。国家を形成するに至った集団は、食料生産によって市民を支えることのできた集団だけである。（中略）集約的な食料生産と複雑な社会の出現は、相互に自己触媒の関係にある（中略）。
複雑で集権化された社会は､灌漑施設などの公共建造物を構築できることを特徴とする。遠方の社会と交易をおこない、よりよい農具を作るための金属材料を輸入したりすることもできる。労働がさまざまに分化しているので、家畜を専門に育てる人びとを農民の穀物で養い、彼らが育てた家畜を使役動物として農民にあてがうような配慮もできる。集権化された社会では、こうしたことが相乗的に作用し、集約的な食料生産が助長され、歴史的に見れば、人口の増加につながっていったのである。
（ジャレド・ダイアモンド著　倉骨彰訳「銃・病原菌・鉄」第 14 章　平等な社会から集権的な社会へ）

１．王国の形成
「急激な寒さは、前 850 年に広範な地域を同時に襲い、それと同時に太陽の黒点活動が急に弱まり､宇宙線の流入が増えて､大気中の炭素 14 の生成量が大量に増加した。（中略）最初に被害を受けたのはモンゴルのステップだったようだ。湿潤な時代には、ここは牧畜民にとってすばらしいオアシスだった。家畜の群れは増大し、人口も増えた。やがて干ばつが訪れるようになり､遊牧民は別の場所へ移動し､定住地を侵略せざるをえなくなった。前 8 世紀には、ステップの干ばつを受けて、遊牧民が中国へなだれこんだ。」B・フェイガン著「古代文明と気候大変動」（河出文庫）第 10 章

中国大陸では北方から遊牧民が華北の畑作地帯に南下。華北の畑作農民は作物生育に適した暖かい地を求めて稲作地帯に南下。稲作地帯は南に移動します。北からの人の移動に押されるように稲作農民の一部は海を渡って日本列島や朝鮮半島南部に移住しました。日本列島に本格的な食料生産時代が訪れます。これが弥生時代の始まりです。それからの千年間に稲作地帯は本州北部まで拡がり、各地に首長が支配する集団が形成されていきました。
3 世紀、ヤマト国（邪馬台国）が建国され奈良県桜井市を中心とした地域にそれまでになかった規模の前方後円墳が次々と造られていきます。王国を形成できるほどの「集約的な食料生産と複雑な社会の出現」と人口の増加が始まったことが解ります。「国家の段階にまで達した」のです。

２．急激な王権の成長
世界最大の墓は、日本にあります。大阪府堺市堺区大仙町にある大仙陵古墳。全長 486m の前方後円墳。後円部の直径 245m、高さ 36m。築造されたのは 5 世紀前半。宮内庁は仁徳天皇陵としていますが、筆者は履中天皇陵と考えます（注）。
その少し前、5 世紀初頭に造られた誉田山古墳（こんだやまこふん。応神天皇陵）も同程度に巨大です。大仙陵古墳の真東 10km の羽曳野市にあり、全長 425m、後円部の直径 267m、高さは同じ 36m です。
このような巨大な墓が造られる 5 世紀は物部王朝の時代です。奈良県桜井市に大きな前方後円墳ができ始めてから 130～140 年。物部王朝が始まるなり唐突に古墳が巨大化し、その造営される中心地も変わります。この時期、「集約的な食料生産が助長」され、人口が急激に増加し、社会は更に複雑化し、王の権力が増大したのでしょう。おそらく圧倒的に食料生産力が高まる何かが 5 世紀に起きたのです。王朝の創始者・応神天皇は朝鮮半島から中国人の集団・秦氏（はたし）を日本列島に連れてきました。秦氏がもたらしたものが日本の社会を激変させたに違いありません。

注：5 世紀、物部王朝の時代に造られた大古墳上位 5 つを築造時期順に並べ、その右側に

物部王朝の天皇を即位順に書けば以下の通り（在位年は中国の正史・宋書の記録を基に筆者が推定したものです。第二章をご参照下さい）。

造山古墳は岡山市という特異な場所にある。対応する反正天皇の日本書紀の記述は三百字に満たない簡素さで、皇后や墓所、事績も一切書かれず特異さが際立つ。反正は履中即位前に履中の命により兄・墨江中王を殺している。尋常ではない「反正」というおくり名の原因はこの事実のみならず歴史から抹消された反正の皇子を次期天皇に擁立しようとして軋轢を起こしたであろうことを暗示する。履中の在位は長く、即位前の反正がこの間に備前を拠点としたとすれば墓所が岡山としても不自然ではない。5 世紀 6 番目の大きさの作山古墳は、反正墓から見える位置にあり、反正の皇子墓の可能性を考える。

古墳名（所在市）	宮内庁指定	墳丘長	築造時期	天皇	在位西暦年
誉田山古墳(羽曳野)	応神天皇陵	425m	5 世紀初頭	15 代応神	
上石津ミサンザイ古墳(堺)	履中天皇陵	365m	5 世紀初-前期	16 代仁徳	
大仙陵古墳(堺)	仁徳天皇陵	486m	5 世紀前半	17 代履中	421-438
造山古墳（岡山）	無し	350m	5 世紀前半	18 代反正	438-443
土師ニサンザイ古墳(堺)	反正天皇陵	300m	5 世紀中-後期	19 代允恭	443-462
（参考）					
作山古墳（総社）	無し	286m	5 世紀中期	反正の皇子？	

写真１：誉田山古墳西側面
写真２：誉田山古墳外濠外堤

３．新しい穀物

秦氏は紀元前 3 世紀、秦王朝の中国から朝鮮半島南東部に移住してきた人々です。高いカロリーを大量に生み出せる新しい穀物を持ち込んだとは考えられないでしょうか。中国古代の穀物栽培を検討してみましょう。

「中国古代の国家は、北方の黄河流域を中心にして成立した。そして成立の生産的な基礎をなしたものは畑作であった。そしてそこで作られたものは黍（モチキビ）・稷（ウルチキビ）・粟（アワ）などが多く、これを食物のもっとも重要なものとした。（中略）稷は粟とならんでもっとも多く、一般民衆の主食物であり、黍はそれよりやや上等の食物とされていた。そして、後漢時代（二世紀）の鄭玄という学者の古典の注釈には「豊年のときは賤しい者といえどもこれを食べる」といっている。また稗は卑しい食物とされて五穀に入っていない。五穀というのは、麦・稷・黍・麻・豆（『呂史春秋』「審士篇」『礼記』「月令篇」）をさすこともあるし、稷・秫（モチアワ）・豆・麦・稲（『管子』「地員篇」）としているものもある。漢の時代になって、江南地方までがその勢力範囲になると、そこでは稲が多く作られていて、米が主要な食物として登場してくることになるが、秦以前にあって華北で米の作られることは少なかったようである」（宮本常一著「日本文化の形成」）

日本において、米は弥生時代から栽培していました。豆もありました。粟（あわ）、稗（ひえ）もありました。小麦もありましたがそれほど普及していません。大麦はどうでしょうか。大麦の「大」は、「伝来当時の漢字圏では、比較的容易に殻・フスマ層（種皮、胚芽など）を除去し粒のまま飯・粥として食べることができたオオムギを上質と考えたことを反映している。」（Wikipedia「大麦」）という記述が参考になります。私は秦氏が大麦栽培を普及させ、日本列島各地に栽培が広がっていったと推測します。その理由の第一は、米作とセットで栽培可能で、それにより連作障害も避けられること（二毛作。次の段落で述べる）。理由の第二は、乾燥と寒さに強い大麦は、稲が栽培できない場所や地域でも収穫でき、米に代わる主食になることです。

４．二毛作

私は子供の頃の水田の様子を思い浮かべました。田植えの前には水田に植えられた麦が黄金色に稔っていました。6 月、刈り取りが終わるなり畑を耕し水を引き、稲の田植えが始まりました。稲を表作（おもてさく）、麦を裏作（うらさく）とする二毛作です。二毛作は中国江南地方では紀元前から普通に行われていました。日本では鎌倉時代（13 世紀）に普及したとされていますが、その始まりは秦氏が 5 世紀に移住してきたことにあるのではないか、秦氏は二毛作の裏作として大麦栽培を活用したのではないか。一つの田から一

年に二度穀物を収穫できるのです。少なくとも近畿圏と西日本の灌漑や土壌条件の良い地域では米と大麦の二毛作が始まり人口密度が上がったと考えます。

５．鉄製農具

秦氏は進んだ製鉄技術を日本にもたらしました。そして大量の鉄製品を生み出しました。

5 世紀以降の遺跡からは、鉄製の農具が出土します。鋤（すき）や鍬（くわ）の先に付ける刃先部分です。

鉄の刃先がなければ畑を耕すのは大変です。鉄の刃先があってこそ、土壌を引き裂き、深く耕せるのです。深く耕せば土に酸素が入り、土が軟らかくなり、根が深く張ります。しっかり張った根から充分な栄養と水を吸収します。穀物の質が上がり、収穫量も断然増えます。

鉄製の鍬、それに次の項で述べる牛や馬に引かせる鋤の使用で開墾が進み、耕作地が一気に拡大しました。新しく伝わった大麦、それに大豆などの豆類、粟（あわ）、蕎麦、稷（きび）など、土地や気候条件により選択され収穫量が急速に増えていきました。又、用水路を引いて水田を開墾し、稲作面積も拡大していきました。

鉄鎌もこの時期に使用が拡大したはずです。それまでは穂先だけを石包丁で切り取るか、しごいて穀粒だけを収穫していました。鉄鎌があれば収穫時に株ごと刈ることができます。稲藁（いなわら）は牛や馬の餌になりますし、牛糞や馬糞と共に堆肥にされたことでしょう。翌年は先ず 5 月に苗床を作ります。6 月になると堆肥をまいて田を耕し、水を張って苗を植えます。かき混ぜられ栄養が補充された柔らかい泥の中で苗はしっかり根を張り、秋に豊かな稔りをもたらしました。

６．農耕用牛馬

5 世紀、牛に引かせる鋤（すき）の使用が始まりました。刃先は鉄製です。人力よりも圧倒的に耕作効率が高まります。

古事記や日本書紀に記述された朝鮮半島南部の人ツヌガアラシトやアメノヒボコの話には農村の牛が出てきます。秦氏の元の居住地では既に牛を耕作に使用していたことを暗示すると共に、これら二人とも日本にやってきたことから、日本への伝来も示しているように思えます。

牛と、一部馬による耕作、農地の開墾は西日本から東日本へと伝わって行きました。西日本で始まってから三百年後の東京の様子が書かれた次の文章で、当時の状況を知ることができます。

「奈良時代、甲和・仲村・嶋俣の三里で構成されていた大嶋郷は、現在の柴又・奥戸・立石などの地域と推定されています。その遺跡からは、当時を物語る土器などの遺物とともに、牛や馬の顎（あご）の骨や歯などが発見されています。（中略）

本郷遺跡（奥戸二丁目ほか）では、奈良時代のころに使われていた水路から、故意に割って粉ごなにした須恵器の破片とともに、馬の顎の骨や歯などを出土しています。これらは、人為的に埋める際に納められたもので、馬は古録天東遺跡と同様に、頭だけが供えられていたようです。

このほか、鬼塚遺跡（奥戸一丁目ほか）では、井戸に牛の頭が供えられていたり、柴又帝釈天遺跡（柴又七丁目）や正福寺遺跡（奥戸四丁目ほか）では、馬の歯のみを穴に埋めた例もあります。

これらの牛や馬は、農耕を背景に行われた祭礼に供えられたようです。祭礼は、新しく畑をおこすときや豊作祈願、雨乞いなど多様な目的で行われ、土地を耕すなどに使われた大切な牛や馬をささげたのです。

大嶋郷内で、このような牛や馬を供えた儀礼が多いということは、奈良時代以降において農耕が重要な生業活動であったとともに、牛馬の飼育も盛んだったことを裏付けています。最近の研究では、大嶋郷付近に公営の牧場が設置されていたという考えも示されています。」（葛飾区郷土と天文の博物館）

７．水田面積の拡大と農業土木技術

牛馬耕作に伴い水田一枚の面積が大きくなりました。それまでの水田は 10 平米程度の不揃いな形で、それぞれの田に水路が隣接しておらず、畦（あぜ）越しに水を取り入れていました。それが今日のように直線の畦で区切られた細長く広い面積の田になったのです。

一枚の水田面積の拡大に伴い、用水路が引かれました。又、用水路を引いて水田を開墾していきました。水田は水位を一定に保つ為に、一枚毎に水平でなければなりません。面

積が大きくなるほど水平にするのが難しくなります。そして灌漑用水を取り込む為に、上流から下流に向かって順番に田の高さを下げて行く必要があります。一枚毎の田の水平、微妙な勾配を持つ水路の建設、その勾配に合わせた一枚一枚の田の高さ調整など、土木技術も秦氏によってもたらされたと推測できます。それは、次の段落で述べる松尾大社が、「古来、開拓、治水、土木（中略）の守護神として仰がれ」としていることでも裏付けられます。

８．酒造りの技術

穀物が豊富に実ると余剰米を利用して酒造りも盛んになります。今日、醸造家は秦氏の氏神を祀る松尾大社（京都市西京区嵐山宮町）を最も大切な酒造りの神として信仰しています。秦氏は酒造りの最新技術も伝えたのです。同社の説明には「古来、開拓、治水、土木、建築、商業、文化、寿命、交通、安産の守護神として仰がれ、特に醸造の祖神として格別な尊敬を受けております。」と書かれています。

秦氏の技術により酒造りがどのように改善されたのか。私は、中国の伝統的な醸造酒である黄酒（こうしゅ。日本で紹興酒や老酒と呼ばれる酒の総称）の製造方法から推測して、発酵容器（当時は酒壺）の中で糖化とアルコール発酵を同時に行う、並行複発酵（へいこうふくはっこう）の技術がもたらされたものと推測しています。それまでは先ず甘酒を作り（糖化）、その甘酒を酒に変え（アルコール発酵）ていたはずです。即ち、糖化とアルコール発酵は各々単独で行われていたのです。それを酒壺の中に酵母菌の湧いた液、米麹、蒸した米、水を合わせて入れ、米麹によって米が溶かされブドウ糖ができたしりから酵母菌がそれを食べてアルコールを作り出す、効率の良い酒造りに変貌させたのです。この技術は現代の清酒造りにもそのまま受け継がれています。

米麹の糖化酵素　　酵母菌
↓　　↓
澱粉→（糖化）→ブドウ糖→（アルコール発酵）→酒精

写真３：松尾大社鳥居
写真４：奉納酒樽（松尾大社）
写真５：松尾大社拝殿

９．偉大なる秦氏

こうして見ますと秦氏の偉大さに改めて頭が下がります。先に引用した「日本文化の形成」の著者・宮本常一氏は秦氏の「ハタ」という読み方は、畠（はた。注）に通ずることを示唆されています。秦氏が農業に果たした役割が深かったことを意味します。機織り（はたおり）の「ハタ」も同じと考えて良いでしょう。

秦氏は日本に移住して人口が急増しました。「秦人は六世紀中頃には全国に七〇〇〇戸をこえるほど分布を見ていた。当時は、一戸に十五人は居たと思われるから、人口にすると一〇万人をこえていたと見ていい。」（宮本常一著「日本文化の形成」）。我々日本人には少なからず秦氏の血が流れています。

注：宮本氏によれば昔は通常のものを「畠」、焼き畑によるものを「畑」として区別していた。

第十四章　平城遷都と山の神

第九章 **神器の創造と変遷**では、天武天皇が編纂させた歴史書の中には蛇神である山の神信仰が含まれており、藤原不比等は記紀の編纂にあたりそれらを消したものの、スサノオの八岐大蛇（やまたのおろち）退治とヤマトタケルが伊吹山の神に敗れる部分に残ったことを述べました。本章では山の神について考察します。

家庭で一番エライのは、山の神。古女房には頭が上がりません。刑事コロンボも「うちのカミサン」が口癖でした。この山の神の本質に迫った好著、「山の神」（吉野裕子著）を読みました。

古代の人々は八岐大蛇の描写に見られるように、うねうねと続く山脈に躍動する蛇の姿を見ました。円錐形の山にとぐろを巻く蛇の姿を見ました。桜井市街の東部に円錐形に突き出す三輪山（みわやま）の神は現在は大物主とされていますが、その名の「みわ」、即ち「巳輪」が示すように本来はとぐろを巻く蛇でした。大神神社（おおみわじんじゃ）が三輪山自体をご神体と捉えているのはその名残です。

古来、山の神とは「山を他界とし、そこを領する祖霊として認識され、信仰された蛇神」です。水田稲作が始まる弥生時代、「蛇を野鼠の天敵として尊重し、崇め、稲・田圃・穀倉の守護神として信仰するにいたる」。即ち、豊穣を司る田の神の性格も併せ持つようになりました。

藤原京の内裏を囲む大和三山（やまとさんざん）は何れも円錐形で、蛇神である山の神信仰の下に都の位置を定めたものと推測できます。一方、平城京はそのような地形とは関係がなさそうです。遷都が行われた理由と背景は何か。吉野氏の助けを借りて、山の神信仰の変化と共に論じます。尚、本章の引用文は特段のことわりがない限り吉野氏の同著からのものです。

写真１：耳成山を南から望む
写真２：香具山を西から望む
写真３：畝傍山を東から望む

１．蛇から猪へ

ヤマトタケルは伊吹山の山の神との戦いの結果命を落としますが、この山の神の化身が日本書紀では蛇です。一方、同じ場面を描く古事記では猪です。当時、山の神の神格は蛇と猪の二種類あったことが解ります。より古いと考えられる蛇に、なぜ猪が加わったのか。吉野氏は中国から伝わった「易・陰陽五行等による一種の宗教改革の結果」であることを解明します。

八卦方位図：

（北）
地
山　　雷
（西）水　　火（東）
風　　沢
天
（南）

十二支方位図：

（北）
子
戌亥　　牛寅
（西）酉　　卯（東）
申未　　巳辰
午
（南）

易の八卦（はっけ）の「山」は方位の西北、即ち戌亥（いぬい）を意味します。正倉院御物（しょうそういんぎょぶつ）石版彫刻の「戌亥の図」は猪が犬に襲いかかる図で、裏側に「山伐山代」と書かれています。「山、すなわち猪が、山の代用の犬を伐つというので、本当の山は猪であり、犬はその代用」であることを意味しています。即ち「山」は方位を介して猪（亥）と結びつけられました。

十二支月の五行配当：

冬
水気（旺）
子
11 月
水気（生）**亥** 10 月　　12 月　**丑**　水気（墓）
---　　---
金気（墓）**戌** 9 月　　1 月　**寅**　木気（生）
秋　金気（旺）**酉** 8 月　　2 月　**卯**　木気（旺）　**春**
金気（生）**申** 7 月　　3 月　**辰**　木気（墓）
---　　---
火気（墓）**未** 6 月　　4 月　**巳**　火気（生）
5 月
午
火気（旺）
夏

日本の山の神の本質は「山を他界とし、そこを領する祖霊として認識され、信仰された蛇神」ですが、豊穣を司る田の神の性格も併せ持ちます。

山の神のシンボルを中国思想の観念的な「山」と方位を示す「亥」を結びつけて猪（亥）としたとしても「山の神」である以上、五穀豊穣の神、田の神の性格も持たせる必要があります。「山」を方位の「亥」、更に一年 12 ヶ月の「亥」（10 月）と結びつけることによってそれが可能になります。その仕組みは次の通りです。

「中国哲学の最大の特徴の一つは、この世のすべてのもの、すなわち有形無形を問わず一切のものを木火土金水の五気のいずれかに還元することである。」

十二支月の五行配当をご参照下さい。木、火、金、水の各気は春夏秋冬に割り振られます（土気は、立春、立夏、立秋、立冬の前、各々約 18 日間とする）。各季節はそれぞれ始まりの月（生）、盛んな月（旺）、終わる月（墓）で構成されます。春（木気）なら 1 月に生まれ、2 月に盛んになり、3 月に終わります。

更に中国思想では、各気はその前の季節に準備が始まっており（生）、後の季節に衰える（墓）という一年のサイクルを考えます。生、旺、墓の間隔は 4 ヶ月です。

木気（春）：亥（10 月）生　卯（ 2 月）旺　未（ 6 月）墓
火気（夏）：寅（ 1 月）生　午（ 5 月）旺　戌（ 9 月）墓
金気（秋）：巳（ 4 月）生　酉（ 8 月）旺　丑（12 月）墓
水気（冬）：申（ 7 月）生　子（11 月）旺　辰（ 3 月）墓

五穀は植物ですから木気にあたります。木気は春。卯（2 月）が旺です。木気は亥（10 月）に生まれ、最も盛んな卯（2 月）を経て、4 ヶ月後の未（6 月）に一年のサイクルを終えます。中国思想では田の神をこれら 3 つの月に祀ることによって五穀豊穣がもたらされるとします。一年のサイクルの中で田の神が地上に降りてくるのは亥（10 月）。五穀豊穣をもたらす田の神は「亥」を媒介として猪（亥）をシンボルとする山の神になったのです。

消長卦：

寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	子	丑
1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
--	--	--	―	―	―	―	―	―	--	--	--
--	--	―	―	―	―	―	―	--	--	--	--
--	―	―	―	―	―	―	--	--	--	--	--
―	―	―	―	―	―	--	--	--	--	--	--
―	―	―	―	―	--	--	--	--	--	--	―
―	―	―	―	--	--	--	--	--	--	―	―
			全陽						全陰		

易の消長卦（しょうちょうけ）の亥（10月）は全陰を意味します。全陰は全陽に対する概念で男女で言えば女です。これが女房を「山の神」と呼ぶ根拠となりました。

２．蛇を消す理由

古来、山の神のシンボルは蛇でした。新たに猪（亥）をシンボルとする山の神を作った理由は何でしょう。それは蛇を消すためでした。この章と次の第十五章で述べますが、蛇を消す作業が意図的に行われています。誰が、いつ、何のために蛇を消したのでしょう。

蛇を消したのは藤原不比等です。天武天皇の死後、不比等が権力を握ります。第六章で述べましたが不比等は天智天皇の子です。不比等は天武の皇后を持統天皇（41代じとう）として擁立します。娘を文武天皇（42代もんむ）、そしてその子の聖武天皇（45代しょうむ）に嫁がせます。即ち聖武天皇の母と配偶者は何れも不比等の娘です。その間に生まれた姫が後の孝謙天皇（46代こうけん）になります。藤原氏と天皇家の混血王朝が始まったのです。この王朝を正当化し、政権を永続させる為にはそれを裏付ける「歴史」を造る必要があります。不比等は古事記と日本書紀の編纂を命じました。遷都も行いました。神社建設も行いました。これら一連の事業の中で蛇神を消す作業が行われたのです。

なぜか。それは鏡（カカミ）が太陽、即ち太陽神の象徴である一方、蛇身（カカミ。「カカ」は蛇の古語）、即ち山の神の象徴でもあったからです。太陽神アマテラスを皇祖神とし（第八章をご参照下さい）、鏡を太陽神の子孫である天皇の正統性を示す神器とするにあたり、蛇と鏡の関係を断ち切り、鏡を純粋な太陽神の象徴にする必要があったものと私は考えます。

蛇をシンボルとする日本の山の神は、五穀豊穣という現実的な生活上の利益の共通性によって中国思想で新しく造られた山の神に取って代わられます。こうして山の神のシンボルは猪（亥）になり、蛇は消えていったのです。

蛇信仰は影を潜めました。ただ、他界を領する祖霊としての山の神は、葬送の列の先頭の蛇や龍の飾りとして残りました。又、シメ縄や祭りの藁蛇（わらへび）、案山子（かかし。「カカ」は蛇の古語）は田の神としての蛇信仰の名残です。正月の鏡餅は「カカミ」、とぐろを巻く蛇の姿を表しています。吉野氏は、カミ（神）という日本語も、「カ」は蛇、「ミ」は身、即ち蛇の姿から来たと推測しています。

３．藤原京

天武天皇は伊勢神宮を創建し太陽神を祀りました。藤原京は、その天武天皇が建設を始めたものです。その藤原京には蛇と結びついた山の神信仰が隠れています。太陽信仰と山の神信仰は共通の象徴である鏡を介して近い関係にあったと推測できます。詳しく見てみましょう。

「藤原京」は現代の学術呼称であり、日本書紀には新益京（あらましのみやこ）と記されています。日本書紀には持統天皇が691年に地鎮祭を行い、694年に遷都したとあります。しかし、天武天皇が皇后（後の持統天皇）の病気平癒を願って680年に発願し建立した薬師寺が、発掘の結果、正確に右京八条三坊の地に納まっていることから、天武天皇が建設を開始したことは間違いありません。

新益京は中国に倣い日本初の恒久的首都として建設されたものですが、その広さは後に造られる平城京よりかなり広く、5.3km 四方。東西南北に走る道路で碁盤目状に区切られており中国の都に似ていますが、大きな違いがあります。それは、内裏（だいり）が都の北側中央ではなく全体の中央にあること、その内裏が大和三山に囲まれていることです。北は耳成山（みみなしやま）、東は香具山（かぐやま）、西は畝傍山（うねびやま）。何れの山も円錐形で、名称も蛇神を暗示しています。「みみ」は巳（み）、即ち蛇。「かぐ」は蛇の古語「カカ」。「うねび」は「うねぶ」という蛇の動きのようです。内裏、即ち王

宮は、蛇神、即ち山の神に守られていたのです。

写真４：藤原京内裏より北に耳成山を望む
写真５：藤原京発掘現場

４．平城京
新益京が蛇を象徴する山に囲まれているとすれば、蛇神を消すには都を移転させるしかありません。
大宝 2 年（702）、32 年ぶりに遣唐使が派遣され、その二年後日本に戻ってきました。遣唐使とは言うものの彼らは唐の都・長安に行ったのではありません。周の都・神都です。
当時、中国は武則天という中国史上唯一の女帝の時代です。武則天は唐の高宗の皇后でしたが、690 年に皇帝に即位し国号を周と改めました。王朝の簒奪です。都を洛陽に定め、神都と改名して長安から遷都していたのです。藤原不比等はこれを利用しようと考えました。日本にも自身が擁立した持統という女帝が立っています。自身が創始者となる藤原氏と天皇家の混血王朝を周になぞらえて、その始まりを持統天皇にしようと考えたのです。周は一代限りで終わるのですが、未来のことは知る由もありません。
持統天皇は遣周使が出発した年の暮れに亡くなっています。不比等は編纂を進めていた国史・日本書紀に持統天皇の治世を記述するにあたり、その即位年を武則天に合わせ持統天皇元年ではなく持統天皇 4 年（690）としました。武則天は即位年に遷都しています。そこで持統天皇も即位年に新益京遷都を決意し、その四年後の 694 年に遷都したことにします。しかし新益京はあくまでも天武が造った、蛇神に守られた都です。不比等は周を意識して新しい都を建設することにしました。それが平城京です。平城京のコンセプトは、藤原氏と天皇家の混血王朝の為の新しい都です。ただ、不比等は新益京の内裏を「藤原宮」と自身の姓を冠して日本書紀に記し、その時から自身が特別な存在であったことを記録に残しました。
平城京は唐の都・長安を模して造られたのではありません。周の神都（洛陽）を範としたのです。それは平城京が神都と同じ緯度（平城宮中心北緯 34 度 41 分 24 秒）に建設されたことで明らかです。藤原京との位置関係で言えば、北に約 20km。中心線は西に 1km ずらしました。同一直線上にならないように何らかの意識が働いたものと私は考えています。

写真６：平城宮朱雀門（復元）
写真７：平城京大極殿（復元）

５．平城京の守護神
新都には蛇に代わる新たな守護神が必要です。そして作り出されたのが、タケミカヅチです。タケミカヅチは、日本書紀の中でフツヌシと共に高天原（たかまがはら）から降臨し、葦原中国（あしはらなかつくに、即ち日本）を平定した神としました。
平城京遷都の前年、和銅 2 年（709）にタケミカヅチを三笠山の麓に祭りました。これが春日大社の起源です。タケミカヅチは常陸国鹿島から勧請したことにしましたので、鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）を創建しました。そしてフツヌシを祭る香取神宮（千葉県香取市）を加えました。

６．神社建設
古来、山の神は日本中にあまねく信じられており、山の神そのものを消すことは不可能ですが、そのシンボルたる蛇を消すことは可能です。藤原不比等は新しい神話と歴史を編み、古事記と日本書紀にまとめました。記紀に記載された神話を可視化するために諸神を祀る施設として神社を建設して行きました。不比等は、新しいシンボルを持つ山の神の祭祀の場として、新しく創造された「神社」という形態を使うことにしたと私は考えます。
それまで神は、祭祀の為の固定化した建物を持たずに祭られてきたのです。神社を造り、祭祀の形を創造し、諸神や猪（亥）をシンボルとした山の神を祀りました。不比等の命令の下、日本各地に神社が建てられていったはずです。それに協力したのが秦（はた）氏であろうと私は考えています。京都の太秦（うずまさ）には秦氏の棟梁が住んでいました。そこにある松尾大社は背後にある松尾山の山の神を秦氏の祖神として祭ります。松尾大社は 701 年に創建されています。日本に神社建設が始まった時期を知る大きな手がかりと考えて良いでしょう。

７．神社の変容

8 世紀初期、山の神を祭る神社建設が開始され、そこで行われる豊作祈願を通して新しい山の神、その祭り方が日本中に広まって行きました。吉野氏の言う「易・陰陽五行等による一種の宗教改革」です。松尾大社のように当初より特定の祖神、王、祖先の信仰と山の神信仰は習合していました。更に神社は、山の神のみならず生活に密着した神々を取り込みます。

早くも奈良時代後半には神社境内に仏教寺院が建てられ神仏習合が始まります。不比等が考案した神社の形態は百年も保たなかったのです。神はいわゆる神前読経（しんぜんどきょう。神の前で仏教の経典を唱えること）で祀られるようになり、神は仏が化身として姿を現したもの（本地垂迹説）という考えが定着し、神と仏の融合が進みました。ほとんどの神社は仏教寺院の一部に組み込まれ、寺院が山号を持ちます。祀られる仏とそれに対応する神の数も増えました。そして江戸時代末を迎えます。

明治初年の廃仏毀釈で寺院は破壊され、かつて神がどのように祀られていたのか、ほとんどの記録が失われました。神社は、明治維新政府の政策により太古の昔から続いている形態として再生され、今日に至っています。参拝の作法「二礼二拍手一礼」も明治政府が定めたものです。

８．不比等が残したもの

残ったものもあります。**1.蛇から猪へ**の最後に消長卦の亥は全陰で、女性を表すことを述べましたが、女房を「山の神」と呼ぶ習慣は今日まで続いています。

神社は鳥居も含め朱に塗られていますが、これも当初のままのはずです。一般に神社の建物は白木（しらき。塗装されず木の生地が見える状態）であったものが、神仏習合によって仏教寺院に倣って朱に塗られたとされています。仏教寺院が赤いのは、中国で始まった習慣が日本に伝わったものです。その中国では現代に至るまで赤に魔除けの意味があります。日本初の神社は松尾大社と私は考えますが、その松尾大社は中国系帰化人・秦氏によって創建されたのですから、神社は魔除けを意識して当初から朱に塗られたと私は考えるのです。

「中国思想では田の神を生、旺、墓の 3 つの月に祀ることによって五穀豊穣がもたらされる」と考えたことを先に述べました。旧暦 10 月（生）、2 月（旺）、6 月（墓）に田の神、即ち山の神を祀る行事も日本各地に残ります。

９．山の神を迎える行事

旧暦 10 月に山の神が天から降りてきます。山の神を迎える行事は奈良県山辺郡山添村、伊勢北西部から伊賀にかけての山深い村々にも受け継がれています。吉野氏は語ります。

「（山の神を祭る行事である）カギヒキ・クラタテ（注）は一見、奇妙な行事にみえるが、これはまさに、中国古典に説かれていることの実践と受けとめられるのである。

その折、その時期にふさわしいことをする、というのが一年を生活の単位とした場合の中国の古い教えである。

奈良・伊賀の山中の村の奥深く、行われる旧十月の冬祭りは、時間的空間的に遠く距たった国の古い教えの多少形を変えた実践と思うとき、何時、何人が村人にこれを教え伝えたのか、何か心をゆり動かされる思いがする。」

注：カギというのは雑木の又がカギ状になった所を切り取ったもので、カギヒキはカギを山の神の木に引きかけ、豊作を祈る言葉を唱えながら引く行事。クラタテというのは半紙を山の神の前の地面に敷いて、半紙の四隅と中央に棒を建てる行事。四隅の棒には紙の幣、中央の棒にはところ・柑子・柿などを突き刺す。（吉野裕子著「山の神」講談社学術文庫 P.149～151 から大和高原奥地の豊原・波多野地区の行事を要約）

１０．山の神を鼓舞する行事

旧暦 2 月は木気が最も盛んになります。桜が咲くのは旧暦 2 月。吉野氏は触れていませんが、桜花を愛でる習慣も山の神と関係があります。農民は集落のそばの山や丘で酒食を伴う花見をする習慣がありました。「さくら」の「さ」は田の神。「くら」は座。神が居る場所です。田の神は満開の桜の木に宿ります。花見は美しく咲き誇る山桜に盛んな木気を感じ、山の神を鼓舞し、豊作を祈る行事だったのです。

今日、桜と言えば染井吉野（そめいよしの）。江戸時代末に開発された品種で、葉が開く前に花が満開になり淡いピンクが回りの環境と隔絶した華やかさをもたらします。明治

時代以降、各地の街やその周辺に植えられ桜のイメージを一新しました。桜を愛し、大切にする心が桜の植樹を盛んにしました。農業から切り離された街の人々にとって山の神との繋がりは薄れましたが、花見を通して山の神信仰の片鱗は現代の我々にも受け継がれたのです。

写真８：郡山城址の桜

１１．山の神を送る行事

旧暦 6 月には田の神送り。サノボリと呼ばれる行事です。サノボリの「サ」は田の神。田の神、即ち山の神が一年のサイクルを終えて昇天するのです。田植え後の慰労の宴席を兼ねたせいか広く日本各地に残ります。民俗学者の宮本常一（1907-1981）氏が「日本の村・海をひらいた人々」に書き残した記録もこの一例のようです。

「いまではあまり見かけなくなりましたが、西日本では、田植がすむと虫おくりといって、たいまつをたき、かね太鼓をうって、田のほとりをまわってあるく行事がありました。このとき、実盛様という人形をつくって、送ってゆく所がたくさんありました。」

この「実盛様」は「サノボリ様」。山の神に形を持たせたものに違いありません。「虫」も田の神を象徴しています。

「（田の）神の御姿は定まった像がなく、魚とか虫とかの形を仮りて、人に姿を見せられることがあるとも伝えられている。」（吉野裕子著「山の神」に「総合日本民俗語彙」巻二より引用）

第十五章　鏡を割った思想

日本経済新聞 2010 年 2 月 13 日朝刊の文化面に次の記事が載りました。
「81 面以上の青銅鏡が副葬されていたことが判明し、初期ヤマト政権の威容を物語る資料として注目される桜井茶臼山古墳（奈良県桜井市、3 世紀末～4 世紀初め）。謎の一つが、出土した鏡がすべて小さな破片だったことだ。権威の象徴だった鏡がなぜバラバラにされたのか。”お宝”を巡る盗掘者の意識の違いが理由ではないか、との見解が浮上している。（以下、本文略）」（奈良支局長　竹内義治　大阪社会部　川本太郎）

鏡は埋葬時には割れていませんでした。それは、石室の朱が鏡の断面には付着していないことで解るとしています。誰が割ったのか。薄い小片のみで、厚みのある破片や大きな破片はありません。このことから、「盗掘者が故意に割った」上で、「銅地金として再利用する目的だった」可能性を指摘する福永伸哉・大阪大学大学院教授の見解を紹介し、記事の一応の結論としています。
盗人に成り代わって考えてみましょう。そのまま持ち出した方が楽に決まっているのに、わざわざ割ったりするでしょうか。破片が飛び散るとすれば、そのロスも考えなければなりません。鏡は、何か特別な意図で割られ、その後進入した墓泥棒が「銅地金として再利用する目的」で持ち出したと考えるのが自然です。鏡を割った人と持ち出した人は別です。
誰が何の目的で墓を暴き、鏡を割ったのか。これがこの章のテーマです。

写真１：桜井茶臼山古墳（墳丘長 207m）

１．太陽の道

小川光三氏が発見した「太陽の道」（「大和の原像　知られざる古代太陽の道」大和書房 1973 年）。北緯 34 度 32 分の緯線は、東から伊勢斎宮（さいぐう）跡、箸墓（はしはか）古墳を通って淡路島の伊勢の森までを結びますが、その線上には太陽神・アマテラスに関する神社、遺跡があるというものです。
中心となるものは、箸墓古墳です。この墓は、奈良盆地に最初に造られた大前方後円墳です。造営の時期は 3 世紀の三分の二が過ぎた頃です。

「太陽の道」を箸墓古墳から太陽の昇る東に向かって検証してみましょう。
箸墓古墳　北緯 34 度 32 分 20 秒
檜原神社　北緯 34 度 32 分 22 秒（箸墓から 1.4km）
室生寺　　北緯 34 度 32 分 16 秒（箸墓から 6.1km）
長谷寺　　北緯 34 度 32 分 9 秒（箸墓から 18.5km）
斎宮跡　　北緯 34 度 32 分 28 秒（箸墓から 72.6km）

先ず、檜原（ひばら）神社。元伊勢と呼ばれ、伊勢神宮が造られる前から続く太陽神祭祀の場とされるものです。現在に至るまで社殿はなく、藁縄（わらなわ）の張られた鳥居のみ。聖なる山・三輪山（みわやま）の麓で太陽を拝む場です。
室生寺は、密教寺院として有名ですが、創建については明らかではありません。ただ、天武天皇の時代に始まったと言われています。天武天皇は、伊勢に斎宮を建設し太陽神の祭祀を始めました。
長谷寺の創建も明らかではありませんが、寺伝ではやはり天武天皇の時代としています。
斎宮は、太陽神アマテラスを祭る巫女・斎王の住まいであり、祭祀の為の施設です。
緯度の 1 秒は 31m です。箸墓古墳と最も差の大きい長谷寺でも 340m の違いに過ぎません。しかも何れも広大な敷地ですから一致していると考えて良いでしょう。
箸墓に葬られた人物は、太陽信仰と密接な繋がりを持っていたと考えられます。

写真２：箸墓古墳（墳丘長 278m。左奥に三輪山）
写真３：檜原神社藁縄鳥居の内側の小さな三ツ鳥居
写真４：斎宮跡

２．邪馬台国の東遷

箸墓古墳に葬られた人物を考察するにあたり、避けて通れない話題が魏書東夷伝倭人条

（ぎしょとういでんわじんじょう。通称「魏志倭人伝」）に書かれた邪馬台国がどこにあったかという論争です。ヒミコは魏に絹織物を献上しており、その絹織物の出土情況からヒミコは北九州の女王であったと推定されてきました。森浩一（1928-2013）氏の著書「古代史の窓」（第一章 2 絹の東伝）から引用しましょう。

「布目氏（引用者注：古代繊維の研究者である布目順郎）の名著に『絹の東伝』（小学館）がある。目次をみると、『絹を出した遺跡の分布から邪馬台国の所在地を探る』の項目がある。簡単にいえば、弥生時代にかぎると、絹の出土しているのは福岡、佐賀、長崎の三県に集中し、前方後円墳の時代、つまり四世紀とそれ以降になると奈良や京都にも出土しはじめる事実を東伝と表現された。布目氏の結論はいうまでもなかろう。倭人伝の絹の記事に対応できるのは、北部九州であり、ヤマタイ国もそのなかに求めるべきだということである。この事実は論破しにくいので、つい知らぬ顔になるのだろう。（中略）
布目氏は絹の東伝の背後に、絹文化をもった人の集団の移動があったと考え、邪馬台国の東遷説を支持されている。
絹の東伝に類似するのに、銅鏡愛好の風習の東伝がある。北部九州では弥生時代中～後期に中国人が”王”とよんだ人を含め支配者層の人たちは葬られるときに銅鏡を副葬した。しかも前原市の三雲、井原、平原などの古墳では二十～三十枚の銅鏡を副葬している。
これにたいして、弥生時代の奈良県域では、弥生遺跡はたくさんあり、しかも大面積の発掘がおこなわれているのに、北部九州の弥生社会でのような銅鏡副葬の風習の形跡は皆無である。御所市名柄で、多紐細文鏡一面が出土しているが、これは東北アジアで流行したもので化粧道具としての鏡ではない。
ところが近畿地方で前方後円墳の築造がはじまり、絹が使われだすとともに、ほとんどの古墳に銅鏡が副葬されはじめ、しかも二十～三十枚の多数の銅鏡を副葬する風習もあらわれる。北部九州の文化が伝わったのは事実とするほかない。その背後に集団の移動を想定すると邪馬台国東遷を考えるのが説明しやすい。こうなると、”ヤマタイ国はどこですか”にたいして”いつの時代のヤマタイ国ですか”と問い返さなければならない。」

ところが近年の纒向遺跡発掘成果により邪馬台国（ヤマト国）は、3 世紀初めにヒミコを王として新たに造られた連合国でありその首都が纒向であることが明らかになってきました。絹織物は九州で調達し魏に献上することができました。弥生時代が終わる 2 世紀まで、即ち漢王朝の中国にとって、倭国とはイト国（福岡県糸島地方）でした。上記三雲、井原、平原など多くの銅鏡を副葬した遺跡はイト国のものです。ヤマト国ができてから前方後円墳に銅鏡を副葬するようになりました。ヒミコはイト国の王或いは王族だった可能性があります。

写真５：吉野ヶ里遺跡

３．7 世紀末の常識
箸墓が造営されたのは壬申の乱（672）の四百年前のことです。壬申の乱の時にもこの墓が誰のものか、当時の人々は知っていました。
「箸墓とみてまず間違いのない古墳が、「紀」（引用者注：日本書紀）にもう一度出ている。しかも、扱いのランクがあがって「箸陵」として出ている。「紀」によると、壬申の乱（六七二年）のとき、戦の勝利を祈願するため、大海人皇子（のちの天武）側がイワレ彦（神武）の陵に馬や兵器を奉っているのと、三輪君高市麻呂らが上道方面で、箸陵のもとに戦っているのと、陵関係の記事が二つある。
ぼくは前に、『想像が許されるならば、皇位争奪の争乱（壬申の乱）にさいして、いち早く始祖王の墓、および大和の王権にとって伝説のうえで由緒ある箸墓を手中におさめたり、戦勝の祈願をおこなうことは、皇位の正統性あるいはその地域にたいする支配の正統性を主張するうえで、重要な手段であったとみてよかろう』と述べたことがある。」（森浩一著「記紀の考古学」第 3 章箸墓伝説と纒向遺跡）

記紀の編纂を命じた藤原不比等も箸墓古墳が誰の墓であるかを知っていたはずです。

４．箸墓の主

箸墓の主は誰か。ヤマト国ができてから最初の大前方後円墳であることから初代の王であるヒミコ墓と考えることができます。記紀によれば実質上の初代天皇は崇神ですから、ヒミコは崇神天皇であり、箸墓は崇神天皇陵ということになります。

箸墓古墳ができたのは 3 世紀を三分の二過ぎた頃です。魏志倭人伝によればヒミコは正始八年（247）には既に亡くなっていますので 20 年程の時差があります。箸墓の前に造られた勝山古墳（墳丘長 114m）、矢塚古墳（墳丘長 96m）、石塚古墳（墳丘長 93m）、ホケノ山古墳（墳丘長 72m）という 4 つの小さめの古墳の何れかがヒミコ墓という可能性もありますが、先に引用した森浩一氏の指摘からすればやはりヒミコ墓と考えるべきかもしれません。

「気になるのは魏志倭人伝に箸墓の大きさが「径百余歩」と記録されていることです。（中略）後円部径の 160m を歩に換算すると、約百一歩と「径百余歩」が誤差の範疇とみなすと、魏志倭人伝の記事は、円丘の記録なので、築造過程の後円部の情報ではなかったかと想像できます。」（纏向学からの発信　第 9 章　小山田宏一）との記述もあります。

写真６：箸墓古墳の宮内庁掲示（「倭迹迹日百襲姫」の記載）

５．蛇と鏡の分離

日本書紀では、ヤマトトトヒモモソ姫（以下、モモソ姫）を葬ったのが箸墓としています。モモソ姫とは何者なのでしょう。

崇神は、山城（やましろ）のタケハニヤス彦の反乱を知ります。古事記では、崇神自身それに気付きますが、日本書紀ではモモソ姫がそれに気付き、おかげで崇神は反乱を平定することができました。予知能力、透視能力のある女性です。

モモソ姫は大物主の妻になります。大物主の正体は実は蛇でした。その姿に驚いて声を上げたので夫は怒って人の姿に戻り、山に飛び去ります。モモソ姫は箸で性器を突いて死にます。

大物主は三輪山の神とされています。山の神のシンボルは蛇であり、箸は蛇を表します（吉野裕子著「山の神」）。モモソ姫は蛇と交わり、箸、即ち蛇と共に死に、蛇と共に葬られたのです。箸墓、即ち蛇の墓。山の神のシンボルの蛇を葬ったということになります。慌ててモモソ姫のくだりを作ったのでしょう、日本書紀にのみ盛り込まれました。古事記の完成は 712 年。日本書紀の完成は 720 年です。前章で述べましたが、この頃山の神の象徴である蛇が抹殺されたのです。

山の神は蛇でした。そして鏡（カカミ）は蛇（カカ）の象徴でした。一方、鏡は太陽神の象徴でもありました。不比等は太陽神アマテラスを皇祖神とし、鏡を神器にしましたので蛇と鏡の関係を断つ必要がありました。そこで、中国思想の易・陰陽五行によって山の神の象徴を蛇から猪に変えました。そして山の神と結びついた太陽信仰を始めたであろう初代天皇の墓に蛇を葬ったのです。こうして鏡を媒介として結びついた山の神と太陽神は分離され、太陽神信仰は純化されたのです。

６．割った人

崇神王朝は 200 年間続きました。この間に築造された墳丘長 200m 以上の大古墳数が 14。冒頭の桜井茶臼山古墳もこれに含まれます。崇神王朝の日本書紀の記述は信用できませんが初代神武から 14 代仲哀まで 14 人。これと一致します。記紀編纂にあたって、大古墳の数から天皇数を決めた可能性がありそうです。

14 の大古墳の内、12 は奈良県内。大阪府藤井寺市に 1、岸和田市に 1。14 全てが王の墓ではないかもしれません。王は、ヒミコやその後継者である臺与のように女性もいたでしょうし、男王もいたかもしれません。残念なことに初代神武天皇から欠史八代を挟んで実質上の初代である第 10 代崇神から 14 代仲哀（ちゅうあい）天皇まで、記紀からこの王朝を追うことはできません。ヤマト国を継いだ物部は前方後円墳という墓形は受け継いだものの歴史は受け継がなかったようです（第八章　皇祖神アマテラスの創造　4. 天武の伊勢神宮　注 2 をご参照下さい）。

さて、冒頭の問いに戻ります。茶臼山古墳の銅鏡は誰が割ったのか。私は藤原不比等と考えます。不比等は崇神王朝が残した大規模な墓を暴き、鏡を割ったと思えるのです。残念なことに箸墓はもとより宮内庁が皇室陵墓に指定しているものは発掘が許されません。

おわり